
Love Addiction

結

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o v e A d d i c t i o n

【Nコード】

N 4 7 6 8 I

【作者名】

結

【あらすじ】

幼馴染の奏太が大嫌いな主人公、如月優弥。

優弥と奏太、そしてその他ユカイな仲間たちの物語。

#1 大嫌いな幼馴染。

『ちよつと奏太？日直サボる気？』

「・・・俺は今から竜の家いくの。お前1人でやってろ」
学校の授業が終わった放課後。

みんなが部活やら帰宅やらで移動したす頃、生徒達のざわめきの中、話題の中心人物は2人の高校生。

「また始まったよ。あの2人。」

「今度は日直か。」

「きゃあ！奏太くんだあ♪」

話題の中心人物の一人の女子生徒が騒いでいるクラスメイトへと視線をやった。

『部外者だまらっしゃい！』

たった今怒鳴ったのは主人公、如月優弥。
肩くらいまで伸びた黒髪が風になびく。

優弥の前には3人の男達。

右にいるのは白鳥竜。

毎回違った髪形をしていて、今日は茶髪を少しだけ後ろで束ねていた。

結構馬鹿だ。天然か？

左にいるのは日向叶。通称力ナ。

高校2年生にして身長150cmの小さい男。

黒髪のパでかあいらしい性格をしている。

そして真ん中にいるのが優弥と争っていた張本人、藤波奏太。

優弥の幼馴染。

茶色の髪のもで前髪が鼻くらいまで伸びている。

優弥と奏太が喧嘩をするのはいつものことだ。

優弥と奏太の間に突然叶が入ってきた

「奏ちゃん、喧嘩はダメだよ。僕たち待ってるから、日直やりなよ」

「??」

奏太は「めんどくせーな」と1回ため息をついた。

『全く。こっちもカラオケの約束あるんだからね!』

と、言ったところで後ろで友達の声がする。

「優ちゃーん。先にいつてるよー?」

『あ、うん!ごめん!あとでいくよー』

友人達に謝り、優弥は席に着いた。

竜と叶は近くの喫茶店で待っていることになったらしい。

気付けば教室に残っているのは優弥と奏太の2人だった。

『まったく……。何でこんなのであんなに人気あんのかわかんないよ。』

そう、奏太と叶と竜は1部の女子に結構騒がれている。

それぞれルックスが良いからだ。

「んなこと知るかよ。てか、終わったからあとお前やっておけよ」
学級日誌を書いたとたん奏太は教室を出ていった。

『はぁ……。』

優弥は日誌を先生へ提出してみんなの待つカラオケボックスへと向かった。

#2 テスト前日。

『送れてごめんねっ！』

学校の後、優弥は急いで友人達の待つカラオケへと向かった。

「おせーよ」

この少女は久堂千秋。中学からの友達。髪の毛は結構長めでサイドポニーになっている結構毒舌である。

「次、優ちゃん歌う？」

この心優しそうな少女は前原静香。

小学校からの幼馴染でふわふわな長い髪をされていて後頭部の方に赤いリボンがついている

女の子らしい女の子のため男子の間でも結構注目を浴びている。

『歌う歌うー』

優弥はすぐさま本を手にとって曲を選び始めた

「あ、優弥、これはこれはー？」

『あ、それいい！』

千秋にすすめられた曲を選び、曲が始まった

♪♪♪

『ふいー。やっぱこの歌いいね！！』

「優ちゃん歌上手い」

「ホラ！次！」

『あゝ楽しかったあ！ばいばい！』

駅でみんなと別れたと、優弥は家へと向かった

『ただいまあゝ』

「あら、お帰り」

リビングから母が顔を出した。

優弥の家は両親が居ないことが多いのだが今日は仕事が休みなのだ

ろうか。

優弥は部屋に入り、さつき歌った曲を流した

「おいコラ優弥」

隣の家の窓が開き、隣に住む幼馴染の声がした

『うつさいなあ！静かにしてよ！聞こえないじゃん』

優弥は隣に住む幼馴染、奏太に言い返したがすぐにまた言い返される

「お前こそうるせーんだよ！その音楽耳障り！」

『あつ！そつだ！明日テストじゃん！！！！』

「聞けよ」

『どーしよ！！！！まにあわないじゃん！！！！』

「いや、普通もつと早く気付かない？」

『っーか、奏太勉強は？！しなくていいの？！』

「お前と違うから勉強なんかしなくても高得点とれるの」

奏太が見下した様な目で優弥を見た

『黙れ！』

奏太は常に学年1位。優弥はだいたい10番内には入っているつもりだが1位にはなれたことがない。

『あゝ！！もう！教科書貸して！忘れてきた！！』

「はあ？！何だよ！！」

その時、1階からお母さんの声がした。

「優弥ー！明日の朝家に誰もいないから自分で起きてねー」

だが、奏太との言い合いに夢中で優弥は気付かなかった。

『いいじゃんか！！教科書くらい！！』

刹那、鈍い音と共に、教科書が頭に叩きつけられた。

『いたっ！！』

見上げると教科書を持った奏太がいた

「明日返せよ」

『はいはい』

「お前ウザイ」

#3 教科書、ありがとう。

p i p p i . . .

いつの間にか目覚まし時計がなっていた。

『ううゝ．．．何時．．．？』

布団の中から手を伸ばし、手探りで時計を手取る。

07時55分。

『遅刻ー！！！！』

急いで1階に降り、リビングを覗き込んだ。

『お母さん！何で起こして．．．いないし。』

1階に母の姿は無い。

『もゝ！！今日テストなのに！！』

『ちよつとは声かけてよ！！』

『は？何でだよ』

1日目のテストが終了した放課後、何故だか奏太に怒っていた。

『遅刻しそうだったじゃん！！』

優弥は今日、ギリギリの時間に学校へ着いた。

『よく間に合ったね。（棒読み）』

奏太がケータイを鞆の中から取り出し、机の上に座ってケータイをいじり始めた

『送ってもらった！お兄ちゃんが偶然帰ってきたの！！』

『良かった。よかった。（棒読み）』

『何かむかつく！！』

『こっちのセリフ。』

『あ！そうだ。教科書。』

優弥は鞆から借りた教科書を取り出した。

『．．．．．』

奏太は黙って受け取った。

『な・・・何?』

「お礼は?」

『は?!』

「ありがとうございますは?」

『・・・ありがとう』

「何照れてんの?というか、なんでテスト終わってから返すかねえ。」

「

奏太が呆れた顔でこちらをみてきた。

『なっ!うるさいっ!ていうか照れてないしっ!』

「なーにちゃついてんのお?」

竜が奏太の肩の上に顔を出してきた。

「・・・普通に出て来いよ、お前」

うしろから叶がやってくる。

「竜ちゃん、だめだよ?そのままラブラブにさせておかないと。」

『は?!カナ何言つて・・・』

「あらあゝ?ごめんなさあゝい」

竜がわざとらしく奏太から離れた

「ちげーよ。何でコイツとラブラブしなきゃいけないんだよ。」

奏太が叶の言葉を否定したがそれはこっちのセリフだ!

『はあ?!その言葉そのままあんたに返す!!』

「奏ちゃん、優ちゃん、落ち着いて;」

叶が必死に優弥と奏太の喧嘩を止めようとしていた。

可愛いなあ。おい。

『かーあいいなあ。誰かさんとちがつて。』

優弥は小さい子を宥めるように叶の頭を撫でた

おどおどしている叶に奏太が声をかけた

「竜!カナ。帰るぞ」

「りよーおかいいッ」

「あ!うん!」

#4 助けてくれた・・・？

『あー・・・夏休みだああ！』

テストも終業式も終わって明日からは夏休み。

学校の帰り道、千秋と静香と一緒に話ながら帰っていた

「夏休みだなー」

と、千秋

「だねー」

微笑みながら静香。

『夏休みといえばさ！海！いこーよ！』

「それいいね！！」

静香が満面の笑みでこちらを向いた。可愛いな、おい。

「ここ数年行っていないな・・・」

千秋が思い出すように空を見上げながら言った。

『ね？！行こ行こ？！』

こうして私たちは海へ行くことになったのだが・・・

『何でいるの！！！！！！』

「は？お前こそなんでいんの」

海で仲良く3人で遊んでいるところで偶然奏太、竜、叶と出会ってしまったのだ。

「わぁ！カナちゃん！偶然だね♪」

「しーちゃん？！偶然だね♪」

静香が叶を見つけて何故か2人の世界へ行ってしまった。

「え・・・何？アイツら付き合ってたの？」

千秋が珍しそうな顔をして言った。

『しーちゃん・・・？てか何、あの癒しカップルは・・・』

「おい、こんな奴等放つとけ。あっちの方行くぞ」

奏太が缶ジュースを飲みながら叶と竜を呼び寄せた

「りょーかいツなの♪」

「しーちゃんまたね♪」

叶が手を振ったので静香が笑顔で手を振り返ししていた
笑顔の静香の隣で、優弥はため息をつく。

『最悪……。なんでいるの』

海で遊ぶのもひと段落したとき、静香が鞆から財布を取り出して立ち上がった。

「優ちゃん、ちーちゃん、何か飲み物買ってきて来るけど……。何がいい？」

『オレンジー』

優弥は手を挙げて答えた

「私も一緒にいくよ」

千秋も立ち上がって静香についていった

『いつてらっさーい♪』

千秋と静香を見送り、優弥はビーチパラソルの下で一人、座り込む。

『ひまだなあ……。』

「ね、ね」

後ろから誰かに話かけられた。

知らない人の声だったが、優弥はつい、振り向く。

「君1人？」

少し年上くらいの知らない男。

満面の笑みを浮かべて優弥を見ていた。

『え、いや……。あの……。』

「俺今暇なんだよね。一緒に泳がない？」

『いや……。あの……。』

「行こ行こ♪」

腕を引っ張られる。

だが、優弥の力では振りほどけなかった。

『い……。いやだ!』

「おい。なにやってんだよオッサン」

近くから聞き覚えのある男の声がした。

『奏太?!』

前髪が邪魔なのかゴムで止めて噴水のような髪型にして奏太がやってきた。

『・・・何その頭』

「黙れ」

知らない男が奏太を睨んだが奏太が睨み返す。

「な・・・なんだよ!!男いるんじゃないかよ!」

そっぴい残して知らない男は怯えながら去っていった

「チツ・・・雑魚が」

奏太は舌打ちをしてどこかへ戻っていった。

「ゆーちゃん!おまたせー」

千秋と静香がジュースを持って笑顔で帰ってくる。

優弥は、そんな2人の方を見向きもせず、ぼーっとしていた。

「優弥?どした?ぼーっとして。」

『助けてくれた・・・?』

「ゆーちゃん?顔赤いよ?早速日焼け?」

胸の鼓動が速くなっていた

何・・・?

(・・・怖かったからだよね!!うん!)

優弥は無理矢理自分に言い聞かせ、早速オレンジジュースを手にする。

『さあ飲もう!』

「意味わかんねーよ;」

・・・助けてくれたんだ・・・。

#5 意外な組み合わせ。

『何で・・・！何で一緒に帰ってんの！』

海の帰りの電車内。

優弥グループのほかに奏太達もいた。

「こいつらにきけ。」

奏太に言われて隣の席をしてみる。

そこでは静香と叶が雑誌を読みながら仲良く座っている。

「しーちゃん、今度ココ行かない？」

「行く行く！たのしそー♪」

『・・・。。』

2人の周りに花が飛んでいた。（幻覚）

「あの2人がデートプランをたててるから仕方ないだろ。」

『んなことくらいメールでしろや』

憎もうにも憎めない2人をじっと見つめていた。

「そのこのラブラブなおーふたーりちゃん」

いきなり誰かに優弥と奏太の肩をたたかれた

『ひゃあ！！』

竜が出てきた。

「お前はいつもいつも驚かせんな！」

『普通にでてきてよ；；；』

「んで。何処行ってたんだ？」

奏太が竜の手に持っていたビニール袋を見て言った

「おやつかってきたの？」

竜がのんきに答える。売店に行っていたらしい。

優弥は千秋がいないことに気付いた。

『千秋も？』

「YES！」

「珍しい組み合わせだな。」

奏太は竜からビール袋を受け取りながら言った

『んで・・・千秋は？』

「まだおやつ選んでるの♪」

『おいてきたんかい！』

「荷物置きに來ただけだもーん♪」

ビール袋を置いて、竜は再び去って行った。

「奏ちゃん、奏ちゃん、」

隣から叶が奏太につんつんしてきた。なんともかあいらしい。

「ん？」

「売店なんてあるの？」

叶が珍しそうに奏太を見つめながら言った

「そうらしいね」

奏太の言葉を聞いて、叶と静香は一気に笑顔になり、2人で目を合
わせる。

「ほんと？！しーちゃん、行こ？」

「うんっ♪」

静香と叶まで行ってしまった

気が付けば奏太と2人になっていた。

胸の鼓動はだんだん速くなる。

（あゝ！もう！なんでこんなに緊張すんの?!）

#6 夏祭り？

（何で奏太と2人つてことくらいでこんな緊張すんの？？！）
優弥の頭の中はすでに真っ白。

何を話せばいいのか全くわからない。

「・・・弥！優弥！」

「はっ・・・！！」

「何ボーっとしてんだよ？」

ふと気付くと、奏太が顔を覗き込んでいた。
顔が近い。近すぎる。

「べ・・・別に・・・」

横を向いてしまった。

「・・・？」

「ただいまあー」

海から帰ってきてベッドに横になる。

何であんなにドキドキするんだ・・・？

「だあああああ！もう！めんどくさいッ！何これええ！！」

「うるせえ」

何がなんだか分からなくなって大声を出したら隣の家の窓が開いた。
でてきたのは勿論、奏太。

「そそそそそそそ奏太！！」

「あ？なんだよ」

「いや、別に・・・」

「ああ。そうだ。竜がさ・・・。」

と言って奏太はケータイを取り出して優弥に見せてきた。

画面には竜かららしきメールが表示されている

件名：愛する奏太へ ♪

やつほゝ 今日楽しかったねーん♪
んでね！んでね！今度やる夏祭りに今日のメンバーでいかなあい？？
お返事待ってるぬ♪

f r o m 竜ちゃん

「らしいぞ。お前行くの？行かないの？」

『いくいく』

喜んで即okしてしまった。

「ふーん・・・」

奏太はなにやら考えているような顔で返事をした。

『？？？』

#7 ドキドキの理由・・・？

今日は優弥の家に千秋、静香、竜、叶が集まっていた。

『・・・ってか！何で男達までいんの！！』

もともとは千秋と静香だけの予定だったが何故か現在は5人になっていた

奏太はめんどくさいといって自分の部屋にいる。

まあ隣の家なのだが。

「そんなのは静香と叶に聞いてくれ」

千秋があきれた顔で静香と叶を見つめた。

『いいねえー。ラブラブで。』

「は？何？優弥何かあった？」

千秋が何かを感じ取って聞いてきた。

『え・・・べつ・・・別に・・・』

「・・・にやり」

『え』

千秋が奇妙な笑みを浮かべると竜と叶を部屋から追い出した。

「ひどいぬーん！」

「ぬーん」

竜の変な語尾を叶もまねした

おいおい、こんな変な奴の真似しちゃだめだぞー

「女の会話だ！」

千秋がそう言い放ち、部屋のドアを勢いよく閉める。

『な・・・何？』

「優弥さ。恋でもしたかあ？」

千秋が単刀直入に聞いてきた

『なっ！！』

「えー？そつなのー？！」

静香が騒ぎだす。優弥は必死に手をぶんぶん振って否定した。

『ちがうつ!』

「ほんとにちがうのか?」

千秋が聞く。

『・・・えと・・・』

「ほんと?」

静香が聞く

「奏太とか?」

千秋はにやにやと笑っている。

『ぬ・・・確かにツ! 奏太といるとドキドキするけど! ありえないし!! あんなヤツなんか & a m p ; # % \$ * U Φ 』

「後半聞き取れねーゾ」

「てゆーかそれ恋じゃないの???」

静香が当たり前のように聞いてきた

『え・・・』

「奏太クンにだけの特別な感情でしょ?」

『・・・』

「そんな感情つつつたら完全スキってことだろ」

千秋からの追い討ち。

『・・・』

とうとう明日は夏祭りだ——・・・。

8 夏祭り。ため息？

『おまたせー！』

今から夏祭り。気合を入れて浴衣で来てみた。いつもの6人で駅にて待ち合わせ。

「おせーよ」

千秋が怒っている。

わかりやすいくらいに怒っている。

千秋は普通の格好だった。

「ゆーちゃん、やほー」

静香は浴衣だった。こりやまた可愛い。

竜、叶は普通の私服だ。

浴衣なんか着そうな人たちじゃないしね
きよるきよると周りを見渡す。

『あれ？』

「ん？」

優弥の声に千秋が反応する。

『奏太は？』

「まだだよー」

そして千秋はにやりと笑った

『え。なにその笑い』

「べつつにいゝ？」

『何何ー?!』

「お前ら騒がしいぞ。」

奏太がやってきた。

『奏太遅い!!!』

「黙れ。つか、優弥」

皆が歩きだした。

『ん??』

「ほんとによかったのか？これ来て」

『なんで？？この間も思ってたけど、どしたよ？』

「・・・はあ」

奏太が分りやすくため息をついた。

『何なのさ！』

「来たくなかった」

『なんで？』

疑問を抱えたまま祭りへと向かった。

『・・・？？』

「おい！優弥あ？？行くぞー」

ぼーっとしていると千秋に呼ばれた

『ふあ！あ、うん』

（なんでだろ・・・？？）

#9 射的をやってるはずだった。

「あ、わたあめ！」

屋台の並ぶ夜道を皆で歩いてしていると静香が急に叫んだ。

「わたあめ1つください。・・・はい、しーちゃん。」

叶がわたあめを買って静香に渡した。

「いいの！？ありがとう！」

周りに花が飛んでいる（幻覚）お二人。

一方優弥は。

『ラブラブですなー』

「つかわたあめって・・・アイツは小学生かよ」

隣で奏太が呆れていた

『奏太もカナを見習え！』

「は？意味わかんねーし。」

奏太と優弥が言い合いをやっている後ろでは竜と千秋が喋っていた。

「ちーちゃん」

「お前がちーちゃんとか言うときもいんだけど。」

「あ、金魚ちゃんだあー」

「いや、聞けよ。」

歩きながら優弥は奏太に向かっていきなり不満をぶつけた

『何でこんなウザイのが幼馴染なんだろー！』

「こっちのセリフなんだけど」

ふと、射的をやっている小学生達をみた

『あ！ねえ、あの射的の景品のくま人形かわいくない？』

「切り替えはやいなー」

『ふん！どっちが先にくま倒せるか勝負しようよ！』

「まずお前に勝ち目はないな。」

『なにー?!』

優弥と奏太は小学生達が見守る中、射的のおじさんにお金をはらった。

『私だつてやるときはやるんだから・・・』

優弥が撃つてみるがくまは倒れない。

「ばーか。だからお前に勝ち目無いんだよ」

奏太がやると一発でくまは倒れた。
ものすごい命中力。

『なにコイツ！一発つて・・・』

優弥が喋っている途中、顔にくま人形が押し付けられた

『何・・・？これ奏太がとったんじゃない！あ！もしかしてさっき私
が力ナ見習えつていったの気にしてるのか！』

「は？俺そんなくまもらったって嬉しくねーし。」
そりゃそうか。

優弥でもそれは理解できたが、からかい続けることにした。

『素直じゃないなー』

「お前一回死ね」

『次あのお菓子ターゲット！』

「またかよ」

『あーあ。結局全部奏太の勝ちじゃん』

「お前下手すぎ」

あれから何度も射的はやったが見事に全部奏太の勝利だった

『あれ・・・？みんなは・・・？』

気付けば千秋も静香も竜も叶も皆居なかった・・・。

#10 今、気付いた。

『みんなどこー!!!!!』

気が付けば奏太と2人になっていた。

「こうなると思った。」

『ほえ?』

優弥が焦る中、奏太は冷静だった

「静香と叶、千秋と竜で仲良いから絶対バラバラになると思った。」

優弥はひとつ、疑問を感じた

『千秋と竜ー?!なんで?』

「あの2人結構仲良いから」

『へー・・・』

気付かなかった。

そういえばさつきも2人で仲よさそうにしゃべってたな。

「・・・最悪。だから来なくなかったんだよ」

奏太が憂鬱そうにしていた理由がやっとわかった

『何それ』

「お前ウザイもん。」

『むー・・・』

「ほら!仕方ねーから行くぞ」

『うん・・・』

祭りは思ったより人が多かった。

『奏太!奏太!金魚すくいやるーよー!』

今度は金魚すくいを発見した。

「勝ったらクレープな」

『やってやるーじゃないの!』

『やったあ!クレープー!』

数分後、勝負は結局優弥が勝った。

本当は奏太の方が勝っていたのだが優弥がわざと奏太にぶつかって台無しにしたからだ。

優弥はクレープを食べながら奏太と歩いていた。

『人多いね・・・てあれー！奏太ー！』

いつの間にか奏太がいなかった。

まわりをみわたすと大分前の方を歩いていた。

『まってよー！』

「おせーよ」

『奏太が歩くのはやいの！』

奏太は一度、ため息をついてから喋りだした。

「とりあえず人のいないところでそれ食うか。」

と言って優弥の手を握って早歩きで歩きだした。

（ひゃあー！！手ー！！手ー！！）

2人は木の影にあつたベンチに座ってクレープを食べていた。

突然、空に花火が上がった。

『あ、花火！』

「ああ、今日花火の日か」

2人で花火を見ている時はずっと奏太のことを考えていた。
というか、奏太のことしか頭に出てこない。

テストの時にはめんどくさいのに教科書貸してくれて。
海では私のこと助けてくれて。

さつきも。人形もらった。

「駅でも行くとそのうち皆に会えるだろ」

『あ・・・うん』

いつだって、奏太は優しくかった。

『奏太・・・』

「ん？」

『ありがと』

「は？何だよ、いきなり。きもい」

『きもいて何?!』

♪ そんなな感情つつたたらスキってことだろ♪

千秋の言葉が頭で繰り返し流れている。

(私、奏太が好きだ――。)

「おい!行くぞ!」

『……うん』

#11 登校日、告白娘。

『おつはよお ♪♪』

優弥は教室の戸を思いつきり開けた
今日は夏休みの登校日だ。

「朝からうるせえよ」

自分なりに元気に入ったつもりだが逆にうるさかったらしく、いきなり奏太に怒られた

『そつ・・・そそそそそそ奏太!』

「は?何?馬鹿かお前は。」

『何イ?!馬鹿つて言うやつが馬鹿だ!』

「勝手にいつてろ。」

『うぬぬぬぬ!!!』

いざ好きだと気付いても今までの態度は変わらない。

つつーか・・・いまさら変えられるかよ!

「奏太くん・・・」

廊下の方で奏太を呼ぶかわいらしい声が聞こえた。

「え?」

奏太と優弥が廊下を向くと廊下には1人の女の子が立っていた。
手には手紙。

(告白かぁ・・・そういえば奏太つてもてるんだっけ。)

優弥は改めてそれを実感した

「ちよつと・・・来てくれない??」

「ああ。うん」

そついつて奏太と女の子はどこかへ行ってしまった。

「2年3組。隣のクラスの藍澤麻依。」

『ほえ?!』

後ろから千秋がやってきた。

「可愛い子だったぬーん」

竜も笑顔でやってくる

「気になるね♪♪」

「うん♪」

静香と叶もやってくる。

『ななな・・・何!』

「告白だろ。あれは。」

千秋が何か企むような顔で言った。嫌な予感がある

「行っちゃおう?」

と、静香が笑顔で言ったので千秋がそれに大賛成。

「いつちやおう!」

『え?え?は?』

優弥も千秋に手をひっぱられ何が何だか分からないまま奏太を追うことになってしまった。

#12 デート?!

奏太と麻衣という奴の後ろからこつそりついていくと、体育館裏に2人はいた。

「奏太にばれないようにダゾ?!」

千秋が小さな声でささやく

「はいよ」

竜が楽しそうな返事をした

『・・・・・・』

優弥は未だに今の状況がよく分らない

刹那、麻依とかいう奴の高い声が体育館裏に響いた。

「じゃあ・・・日曜の11時に駅に集合ね」

『え。今なんて言った?』

デートっぽい約束に聞こえたが。

「日曜の11時に駅に集合ね」

叶が麻依の真似をしながら答えた。

「奏太でえと行っちゃうのお?!」

と、竜が千秋の肩にしがみついた。千秋は「うっとおしい奴だな」と言つて竜から逃げた。

「日曜11時に駅・・・と。」

静香がメモを取っていた。

『何メモってんの?!』

「あの奏太くんだよ?デートなんて気になるなるぢゃん」

『まさか・・・』

「そのまさか」皆、日曜10時50分に駅の近くの喫茶店集合ね!

「「「りようかい」」」

見事に千秋も竜も叶も揃つて返事をした

『ええええ・・・!?!?』

日曜日、優弥、千秋、叶、静香が駅の近くの喫茶店の窓から待ち合わせ場所の駅を覗いていた。

竜はまだ来ていない。

「つーか、なんだあの女。10分前なのにもう居るぞ。」

千秋が呆れながらいった

優弥は千秋たちのノリについていけないでいる

『ねえ、ほんとにストーカーするの?!』

「ストーカー言うな。」

千秋と窓の外を見ながら話していると2人の顔の間に遅れてやってきた竜が顔を出した。

「あ！そーたきたよお！」

「うわ！出た！」

千秋は竜から非難した

『だから普通に出てきてよ』

優弥が呆れながら竜を見て言うとき千秋が窓の外で何かを発見した

「あ、移動するツばい。うちらもいくよ！」

『あれ？静香とカナが見当たらないけど・・・』

優弥は静香と叶が居ないことに気付き、周りを見渡してみた
静香と叶は隣の席でデート気分だった。

「置いてこ・・・」

千秋はあきれた顔で喫茶店から出た。

#13 所詮幼馴染。

ストーカーは相変わらず続いていた。

奏太と麻衣という女は映画館へ入っていった。

「よし！私達も見よう！」

千秋がさっそく財布を取り出す。

『え、今私金欠・・・』

「ホラ！いくよ」

優弥はお金が少ないのにも関わらず、無理矢理見たくもない映画をみる破目になってしまった

映画のエンディング真近。

いい加減見たくもない映画を見るのに疲れてきたので優弥は席を立った

『私ちよつとトイレいつてくるね』

「おう！」

「いつてらっしゃあい」

千秋と竜に見送られながらもトイレへはいると麻衣とかいう女が居た。

『あ・・・』

「え？」

優弥のつぶやきに麻衣は反応した。

「もしかして、優弥・・・ちゃん？」

『なんで私の名前・・・』

「奏太君とよく一緒に居る子でしょ？」

『あ・・・うん』

「えへへ。私隣のクラスの藍澤麻依。よろしくね！」

麻衣は可愛い笑顔で笑った。

『よろしく・・・』

「じゃあ・・・。私もう戻るね？」

『ああ、うん。』

麻衣はトイレから出て行ってしまった。

『って・・・よろしくしてどうすんの!!』

「おい。優弥。映画終わったぞー」

千秋がやってきた。ふと、優弥は洗面所にハンカチを見つける。

『あれ?』

ご丁寧にマジックで名前が書いてある。

『藍澤麻衣・・・』

「あの女の？」

『私・・・届けてくるね。』

「おおー!! いったらっしやい」

千秋が楽しそうに、走り去っていく優弥を見守っていた

さっきの映画を見ていた場所に帰ると、奏太と麻衣だけが残っていた。

（何してんだろ・・・）

話声が聞こえる。

「奏太君って、優弥ちゃんと仲良いよね」

麻衣が俯きながら喋っていた

「そう?」

「うん。そう。付き合ってそうな勢い」

「・・・んなわけねえよ。ただの幼馴染だし。優弥のこと好きでもなんでもないし。」

奏太の言葉が、妙に優弥の頭の中で繰り返し流れた。

#14 新学期。

『麻衣ちゃん!!!』

優弥はこぼれそうな涙を必死にこらえて叫んだ。

「優弥ちゃん?！」

「優弥?！」

『これ・・・ハンカチ。忘れてたよ。』

麻衣にハンカチを差し出した

泣くな自分。

「ありがとう」

『じゃあ・・・ね』

泣くな・・・。

すぐに立ち去ろうと奏太達に背中を向けた。が。

「おい優弥。」

奏太に肩をつかまれて無理矢理振り向かされる。

自然と涙がこぼれた。

「お前、何泣いてんの?」

『・・・私もう帰るからっ』

奏太の手を無理矢理払って走って逃げた。

映画館の出口付近で千秋と竜が待っていた。

「おー。優弥。どうした?走って来・・・って何?何かあった?」

『うゝ・・・』

「どつたのゝん?！」

千秋と竜が気遣っていたが優弥は何も答えることが出来なかった。

あのデートの日から奏太とは一言も話さないまま新学期が始まった。

奏太とも気まずいままの教室。

奏太のまわりには数人の女子が集まっていた

「おーい。優弥あ。奏太の周りに女子が集ってるゾーいいのー?」

千秋がお菓子を口にくわえて奏太の方を見ながら言った

『別に……。ただの幼馴染だし。関係ない』

「ゆーちゃん、ちーちゃん、次体育だから行こー？」

静香が心配そうな表情で言った。

「あ、うん。ホラ、優弥も行くぞ。」

『うん……。』

「きゃあああ！！！！奏太君ナイスシュート！！！」

体育は男子はバスケ、女子はバレー。

体育館には女子の声ばかりが響いた。

奏太や竜、叶が活躍する度に女子達は自分の授業そっこのけで叫んでいたのだ。

『……。』

優弥は千秋と共に壁に寄りかかって自分達の出番が来るのを待っていた

「おーい。優弥ー？女子が騒いでんぞー。お前も見に行かなくていいの？」

千秋に耳元で言われたが大して気にしない優弥。

『行かない』

そこへさっきまでバレーをしていた静香が駆けつけてきた

「優ちゃん、ローテーション。次優ちゃん出なきゃ」

『あ、うん。』

優弥はのそのそと歩き始めた

「静香お帰りー……。あ！優弥危ない！」

千秋の叫び声で優弥が振り向いた時だった。

『え？』

男子の方からバスケのボールが飛んできた。

優弥に見事命中。優弥はそのまま倒れこんだ。

「ちょ……。ゆーちゃん大丈夫？！」

心配そうに静香と千秋が駆けつけた

「ボール投げた奴保健室もってけー誰？ボール投げたの。」
千秋が男子に向かって叫ぶ。

「俺」

奏太だった。

#15 2人きりの賭け。

「強く投げすぎた。」

奏太が、倒れこんで起きる様子のない優弥の元へ駆け寄った

「お前力加減考えろよ；ほれ。もってけ」

千秋が呆れた表情で奏太に優弥を託した。

「はあ。めんどくさ・・・」

「だまらっしゃい！」

「よつと・・・」

奏太が優弥を姫抱つこで持ち上げた。

その姿に、女子の誰もが羨ましがっていただろう。

「わおw奏太やるじゃん」

「だって起きねえからこれしか方法ねーじゃん。」

そういい残して奏太と優弥は体育館を出て行った

ぱち。

目が覚めると保健室に居た。

『あれ・・・？』

「お前重すぎ。運ぶの疲れた。」

ベッドの隣の椅子に奏太が座っていた。

『奏太・・・。ていうか、重いつてどういうこと?!』

「・・・お前さ、なんであの日泣いてたの？」

奏太がいきなり話を切り替えた。

『・・・。』

「ていうかなんでお前いたの？」

『だって・・・あの奏太がデートなんて行きだすし・・・』

「1回デートしてくれたらあきらめるって言ってたし、あいつしつこかったし。で、何で泣いてたんだよ」

『・・・。。。。。。』

「何だよ？」

優弥は布団を握りしめた

『所詮私はただの幼馴染ってただかもん・・・』

「それ以外になにがあんだよ」

『どうせこんなただの幼馴染より麻衣ちゃんみたいな可愛い子のほうが好きなんですよ。』

「おまえさ・・・」

『え？』

奏太が少し間をあけてから話を続けた

「・・・俺のこと好きなの？」

『え・・・？』

「さっきからそういつてるようにしか聞こえないんだけど」
『・・・』

優弥は布団の中にもぐりこんだ。

「え。何。凶星？」

『なんでアンタはそーいうことをそうズケズケと・・・』

「へーえ」

『は？』

思わず布団から顔を出した

「優弥の弱味握っちゃった」

勝ち誇った表情で笑っていた。

『な！！！！なんかやな感じ！！！！』

「ばーか」

『ぜぜぜ絶対私のこと好きにさせてやる！！！！』

「ま、せーぜー頑張れば。」

『もし奏太が私に惚れたらメロンパン！』

「お前そーいうのすきだなー」

といって奏太は保健室から出て行った。

優弥が奏太と両思いになる日はまだまだ先のよう・・・です。

#16 最悪？な組み合わせ。

” 体育大会のお知らせ ”

『 そうですねこんなのあったねー 』

「 めんどくせーなー 」

「 一番嫌いな行事・・・ 」

朝、優弥と静香と千秋で学校に来たところ、廊下に体育大会のお知らせの紙が張ってあった。

「・・・っということ！学年種目は借り物競争と二人三脚になりました！」

黒板の前で真面目そうな学級委員長らしき人が喋っていた

優弥、静香、千秋の席は近いので学級委員長らしき人が喋っている間も3人で話していた。

『 どういうことで？ 』

「 小学校かよ・・・ 」

「 2種目もやるのー？ 」

学級委員長らしき人が再び喋る。

「 二人三脚のペアは男女混合ですのでー。このくじを引いてくださいー ーい 」

そういつて学級委員長らしき人が箱のようなものを教卓の上に置いた

『 男女混合で・・・ 』

「 やな予感するんだけど。 」

「 カナちゃんになりたいなあー っ 」

3人はしぶしぶくじを引きに行く。いや、1人はしぶしぶじやなかったらうが。

優弥のひいたくじには3と書かれていた

これから男子の3番を探さなければいけない。

『3・・・？男子の3の人ー！』

優弥が叫ぶと嫌な顔で立つ男子が1人いた。

「え。俺なんだけど」

『え？』

一方千秋。

「6の奴ー。誰だよー」

千秋が紙ヒコーキを作りながら言った

1人の男子が、6番の紙を持って立ち上がる。

「え？！千秋と？！やったねえん♪♪」

「は？」

一方静香。

「え、えつと・・・7番の人ー？」

「あ、僕だ」

おどおどした静香の問いかけに一人の男子が手を挙げ、静香のところに駆け寄ってきた

「ほんと？！」

結果は

優弥 - 奏太

千秋 - 竜

静香 - 叶

と、なった

『・・・ありえない』

「嫌な予感的中」

「わあい！カナちゃんとだあ」

さてさて、どうなることやら・・・。

#17 練習、そして弟？！

『はいつ！結んだよ！！』

ある日の3限目は体育大会の練習。

今日の練習メニューは二人三脚らしい。

奏太とペアになってしまった優弥は2人の足を結び終えたところだった。

「めんどくせえー・・・」

『あ！ほら、集合かったよ！』

グラウンドの中央の方で先生が「集まれー」と叫んでいた

「何でコイツなんだよ」

奏太がめんどくさそうに呟いたので優弥も条件反射で言い返す

『コイツですみませんね！！』

「おーいその2人ー！早くしろー」

いつもの言い合いが始まったが先生に呼ばれた。

『ほらあ！！奏太のせいじゃない！！！！』

「お前のせーだろ」

『はあ？！何で私なの！！！！』

2人の言い合いは止まらず、先生が呆れながら見ていた

「そこの2人早く集まれー・・・」

次の日の朝。

優弥は2年の教室がある2階へと行こうと階段に足をかけたがバサバサバサツという音で数歩下がって物音のした方を覗いてみた

「あわわっ！！」

驚く1人の声が聞こえた。

『？』

1人の男子生徒が廊下でたくさんの紙を落としてしまったようで一生懸命に拾っていた。

あまりにもかわいそうだったので拾いに行つてあげた。

『これで全部？』

「え？あ！はい！」

男子生徒は少し驚た表情をしていた。

『1年生？』

「はい！1年3組、藍澤健吾です！」

『藍澤・・・？』

藍澤といえば。藍澤麻衣のことが頭に浮かんだ。

嫌な予感・・・

「あ！もしかして・・・お姉ちゃんと友達ですか？麻衣っていうんですけど・・・」

『あ・・・ああ。まあ・・・』

予感的中。麻衣の弟だった。同じ高校に入学してるとは。

「けんけーん！何してんだよー、早く来いよー！」

1年生の教室から顔を出していたお友達らしき人がこちらにむかつて叫んでいた。

『じゃあ・・・私もう行くね！』

「あ・・・はい！ありがとうございました！」

なんだか厄介なことがおこりそうな予感がした

#18 今度は弟。

『はああああ・・・』

静香と千秋と一緒に屋上でランチタイム中。
隣には奏太達もいたが。

「どした？ため息ついて」

『なんかねえ・・・』

千秋が心配そうに優弥を見るのでけんけんとやらのことを言おうとしたのだが突然の屋上のドアを開けるものすごい音にかき消された。

「如月先輩！！！！！！！！！！」

屋上に来たのはけんけんだった。

『けんけん?!』

優弥の一言に千秋が呟く

「けんけんってだれ？」

静香がけんけんを見ながら答えた。

「あの男の子じゃないかな？ね、カナちゃん」

「うん。きつと。」

けんけんは勢いよくこちらに駆けつけてきて優弥の肩を思いきりつかんだ

『な・・・何?』

「好きになっちゃいました！！！！！！」

『・・・はい?』

突然の告白だったのだ。

「もの好きもいるもんだな」

奏太は興味なさそうにパンをかじっている。

「そんなことないです！如月先輩とっても優しくて・・・」

けんけんの一言に千秋と静香がこそそと喋りだした

「優しいとこなんか見たことねーし」

「優ちゃん何やらかしたの？」

『そのギャラリーたちだまらっしやい!』

思わず怒鳴るが相変わらず奏太は興味なさそうだった。

「その1年だまされてんじゃねーの?」

『ムカ』

「せ・・・先輩?」

優弥と奏太のやり取りにけんけんは心配そうにみていた

『とりあえず友達からってことで。よろしくね。けんけん』

「あ、はい!!・・・あの・・・ところで・・・」

『ん?何?』

「如月先輩はあっちの男の方が好きなんですか?」

と言ってけんけんは奏太を指差した。その言葉に驚き優弥はムセてしまった

『なっ!!!!!!!!!!げほっげほっ!!こ・・・米が喉に・・・』

「そーだよ?」

後ろから奏太が口出した

「残念ながらコイツは俺にベタ惚れなワケよ」

『ちょ・・・奏太何言ってるの?!』

「ばーか」

と言って馬鹿にするような顔で奏太は教室に帰っていった。

その後ろに竜、叶が付いて行く。

「やっぱりそうなんですかあ」

『え・・・あ・・・』

残念がると優弥は思っていたがけんけんは驚きの言葉を口にした

「じゃあ・・・僕応援します!」

『はい?』

#19 遊園地デート、ストーカー。

「せーんばいつ！」

朝、優弥達の教室にけんけんがやって来た。

『どーしたの???』

「遊園地のチケットもらったんです！一緒に行きませんか？」

けんけん手には2枚のチケットがあった

『あ！ここ超楽しいんだよね！行く行く!!!』

「ほんとですか?！」

「・・・だよ。どーする奏太」

遊園地の約束をしている裏では千秋と竜と奏太で何か話していた。

千秋は呆れながら奏太に問いかけた。

だが、奏太は相変わらず興味なさそうにケータイを見ていた

「あ?なんで俺に振るんだよ」

「あーそーですかい」

「ちーあーきつ俺らもゆーえんちいこーよ」

竜が楽しそうに千秋に近寄ったが千秋は即答する。

「やだ」

「ええー・・・」

『そーうた!』

優弥が遊園地のチケットを持って奏太の元へやってくる。

「何?」

『みてみて!遊園地誘われちゃった』

「だから何?別に俺に関係ないじゃん」

『・・・』

「別に付き合ってるわけでもないんだし」

『・・・あーそーですか!!!』

勢いで教室を飛び出してしまった。

「おい、奏太、何やってんだよ」

千秋が奏太を睨んだ

「ほんとのことじゃん」

『ごめん！！けんけん！待った？』

「いえ、今きたとこです」

当日。優弥は遊園地でけんけん待ち合わせをしていた。

結局奏太とは喧嘩したまま。

『あ！ほら、行こ行こ！』

「あ、はい！」

その後ろに潜む人影

竜と千秋だった。カナと静香も誘ったが結局普通に遊園地デートに向かってしまった。

「ストーリーカー恒例行事になってない？」

竜が草むらに隠れながら言った

「だまらっしゃい。・・・てか・・・奏太結局来なかったな」

「奏ちゃんカモン！！」

奏太も誘ったのだが「別に興味ない」といつて断られた

優弥とけんけんが移動したのでその後ろに千秋と竜は付いていった

#20 定番の観覧車。

優弥はけんけんと遊園地を楽しんでいた。
ジェットコースター、お化け屋敷、まあ、遊園地でお決まりの乗り物を取りつくしていた。

もうひとつ、お決まりの乗り物があった

「先輩！最後に観覧車乗りましょう！！！！！！」

けんけんは楽しそうに観覧車を指さした

『あ！うん！』

けんけんと優弥は観覧車に向かった。

『うわっ！人多っ！！！』

やっぱり観覧車は人が多い。

何十分も待ってやっと優弥達の番が来た。

『うひゃ！』

優弥は人ごみに押され、倒れそうになってしまった。

「先輩！こっちです！」

その時、けんけんが優弥の手を引っ張って観覧車の中へ連れて行っ
た。

『あ………』

ふと、お祭りの時を思い出した。

「2名様ですねー」

「あっはい！」

「ごゆっくりどうぞー」

遊園地の人に観覧車の中に乗せられた。

優弥は窓の外をじーっと見つめて、考え込んだ。

雲ひとつない、青空。

（あの時、奏太も人ごみの中で手を握って連れてってくれたっけ……
・学校でなんであんな喧嘩しちゃったんだろ……）

「せつ・・・先輩?!」

いつの間にか、優弥は泣いていた。

『あ・・・ご、ごめんね』

「先輩？」

『うつん、なんでもない・・・ごめんね』

「・・・?」

『おはよー・・・』

月曜日の朝。

「はよーつす。どうした？優弥元気ないけど・・・」

千秋に何か言われたがまず奏太を探した。

『・・・あれ？奏太は?』

「さあ？けんけんとやらに呼ばれてどっか行ったよ？」

『ふーん・・・???』

#21 勝負？

朝の誰もいないはずの体育館に2人の男子生徒。

奏太とけんけんだった

「たしか・・・藤波奏太・・・先輩でしたよね？」

「そうだけど」

体育館には2人の話し声だけが響いた

「僕・・・如月先輩が藤波先輩のこと好きだっていうから・・・応援しようとしてたんです」

「・・・」

「ほら、好きな人には幸せになってほしいというか・・・」

「で？本題は？」

「如月先輩は藤波先輩のこと大好きなんですよ？」

「だからなに？」

「でも藤波先輩は如月先輩に冷たいですよね」

「・・・お前何が言いたいの？」

奏太はけんけんを睨んだ。

「応援するっていうのやめました。」

「は？」

「このままじゃ如月先輩が傷つくだけですから。」

「・・・。」

「先輩・・・体育大会のリレー・・・選手でアンカーですね？」

「そうだった？」

体育大会の話はまともに聞いていないため、リレーのアンカーだということも勝手に決められたのだろう。

「というか何故けんけんがそんなこと知っているんだ？」

「僕もアンカーなんです」

「あっそ。1年生ですごいねー（棒読み）」

「もし僕が先輩に勝ったら如月先輩、絶対に奪って見せますから。」

その代わり、僕がまけたらあきらめます。」

「……。」

そついい残してけんけんは体育館からでていった。

「……………」

教室に奏太が戻ってきた。

『あ！奏太……あの……』

「おい優弥……」

『え……あ……何？』

まずあやまろうと思っていたが急に話しかけられた。

「俺ってリレー……選手だっけ？」

『そ……そんぐらい覚えてなさいよ！！！！しかも奏太アンカーだよ？！』

「ふーん」

奏太はそのまま自分の席へ戻っていった

『……………え？何？』

#22 体育大会。

「位置について、よい・・・」
「パン!!!!!!!!!!!!!!」

銃声になった途端、5人ほどの人が一斉に走り出した。

「なんか・・・よくわかんないうちに体育大会なんだけど・・・」
いつの間によら体育大会当日。

優弥は千秋、静香と団席で喋っていた

「おい優弥、この3年の終わったら私らの番だから行くぞ」

千秋が団席から離れてから叫んだ。

「・・・にしても千秋よく体育大会来たね。サボってそう。」

「センサーうざかったから仕方なく来ただけ。ほら、静香も行くぞ」

「はぁーい」

「カナちゃんと二人三脚♪」

静香も嬉しそうに後ろから付いてきた

「ほれっ！結んだ！」

2年生の二人三脚はすでに始まっていた。

そろそろ奏太と優弥の番なので2人の足を結んだ。

「ねえ・・・奏太さ、珍しくリレーやる気出してるね。いきなりどうしたの？」

「知らね。俺もなんでかわかんねー。」

「は・・・?」

「ほら、行くぞ。」

二人三脚の結果は3位というまあ微妙な結果。

「おっ昼♪おっ昼♪」

優弥は購買に向かっていた

「優弥、優弥、」

千秋も後ろからやってきていた

『あ！千秋！ねえ、お昼・・・』

「リレーさ、あっちの団のアンカーけんけんだったさ」

『え？！そうなの？！・・・！』

「らしいよ」

『ふーん・・・・・・あ！お昼行こ！』

午後の部が始まった。

『午後って何か出る競技あったわけ？』

「借り物競争」

千秋が係の仕事へ旅立つ静香を見送りながら答えた

『あーそういえば。』

「デブ、ハゲ、メガネのおっさんとかだったらどうするよ」

『んなの無いでしょ・・・』

「あ！ほら！次1年だって！けんけん走るよ！」

千秋が1年生のいるところを指差した

『アンカーになるくらいだから速いのかな？』

「じゃない？」

「パァン！！！！！！！！」

スタートの合図がなった。

けんけんは・・・ダントツトップだった

『速っっ！！！！！！』

「すげーな、オイ！」

#23 借り物競争。

「次は2年生による借り物競争です」

グラウンドに放送部の人のアナウンスが鳴り響いた。

『うへえ・・・めんどくさい・・・』

千秋はスタート位置に着き、銃声があったとたんに走り出し、借り物の品が書かれている場所へ向かった

千秋は紙を見て一度立ち止まった

『・・・？何て書いてあったんだろ・・・？』

千秋は立ち止まっていたかと思うと再び戻ってきた。

『え？』

「竜！・・・来い」

「え？俺？！ほんとお？！」

千秋は竜を連れてゴールして戻ってきた

『ち・・・千秋なんて書いてあったの？』

期待しながら優弥は千秋に問い詰めた。

「ばかなヤツ」

『・・・。。。』

「・・・。。。」

その場の空気が一気にさめてしまった

（・・・これ借り物というか借り人？なんだそれ）

優弥が変なことを考えているうちに静香が校長先生を連れて行った。

『何やってんだ・・・って次私か』

気付けば自分の番が近づいていたので優弥はスタート位置に着いた。

「位置について、よい・・・」

パン！！！！！！！！

銃声が鳴り、優弥は紙が置いてあるところへ走った。

『えーっと？何・・・1年生？！』

優弥は1年生達を見つめた

『けんけん』

1年生で連れてこれる人。

(けんけんしかないじゃん・・・)

優弥がけんけんがいそうなところに向かって叫ぶとスグにけんけんが駆けつけてきた。

なんとか2位でゴール

『ありがと。けんけん』

「あ・・・はい!」

ゴールしたあと、本来は学年の皆で団席に戻る。

『千秋ー、静香ーめんどくさいから戻るー?』

「うんー」

面倒臭いので千秋と静香と一緒に戻ろうと歩いていた時、
パン!!!!!!

銃声がなった刹那、また誰かが走る。

『あ』

奏太が混ざっていた。

『何もってくんだろ・・・』

奏太を見ていたら目が合った。

「優弥」

『え・・・』

奏太はこっちに向かって走ってきて優弥の手を引っ張ってゴールへ連れて行った。

『何・・・なんて書いてあったの・・・』

「・・・幼馴染」

そう呟いて去っていった

『びっくりした・・・』

奏太の手のぬくもりが、まだ微かに残っていた。

#24 リレー勝負？

『ふあゝ．．．．眠．．．』

「何言つてんだよ。次リレーだよ」

団席で千秋が呆れた表情でこちらを見ていた

『え？もう？』

「もうつて．．．お前今１時間ほど寝てただろ」

借り物競争が終わって１時間ほどたったらしい。

爆睡していたところを千秋に起こされたのだ。

『てかもうリレー始まつてる』

優弥達は赤団。けんけんは白団だ。

そして赤団のアンカーが奏太、白団のアンカーがけんけん。

『赤勝つてるじゃん』

微妙な差だったけど赤が勝っていた。

「このまま行けばいいんじゃない？」

『楽勝じゃん』

赤団はとある１年生にバトンが渡った。

ところが１年生がバトンを落としてしまった

『あーあ。何やってんのあの１年生』

拾っているうちに白団は赤団を抜かして行ってしまう。

しかもバトンをやつと拾ったかと思うと今度は転んでしまった。

「あんな奴リレーに選んだのだれだよー」

千秋は１年生を睨んでいた

『つていうかなんでアンカー１年と２年なの？』

「３年より速かったんじゃない？」

『ふーん．．．』

そのドジな１年生がやつと走り出した。差は結構ある。

「でもさ」

千秋が楽しそうな表情で呟いた

ドジな1年生が奏太にバトンを渡す。

白団はとくにけんけんがバトンが渡っていた。

「いくらあんなに差が開いてても、」

結構な差があつたはずなのに奏太はどんどん差を縮めていく。

「けんけんじゃ・・・」

ついに奏太はけんけんを抜かしてしまった。

千秋の言いたいことは分つたので優弥は千秋に続いて喋った

『奏太に勝てるわけないじゃんね』

そうなのだ。奏太は頭が良いうえに運動もできちゃうのだ

「なんとも憎たらしい・・・」

一方その頃奏太たち。

「お前遅!!!!!!」

奏太の隣ではけんけんが辛そうにしゃがみこんでいた

「先輩が速すぎるんです!!!!..あの、ひとつ聞いてもいいですか?」

「あ?」

「先輩つて如月先輩のことですか?」

「.....それはありえない。.....でも」

「?」

「お前に取られんのははむかつく」

奏太はハチマキを縛り直しながら言った。

「そうですか・・・じゃあ僕応援します・・・」

「何を?」

「.....さあ?」

けんけんはにやりと笑った

「ああ?!何だよ!!!!!!」

「あなたにだけは教えませーん!」

言い合いをしながら2人は団席へ戻った。

#25 トリプルデート？！

体育大会は結果、赤団の勝利だった。

だが、体育大会が終わってから気になることがひとつ・・・

「先ぱーいっ」

『けんけん、また来たの・・・？』

そう。なんだかけんけんが積極的だ・・・

今日も優弥の教室に来て喋り始める

「あのですねっ」

けんけんは楽しそうに友達の話をしていた。

『あ！そうだ、私先生に呼ばれてるんだった！じゃあね！けんけん！』

急いで教室を出た優弥にけんけんは笑顔で手を振っていた。

そこに奏太が近寄った。

「おい」

「あ！藤波先輩じゃないですかあ〜どうしたんですかあ？」

「どうしたんですかあ？じゃねーよ。話が違うんだけど。」

「話？」

「リレーの。」

「ああ〜。」

けんけんは思い出したような顔をしてさっきまでのけんけんからは考えられない表情で笑った。

「だって・・・藤波先輩別に如月先輩のこと好きじゃないんですよ？だったら別にいいじゃないですか」

「は？」

「嫌なんですか？好きでもないのに？」

「・・・。」

けんけんの言葉に奏太は何も言い返せなかった。

優弥のことは好きじゃないはずなのにけんけんにとられるのは嫌だ

った。

黙っている奏太にけんけんは勝ち誇った顔をして教室から出て行った。

「ゆーちやあああああん♪」

次の日の朝。

珍しく大声をだして優弥に抱きついてきたのは静香だった。

『どうしたよ』

「みて♪コレ！」

と言って静香の持っていた鞆から何かのチケットを取り出した。

「遊園地の招待券6名様！」

『あれ？ここ前に私がけんけんに行ったところ？』

「そうだよー♪いつもの6にんで行ってトリプルデートしようよ！

」！

『え・・・デートって・・・付き合ってるのはアナタたちだけだと・・・』

優弥の意見は聞かずに静香は千秋のところへ行ってしまうていた。

#26 睡眠不足。

ここ最近しばらくの優弥は宿題に追い込まれて徹夜。

おかげでなんだか今日は頭がボーっとしていた

『眠い！！！！！！！！！！』

「ていうかゆーちゃんなんでそんなに宿題たまってたんの？」

体育が終わって優弥と静香と千秋は教室に戻ろうとしていた。

『しばらく宿題放っておいたら怒られた……。』

「あほだろ」

「せんぱーい！！！！！！！！！！」

偶然廊下を歩いていたらけんけんが優弥の元へ近寄ってきた。

『あ、けんけん』

千秋が前方を歩きながら優弥に話しかける

「私ら先教室行ってんぞー」

『あ、うんー』

千秋と静香はそういつて先に行ってしまった

「体育ですか？」

『うん。けんけんは・・・購買・・・？』

けんけんの手にはお金が握り締められていた

「はい。おなかすいたんで。」

『うちの学校の購買のパンっておいしいよね・・・』

喋っている途中にだんだんと目の前が真っ暗になってきた。

優弥はそのまま倒れこむ。

「先輩？！先輩？！」

けんけんの叫び声だけが聞こえていた

（・・・あれ？私・・・）

「せーんぱーい！」

目が覚めるとよつとけんけんが顔を出した。

わっ！けんけん！

「寝不足らしいですよ？それで今先生は用があるとかで職員室にいます」

どうやら優弥は今保健室にいるようだ

「ああ……けんけん、授業は？」

「そんなの行けませんよ!!!」

どうやらけんけんは授業をサボってずっと優弥のそばにいたらしい。優弥はむくりと起き上がる。

☞
・
・
・
ありがと。
☞

「先輩、

「なに・・・」

けんけんのところを振り向くとだんだんと顔が近づいてきた。

ちよ・・・

授業の終わりのチャイムがなった。
だがけんけんの顔は近づいてくる。

や
・
・
・
けん
けん
・
・
・

その時、

バァン!!!!!!!!!!!!!!

思いきり入り口のドアが開いた

#27 再び遊園地。

思いきり保健室のドアが開く。
奏太が立っていた。

「お前・・・何してんの」

「奏太！！」

優弥は奏太に駆け寄った

「キスしようとしてみました。」

「・・・どうみてもコイツ嫌がつてんじゃん」

けんけんは奏太の後ろに隠れた涙目の優弥を見つめた。

「・・・・・・・・」

「優弥、行くぞ」

「あ・・・うん」

保健室を出て行った優弥と奏太を見ながらけんけんは呆然としていた。

「おまたせー！！！！！！」

今日はいつもの6人での遊園地

待ち合わせ場所の遊園地入り口前。

もうみんな揃っていた。

「ゆーちゃあん！こっちこっち！」

静香が可愛らしくこちらに手を振っていた

「おそい！早くいくぞ！」

千秋はすっかりご機嫌ななめだった。

夏祭りの時と同じように、皆バラバラになると思ったが無理矢理来させられたので仕方が無い。

「優弥、」

受付を済ませて遊園地内をぶらぶら歩いていると奏太が話しかけてきた

『なに？』

「アイツ・・・けんけんどうなったの？」

『ああ・・・あのあとごめんってメールきて。ソレだけ。』

「ふーん・・・」

「ねえ、ゆーちゃん、あの店でちょっと飲み物買ってきていい？」

『あー、うん』

静香と叶がどこかの店へ行ったのでその後ろを付いていった。

『奏太、奏太！』

「あ？」

『このキーホルダー可愛い！！！！！！』

店には遊園地のイメージキャラクターのキーホルダなどのグッズも売っていた。

「買わねーぞ」

『えー！？』

「自分で買え。」

『別にいいもん！・・・あれ？』

優弥はまわりを見渡した。

『皆は・・・？』

またしても皆とはぐれてしまった。

#28 予想的中。

予想が見事にあたった。またもや奏太と2人。ちよつと店に行っただけなのに皆とはぐれてしまっていた。

優弥と奏太はとりあえず店から出ることにした。

『だからー!!なんで2人になるの!!!!』

「最悪……」

『あーあ……』

「仕方ねえな……お前何処行きたいの？」

『えーつと……わっ!!』

喋っている途中に人に押され、見事にずっこけた。

『いったあー!!!!』

奏太がしやがみこむ。

「膝。血でてる。」

『ぎゃああ!!最悪!!!!』

「あんなど真ん中でぼーっとつ立つてるからだ。あほだろ。」

『うう……』

とりあえず2人はそこのベンチにすわった。

『……この間は……ありがとね。』

「は?何だよ気持ち悪い」

『ほら、けんけんにキスされそうになった時。』

「ああ。っていうかけんけんと2人になって何もされないとでもおもったのかよ」

『けんけん良い人だもん。』

『……』

優弥にはけんけんが良い人に見えるらしく奏太はあえて返事をしなかった。

『奏太……』

「あ?」

『おなかすいた』

「このタイミングで言うセリフか？」

『うつさい!』

奏太はしぶしぶ何かを買いに出かけた。
まわりの商品を見渡してみる。

「何買えばいい・・・あ」

売店に出かけた奏太は、とある一品をみつけた。

「・・・」

しばらくその品と向き合っていたがその品を手に取りレジへと向かった――・・・。

#29 めろんぱん、そして・・・

「・・・おい、買ってきたぞ」

どこかの店から奏太が戻ってきた。

奏太の手にあつたのはめろんぱんだった。

『えー！何でメロンパンー？！どうせならこの遊園地にしかないものとかさああ！！！』

「お前絶対忘れてるだろ。」

奏太はなにやら呆れた顔でベンチに座る。

『は？何を？』

「賭け」

『かけ・・・？何の・・・』

「は？！・・・お前本当にムカツク奴だな」

『はあ？！だから何！！！！』

「お前言つたる。夏休み明け。保健室で。」

夏休み明けの保健室でのことを思い出してみた。

確かあの時は奏太の投げたボールが私に当たって保健室にいた。
そしたら奏太が・・・

「俺のこと好きなの？」

『え・・・』

「さつきからそういつてるようにしか聞こえないんだけど」
『・・・』

あの日に奏太に私の気持ちがばれた。

そして・・・確か私が・・・

『ぜぜぜ絶対私のこと好きにさせてやる！！！！』

「ま、せーぜー頑張れば。」

『もし奏太が私に惚れたらメロンパン!』

「お前そーいうのすきだなー」

奏太が優弥に惚れたらメロンパンって賭けをした。

『って・・・え?メロンパン?』

「鈍っ・・・」

『え?!は?!はい?!え、奏太って・・・私のこと好きになっちゃった感じ?』

優弥の言葉に、奏太は大きくため息をついた。

「けんけんとお前が一緒にいると無性に腹立つ」

さつきから奏太が俯いてケータイを閉じたり開いたりしている。

「あの賭け、俺の負け」

『あ・・・え・・・じゃあ・・・』

優弥はすでに涙目になっていた。

奏太は優弥の頭をぼんぼんと2回叩いて肩に優弥を引き寄せる。

「ばーか」

この2人、ついに今日、両思い。

・・・ベンチの後ろで千秋たち4人がこっそり見ていたとも知らずに。

#30 実は彼氏がいた？！

「あーあ。」

「何だよいきなり」

『珍しく竜が落ち込んでる』

学校の帰り、優弥と奏太と竜で喫茶店に居た。

いつもの6人でカラオケに行く約束をしていたが他の3人は数学の課題を先生に出しに行くと、ついでにと体育倉庫の片付けをさせられている。

「だってさ、カナとしーちゃんはラブラブだし奏ちゃんとゆーちゃんも結局ラブラブだし。」

竜がすねた様な表情で言った。

『奏太と私がラブラブって・・・え？！知ってたの？！』

「ラブラブになった瞬間みた」

竜はブイサインをこちらに向けていた

『なっ・・・！！』

「お前誰にも言うなよ？めんどくさいから。特に女子。」

奏太がメニユー表を見ながら言った

『竜も誰かと付き合っちゃえば？ホラ、千秋とか。余ってるし。結構仲良いじゃん』

「はあああ・・・」

竜は深くため息を付いて落ち込んだ

『・・・？』

『千秋ー』

「んあー？」

学校の屋上で千秋とお昼を食べていた。
ちなみに静香は叶と一緒に食べている。

『千秋と竜って仲いいけど付き合ったりとかはないのー？』

#31 好きなひと。

「ちーあーきゅ」

千秋とのランチ中に竜が乱入してきた。

竜は早速千秋にしがみつく。

「離れろ！」

（ん……確かに竜にだけ彼女いないのもなあ……誰かに頼んで合コンでもやってみるか？）

優弥は千秋と竜のやりとりを見つめながら、黙り込んでいろいろとプランを立ててみていた。

「照れ屋さん」

「お前マジで1回死んで来い」

（千秋がだめなら……ん？そういえば竜と千秋やつぱり妙に仲良いよね）

「何のお話してたの？」

「お前にや縁のない恋人の話」

「……あつそ。じゃ、もう行くね」

といって竜は屋上から去っていった

（ん？？ちよつとまでよ）

「アイツ彼女いないのそんなに気にしてんのかね？いきなり不機嫌……て優弥？」

（竜が馬鹿なのはもともとだけど他の女子にあんなハグとかしないよね？）

「ゆーやあー？どした？聞ってるか？」

（彼氏の話って知った途端不機嫌になって何処かいっちゃったし）
「……！！！！！！」

くわえていたからあげを地面に落としてしまったがそれどころではない。

「おわ！びっくりした！意識戻ったか？！からあげ落ち……」

『まじですか?!?!?!?!』

「うるさいな。もっとボリュームさげろ。」

(もしかして竜って千秋のこと好きなんじゃ・・・)

『絶っつつつ対そうだって!!!』

その日の夜、優弥は早速家のベランダで奏太と作戦会議をしていた。
少し寒い。

「俺は前から気付いてたけど」

奏太は当たり前のように言い放った。

『え! そうなの?! 早く言ってよ!』

「何でだよめんどくせえ」

『協力しようよ!!!』

「は? 大体千秋に彼氏いんだろ」

『ん・・あんまり気に入ってなさそうだったし!!!』

「めんどくせ・・・」

『ねっ? ねっ?』

「はいはい。やればいいんだろ。めんどくせえ」

『やったああああww』

優弥は子供のように両手を上げて喜んだ

「めんどくせえ・・・」

奏太の呟きで優弥は動きを止め、奏太を睨む。

『何か言った?』

「いや。なんにも」

#32 作戦会議？

「竜、帰り俺んちな。」

翌日の朝、奏太が誰かの机に座り込んで竜に話しかけた

「わあい」奏太からのお誘い嬉しいナア」2人きりで何する気い」？」

竜が奏太の腕にしがみついた。

「いや、優弥もいるし。」

「ええ」？俺邪魔じゃん！」

「いや、お前いないと意味ねーし。」

「？・・・何で？」

・・・てな感じで放課後、奏太の家に竜を誘い込んだ。

早速優弥は本題に入る。

『んで！本題に入るけど！竜って千秋のこと好きなの？』
「？！！！！」

刹那、バキツという音で優弥は竜に目をやった。

その片手には、見事に折れている鉛筆。

それを見る限りでは親指一本で押し折られたようにしか見えない。

机の上に置かれていたものなのでおそらく美術用の奏太の鉛筆だろう。

『えええ？！ちょ、竜？！』

「そーいやコイツ昔から強かったつけ。喧嘩とか握力とか」

奏太が思い出すように呟いた

『そうなの？！』

「そーはみえねーけど、めちゃくちゃ強かった。」

竜とは中学も一緒だったがそれは初めて知る事実。

思ってみれば結構よくわからない奴なのでまだ優弥が知らないことは多そうだ。

だが今はそれどころではない。

『それやばくない？』

優弥が呟くと2人がよくわからない表情で優弥を見た。

『千秋そーいうの嫌ってたよ。』

「まじかよ。めんどくせえ奴。」

奏太はリアクションをとったが竜の反応がない。

『りゅ．．．竜？』

部屋の隅で死んでいた．．．ようにみえた

「おーい．．．」

『ちーあーきー！帰ろー？』

そのまた翌日の放課後。帰る準備が出来たので優弥は千秋のところへ行った。

ちなみに静香は今日は塾なので居ない。

「あー．．．今日行くとこあるから。奏太と帰りな。」

『．．．．．』

『絶対彼氏のとこだよ！あれ！』

千秋を見送り、奏太と再び作戦会議。

「だから何」

『すーとーかーしーよー！』

「スーとーかー好きだなー。そして堂々とスーとーかー言うなー」

『ホラ！竜も！』

「ほんととお前めんどくさい女だな」

奏太は面倒臭そうに鞆に教科書を入れた

『ほっとけ。』

#33 怪しくストーカー！

『ほらやつぱり。あの男絶対彼氏だよ！』

「とゆうよりか俺ら絶対怪しいぞ。」

ひとけのない公園。

只今優弥と奏太と竜は草むらの陰に隠れて千秋を見ていた。

『っていうか、竜が恐ろしいほどおとなしいんですけど』

竜の周りに妙なオーラが漂っていた

「ズーン・・・」

「それをわざわざ口で言う意味が分かんねえ」

『ねえ！ちよつとまって！声聞こえる！』

3人は耳を澄ましてみた

千秋とその彼氏の声が聞こえる。

「じゃあね。私帰る。」

そう言つて千秋はその場から立ち去ろうとする。

「おい！まってよ！」

千秋は男に腕をつかまれた

「ちよ・・・離してよ！」

「なんかやばくねーか？」

このやばそうな状況にも関わらず、奏太は相変わらず興味なさそうな表情だった

『うん・・・ってあれ？！竜は？！』

いつの間にか竜の姿が無い

「あ・・・。あれじゃね？」

奏太の指差す方向に竜がいた。

千秋のところへ向かっている

『ちよ・・・！あの彼氏暴力だつていつてたよ』

「そんなことしたら竜はやり返す」

『やばいじゃん！千秋に嫌われるよ！何やってんの！！！！』
しかしココで大声を出すと千秋にばれるので竜を止めるわけにもいかず。

「ねえ」

ついに竜は千秋たちに声をかけてしまった。

「え・・・？！竜？！何でここに！」

千秋が驚いていた。当然だ。

しかしお構いなしで竜は千秋の彼氏らしき男に話しかける

「その手、離してくれない？嫌がつてんじゃん。」

「あ？何だこのガキ」

だんだんと彼氏の怒り度が増していく

「女の子いじめちゃだめよーん」

「チツ・・・くそ生意気な！」

彼氏とやらの手は竜を殴ろうとしていた。

「竜！あぶな・・・」

千秋が必死に叫ぶが竜はするりとかわす。

「何やってんの？早く殴れば？」

「こんの！！クソガキ！！！」

一方その頃優弥達は呆気にとられていた。

『何あれ・・・』

「余裕だな。」

『暴力じゃないし・・・ギリギリセーフ？』

「じゃない？」

確かに殴ってはいない。

竜はかわしているだけだった

『私たち・・・もう帰ってもいいんじゃない？』

「・・・その方がいいかもな」

2人に気付かれないように家に帰ることにした

#34 いい感じ？

「クソ・・・覚えてろよ！！このままじゃ終わらせねーゾ！！」
結局竜を一度も殴れなかった彼氏は腰を抜かして帰った。

「い・・・一応礼は言っておく。ありがとう。」

千秋が恥ずかしそうに言った

「別にいいのよーん、これくらいで」

「あんたって以外に反射神経いいんだね」

「う・・・うん。そーなの！」

（そっいうわけじゃないんだけどな・・・）

竜は心の中でそう呟きつつも言わないでおくことにした。

『ちーあきつ！一緒にかーえろ？』

「かーえろ？」

優弥は笑顔で静香と共に千秋に駆け寄った

あの日から数日。

千秋からは彼氏と別れたい。とだけ聞いていた。

「あ・・・ごめん！今日は竜と一緒に帰ろうっていわれてて」

『！』

竜の方をチラリと見てみた

かなり嬉しそうな顔をしている

『・・・。。んまあ！ラブラブしなさいな！』

「そつ・・・そんなんじゃないって！！！！じゃっ・・・じゃあね

！ホラ！竜！いくよ！」

「あ！まって〜！」

千秋と竜は仲良く教室から出て行った。

静香も「それなら力ナちゃんと帰ろう♪」と言って帰ってしまった。
『にやり』

優弥がそう呟くと、頭に鞆が叩きつけられた

『いったあ!』

奏太が優弥の鞆をもってあきれた顔で立っていた

「あほかお前は。またついてこうと思ってただろ」

凶星だった。優弥は千秋と竜にこっそりついていこうと企んでいた

『いいじゃん!別に!』

「いい雰囲気だからそのままほっとけ。行くと邪魔になりそうだから」

『ばれなきゃいいじゃん!』

「いや、お前だと嫌な予感がある」

『何それ!!』

またいつもの言い合いが始まった。

「つか、お前早く帰れよ。この教室あと俺らだけなんだけど」

『奏太は?』

「委員会」

『・・・・・・』

「何?一緒に帰ってたの?」

『はい!?!そんなわけないじゃん!?!!』

奏太は馬鹿にしたような表情で教室から出て行った。

#35 再び現れた奴。

竜と千秋の二人は仲良く(?) 2人で帰っていた。

「じゃあ・・・私こつちだから。ばいばい。」

と、千秋が指した方向は人気の無い道だった。

「・・・?道こつちだっけ?」

「近道だから。」

「・・・心配だから俺も行く!」

「・・・勝手にしな。」

「勝手にする!」

と、人気の無い道を2人で歩き始めた。が。

「へーえ。ラブラブじゃねえか。」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

後ろを振り向くと千秋の彼氏が立っていた。

しかもそれだけじゃない。彼氏の後ろには数10人ほどの男がいた。

「この前のお返しだ!」

この一言と共に後ろにいた人たちがいつせいに竜と千秋の元へ来た。

「ちょ・・・竜・・・」

千秋が心配そうに見ていたが数10人相手でも竜はスルスルと攻撃をかわしていく。

「楽勝!」

「きやああああ!!」

その時、千秋の悲鳴が聞こえた。

「千秋?!」

振り向くと数10人のうちの1人が棒を持って千秋に殴りかかろうとしていた。

「彼女サンが隙だらけだよ!」

男は棒を振り落としたが千秋にあたる寸前で止まった。

竜が引き止めていた。

男が棒を動かそうにも力が強すぎて動かない。

「千秋には・・・」

刹那、竜の手が自然と男を殴ってしまっていた。

「手え出さないでね♪」

残りの男達と千秋が呆然と見ていた。

「りゅ・・・竜・・・？」

「な・・・んだよ！コイツ！！」

残りの男達が一斉に竜に向かって来た。

とても大勢の人数だったはずなのに竜は傷ひとつなく、次々と殴っていく。

「ちょ・・・竜！どうしたんだよ？！止めて！！」

#36 両思いのはずが。

「なんだよコイツ！おい、逃げるぞ。」

彼氏達は逃げていってしまった。

「千秋、ちゃんと男選びなよ。」

「あ、ちょ……」

竜は一言残して帰っていつてしまった。

「おわったな。」

『終わったね』

自習の時間。奏太と優弥と竜は教室をこっそり抜け出して屋上で喋っていた。

竜は千秋となかなか喋れないでいるらしい。

『千秋暴力嫌いって言ったじゃん』

「だって……」

「というか、今日1日中千秋を無視してたんかよ」

「どよーん」

奏太の一言で竜が落ち込みだした。

優弥がふと時計を見ると授業終了の10分前だった

『あ、そろそろ教室……』

バン！！！！！！

屋上のドアが勢いよく開く。

入ってきたのは……千秋だった。

『千秋?!』

「こんなとこにいた……。」

千秋は竜めがけて走った。

「ちょちょちょ……千秋?!」

竜が驚きを隠せないでいると千秋は竜に一発ビンタをくらわせ、叫びだした。

「何なんだよ！急に無視して！」

「え・・・あの・・・だって・・・千秋、俺のこともう嫌いになつたでしょ？」

「確かに！！！！暴力する人嫌いって優弥に言っただけさ！！！！！」

『ちちち・・・千秋落ち着いて』

優弥が必死に宥めた。

奏太は無言で見守っていた

千秋は急に俯いて黙りだす。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「言っただけど何？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

『千秋??』

千秋はそのまましゃがみ込んだ。

黙ってたかとおもうと小さな声で何かつぶやいた。

「・・・もうとつくに好きになってるんだから仕方無いだろ」

『千秋・・・』

「・・・俺ら邪魔じゃねえか？」

奏太が呟いたが優弥はあえて無視することにした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

今にもラブラブになりそうなお2人さんが黙っている。

『りゅ・・・竜?』

優弥がおそろおそろ竜に話かけると竜は不思議そうな顔で千秋を見つめていた。

「今何て言っただめ？声ちっちゃくて聞こえなかった」

「・・・・・・・・。。。」

「????え・・・何？」

千秋が思いつきり竜を睨むが竜は何も分っていないような表情だ。
「いっぺん死んでこい！！！」

『・・・だめだこりゃ。』

「なにやってんだコイツら・・・」

#37 え、浮気？

結局竜と千秋はラブラブになれたらしい。

だが、解決していない問題がココに・・・

「きゃあ／＼／＼奏太くん♪」

「コレ調理実習でつくったの♪」

「もらってえ〜？」

廊下で奏太の周りに女子が集まっていた。

「奏太モテモテだな。どうするよ優弥。」

教室の後ろの方で喋っていた千秋と静香が優弥を見る。

『なにあれ〜！！！！』

「隣のクラスの女子じゃないかな？今日調理実習でカップケーキ作ったんだって」

静香が心配そうに言った。

『っていうか前より女子増えてない?!』

「もういつそのこと皆に付き合ってるってばらしちゃえよ」

千秋にそういわれたが奏太に「女子とかめんどくさいから言っな」と言われていた

『だって・・・めんどくさいって・・・』

「奏太君・・・そのうち浮気しちやったりして？」

静香がとんでもないことを言い出した

『え』

「委員会先の子とか？」

その話に楽しそうに千秋ものった

『そういえば最近委員会とかって一緒にかえってくれない・・・』

「え。馬路なの？」

『そそそそそんなわけないじゃん！浮気なんて！！！！』

「あ！おい！ゆーや」

廊下で女子に囲まれながら奏太が叫んでいた。

『な・・・何ー？』

「今日も委員会だから一緒にかえれない」

『え』

「どーするよ優弥。」

千秋が隣でニヤニヤとこちらを見ていた。

『ま・・・まっさかぁ。浮気なんてさ！』

・・・とは言っても気になる。

放課後。委員会が終わる時間まで優弥1人で教室で待ち伏せしていた。

『そろそろ終わったかな？』

奏太の委員会の活動場所のクラスへいつてみた。
教室をそつと覗いてみる。

『・・・あれ？』

誰もいなかった。

いや、1人いた。委員長さんだろうか。3年生だった。

『あの、委員会って・・・』

「？とつくにおわったよ？」

『はい？』

奏太の靴はたしか、まだ下駄箱にあったはず。

『・・・うそでしょ？何処行つてんの？！』

優弥は再び自分の教室に戻ってみることにした。

#38 好き・・・？

『あれ？』

優弥は教室に戻ってみた。ドアから覗くと奏太の姿があった。声をかけようとしたが微妙に話し声が聞こえたのでつい隠れてしまった。

『誰・・・？』

チラッと覗いてみた。

——女子だった。

『うそでしょ？』

その時、奏太の声がはつきりと聞き取れた。

「好き」

『え・・・？今・・・奏太、何て・・・？』

優弥は逃げるように学校から去ってしまった。

夜の7時。部屋のカーテンを空けて外を見てみた。

隣の家の奏太の部屋の電気はついていない。

『奏太・・・まだ帰ってないの・・・？』

トン トン トン トン

隣の家の階段を昇ってくる音が聞こえた。

部屋のドアが開いて奏太が入って来る。

奏太がこちらに気付いた。

奏太は窓を開けてベランダに出てきた。

（平常心、平常心・・・）

優弥はそう言い聞かせながら奏太に話しかけた

『お帰り。遅かったね』

「買い物してた」

『ふうん・・・』

「・・・」

（・・・テンション下げすぎたかなあ・・・?!）

急に話題が無くなってしまった。優弥は必死に話題を考える

『そっ・・・そういえばそろそろテストだねえ！！勉強しないでいいのお?!!!』

「別にお前と違って勉強しなくても上位狙えるし」

『にや・・・にやにおう?!』

「ばかだ。噛んでるし」

『うるちやい!!』

「何回噛めば気がすむの?」

とりあえず、今日のことは何かの間違いだろう！

そう、自分に言い聞かせていた

#39 何かの間違いだと思う。

”何かの間違い”そう自分に言い聞かせながら次の日、優弥は学校へ向かった。

下駄箱の靴を出そうと靴に手をやるとパタパタと静香が走ってきた。

「ゆーちゃん！」

『?どした?』

「あのね・・・これ・・・同じ塾の子から送られてきたんだけど・・・」

そういつて静香はケータイを取り出して1件のメールを見せた。

メールに写真が付いていた。

優弥はメールの内容を試みる。

ねえ！静香つて奏太君と仲よかったよね？！

奏太君に彼女いるかも知れないの！！！！本当？

写真には奏太と、昨日の放課後奏太と一緒にいた女の人を買物している様子が写っていた。

「ゆーやつ」

教室へ行くと千秋が妙に元気よく優弥に話しかけていた。

『千秋・・・おはよ。何でそんな元気なの?』

「優弥今日誕生日じゃん」おめでとー」

『あ！そうだった・・・』

「何わすれてんの・・・」

『今それどころじゃなくてさ・・・』

「?あ、私先生に呼ばれてるからいくね！」

『うん・・・』

千秋は教室から出て行った。

「おい、優弥」

千秋が教室を出たのと同時に奏太が話かけてきた。

「お前、」

「昨日・・・」

奏太の話を遮るように優弥は喋り始めた

「あ？」

「昨日、奏太女の人と会ってた・・・」

「は？」

「奏太・・・その女の人に？好き」って・・・」

「・・・ああ、それは」

「昨日放課後にデートまでしたくせに・・・」

「だから、・・・」

「言い訳なんか聞きたくない！！」

つい奏太に言い返してしまう。

奏太はしばらく何も言い返さなかった。

（あーあ・・・ここで素直になれたらよか・・・）

刹那、優弥は奏太に壁に押し付けられた。

クラスのみんながざわめきはじめた。

「痛っ・・・そ・・・奏太？！」

#40 誕生日。

教室がざわついていた。皆優弥たちを見ている。

優弥の腕は奏太にがちりと掴まれてしまう。逃げようにも逃げられない。

優弥はだんだんと怖くなって思わず目を閉じた。奏太の手の力が強くなり、舌打ちする音が聞こえた。

『ちよつと奏太！痛いから離し・・・』

抵抗しようとしたが喋れなくなった。一瞬だが、奏太と唇が重なったのだ。

『・・・え？』

『ばーか！！！！』

『な・・・』

『お前ほんと馬鹿だな』

ちよつときめいてやろうと思ったがスグになんとかむかつく台詞を言われた。

『はい?!』

『嫌いなわけねーだろ』

『え・・・』

奏太が下を向いた。

奏太が珍しいことを言うのでついつられて優弥も下を向いてしまった。

『だって・・・奏太女の人に好きって・・・』

『あれは・・・お前のこと好きか聞かれたから好きって言ったんだよ』

奏太は恥ずかしそうに髪の毛をくしゃくしゃしていた。

『じゃ・・・じゃあ最近一緒に帰ってくれないのは?!』

『いろいろ店まわってたんだよ!』

奏太がポケットの中を探り始めた。

「お前今日誕生日だろ。結局何買えばいいかわかんなかったから昨日、委員会が同じ女に聞いてたんだよ。」

『あ・・・』

「ほらっ手えだせ。」

優弥が手を出すと手に小さな箱が置かれた。

この大きさからするとおそらく指輪だろう。

「ちゃんと・・・好きだからな」

このタイミングで千秋がもどってきた。

「はー。先生話長・・・って、何してんの？あの2人」

千秋の言葉など優弥には聞こえていなかった。

「だからそれできげん直せ」

奏太が優弥の手を離し、その場から去ろうとしていた。

『・・・やだ』

「は？」

奏太が不思議そうに立ち止まる。

『さっきの・・・もつかいしてくれたらきげん直す』

「・・・皆見てんだけど」

『じゃなきゃきげんなおさなーい！』

「・・・ばーか」

クラス中の女子が悲鳴をあげる

千秋は呆然としていたが。

「何してんだあの2人」

「ちゅーしてんねえーw」

千秋の横に竜がやってくる

「あ、竜。いたんだ」

「ええ？！ひどいっつ！」

#41 姉と兄、そして女装少年？

奏太からの初めてのプレゼントは指輪だった。

優弥は今日も指につけて学校にいる。

「あー・・・めんどくせえー・・・」

今日は文化祭なのだ。優弥たちのクラスはお化け屋敷。奏太と優弥で教室の前に机を出して受付を担当していた。

奏太のおかげで客は（殆どが女子）たくさんくるが、働いているのはほとんど優弥だった。

「ちよつと！奏太も働いてよ！！！」

「やだ」

奏太はめんどくさそうにしていた。一方、優弥ははりきっている。

体育大会は面倒だが文化祭は大好きなのだ。

机の上に置いてあった携帯電話の音がした。奏太のケータイだ。面倒そうに奏太は電話に出た。

「もしもし・・・は？誰だよ前・・・はあ？ちよ・・・」

電話が切れたらしい。奏太は電話をポケットにしまった。

「？・・・誰？」

優弥が聞くと奏太は小さな声で呟いた。

「奏」

「カナデ」とは奏太の姉。優弥にも「祐人」という兄が1人いて2人共大学2年生なのだ。

小さい頃、両親が共働きだった優弥にとって兄が親代わりだったが今、兄は1人暮らし中で時々家に帰ってくる。

「祐人と一緒に今学校来てるってさ」

「・・・お兄ちゃんと？！」

奏太は急に頭を抱えた。

「あー、めんどくせえ・・・」

「え。なんでよ。奏に会いたいよ！」

「お前と俺でいたら絶対ウザイから。アイツ」

・・・妄・・・いや、想像してみた。奏はおそらく、優弥と奏太が2人でいると両思いだとはしゃぎ出すだろう。

『・・・んまあ確かに』

「おーい！そこのお二人さん！お前ら交代だつてよ！自由にデートしてこい」

お化けの格好をした千秋がお化け屋敷から顔を出した。

・・・と、同時に1人の女子高生、いや、女子高生の格好の叶が出てきた

「ねえちーちゃん？なんで女の子の格好なの？」

「安心しろカナ。女の子にしか見えない」

叶が教室から出てきて数秒にも関わらず、多くの女子がお化け屋敷に入ってくる。

奏太と受付をやってる時にお化け屋敷にやってきた女子まで何人もいる。何回入れれば気が済むのか。

客集めに必死の千秋にあきれつつも、優弥は奏太の方を見てみた。動く様子はない。と、思うと急に立ち上がった。

「奏たちいる。逃げるぞ！」

と、優弥の手を引っ張られた。

『わっ！ちよっ・・・』

優弥は、奏太に握られた手を、強く握りしめた。

#42 逃げる、そして手？

いつの間にか奏太の手は離れていた。

現在優弥達は廊下で配っていたあめを食べながら歩き回っていた。

（手えくらい・・・つなぎたいなあー）

「おい、優弥！何処行くんだよ」

「えーあ、えーっと・・・」

急に話しかけられたのでポケットから急いでパンフレットを取り出す。

「えーっと・・・」

話しながら階段を上った。

「・・・おい、優弥」

「？どつたの？」

階段を上っている途中、急に奏太が立ち止まった

そして首に手がまわってきた。

「そつ・・・奏太？！」

・・・思ったら首に腕をかけられ、引っ張られた。

「ぐえ！！ぐるじい！！！！」

急いで階段を下りて階段横の誰もいないスペースへ連れてかれた。
とりあえず座る。

「何？！どうしたの？」

「ああクソ！黙れ！！！！」

口を押さえられた。

「奏太たちが階段の上から降りてきてんだよ」

「モゴモゴ・・・」

しかしこの距離は近すぎる。すぐ隣に奏太がいる。

「もう行ったな・・・」

奏太が立ち上がって歩き出す。

「ほらっ行くぞ。」

『うんっっ・・・』

急いで立ち上がった奏太の後ろを付いていく。

「・・・」

奏太がずっと黙っていた・・・かと思うと急に手を差し出す。

『・・・？何？』

「・・・めんどくさい女だな、お前」

そして奏太は優弥の手をつかんで引っ張る。

「・・・行くぞっ」

『・・・うん／＼』

4 3 見つかった。

「で？何処行くんだよ」

優弥と奏太は手をつないだまま廊下を歩いていた。

『えつと・・・』

「優弥？」

『え？』

後ろの方から聞き覚えのある声がする。

いやな予感。後ろを振り向くと予感的中。

『お兄ちゃん?!』

優弥の兄と奏太の姉がいた。

奏がため息をついて心配そうに奏太を見つめた。

「何処にもいないから交通事故にでもあったのかと思ったよ。ああ良かった」

「こんなところでどう交通事故おこすんだよ。過保護が」

奏太が冷静にツツコんだ。

「だあって、奏太も優弥ちゃんも何処にもいないんだもん・・・アレ？」

奏太の姉がふと、優弥と奏太の手元を見る。

『あ』

手をつないでいたことに気付いた。

「やぁーんw何い？2人つてつきあってるの??ねえ?付き合ってるんでしょ?ねえねえ!」

「うわ・・・うぜえ・・・」

奏太が予想した通りの反応だったのだろう。とても迷惑そうな顔をしている。

「おい、優弥、逃げるぞ。」

『う・・・うん!』

2人で急いでその場を立ち去る。

「祐人ってあんな無口だったっけか？」

走りながら奏太が聞いてきた。

『うーん・・・しばらく会ってないからなあ・・・』

「で？何処いくんだよ」

『体育館！よくわかんないけど麻衣ちゃんが来てって言うってた』
なんだかんだ言っただけで優弥は結構麻衣と仲良くなっている。

「アイツはもういい・・・」

『えー行こうよー』

めんどくさそうな顔をしていたが結局2人は体育館へ向かった。

「・・・はらへったなー」

『何か言った？』

「いや、何にも・・・」

#44 ファッションショー？

「???なんだ?」

体育館に行ってみると結構たくさんの人がいた。

「何やってんだ?ここ」

まだ何も始まっでは無いみたいだが・・・

「あ!優弥ちゃん!!奏太くん!!!」

遠くから麻衣が手を振って走って来た。

「よかったあ。来てくれたんだあ!!!」

「???ここ何やってんの?」

「ファッションショー!」

麻衣が手にたくさん紙袋を持っていた。

中を覗くと服が入っていた。麻衣も出るらしい。

「あ!そうだ!」

麻衣は袋に手をつ込んで探りはじめた。

そして1着の服を取り出した。白いドレスだ。

「・・・何?」

「コレ1着余ってるんだけどどうせなら出ない?」

「・・・わー・・・」

隣で奏太が変な顔をしていた

「・・・って・・・はい?!」

「いいからいいから!更衣室に係の人いるから!ほら!」

と、強引に腕を引っ張られた。

「えー?!」

「まもなくファッションショーが始まります」

体育館に放送が響いた。

「無理無理無理・・・」

優弥はステージ横で青い顔をして無理と言いつけている

「大丈夫だって!! 似合ってるし!」

アリスのような格好をした麻衣が隣で慰めてくれている。

『無理だって!!!!!!』

「大丈夫だって! ほら! 私たちの出番だよ!」

『えー・・・』

と、麻衣はステージへと歩き出す

『わぁ! まって!!!!!!』

#45 お疲れ様。

『疲れた・・・』

ファッションショーが終わると同時に学園祭も終わりに近づいてきた。

もうすっかり片付けられている教室にいた。

優弥、奏太、麻衣のほかには誰もいない。

優弥はファッションショーの時の服のままだ

「お疲れさまー」はい！これ！参加賞！」

麻衣は優弥に花束を渡した。

・・・てかこれブーケか？何処から手に入れたんだ

『・・・ありがとう』

「皆何処行つたの？」

奏太が麻衣に向かって訊ねた。

「エンディングセレモニー？とかいうのじゃない？」

『そっぴやそんなのあつたなー』

皆は玄関前で行われているエンディングセレモニーにいつているらしい。

「じゃ、私も行ってくる！」

と、言い残して麻衣は去って行つた。

奏太と2人だけになった。

優弥は花束・・・いや、ブーケに付いていたリボンを取って花を教室にあつた花瓶に入れた。

花束にブーケっぽく付いていた白いヒラヒラの布とリボンは適当な机に置いた。

「どうすんの？行くの？」

『あ！う・・・』

うん と返事をしようとしたが足に激痛がした。

『いたっ』

そのまましゃがみこんだ。

「・・・なにやってんだ」

『足・・・』

くつずれらしい。

「はあ・・・馬鹿じゃね？・・・1回保健室行ってくるから待ってけ」

『うん・・・』

優弥は一人、窓際の机に座って外を眺めてみた

（あ・・・エンディングセレモニー・・・ここから見えるんだ・・・

）

窓から外の様子を眺めながら奏太の帰りを待った。

#46 未来への誓い？

——ガラッ

教室の扉が開いた。奏太が帰ってきたのだ。手には救急箱を持っていた。

「足出せ」

と、奏太は優弥の足元にしゃがんだ。言われた通りに足を突き出してみる。突き出した足が奏太に見事にHit。

『・・・あ』

「殺されてえのか teme は」

『ごめんごめん』

と、奏太は優弥の履いていたヒールを脱がしてから救急箱から絆創膏を取り出した。

（うわっ！手！！足に触れてる触れてる！！！！）

「はい、出来た。」

『あ・・・ありがとう』

沈みかけた太陽のオレンジ色の光が窓から差し込んでくる。

奏太はブーケについていた布を取り、優弥の頭の上に被せた。

『わっ！何すん・・・』

優弥が奏太を見ると奏太は、笑っていた。

「それさ」

『べールみたい・・・？』

「俺の台詞だ」

奏太は優弥の頬に右手をあてた

「目、閉じる」

優弥は静かに目を閉じた。

エンディングセレモニーが行われている校庭はもう学祭は終わりだ

というのにかなり盛り上がった。

「学祭終わっちゃうねーもうエンディングだよー」

1年生らしき2人が寂しそうに話し込んでいる。

「だねー・・・あ！！あそこ！2年生のクラス！窓のところで奏太先輩が・・・」

2人は優弥達がいる教室を見上げた。

「わ！生チユーはじめて見た！！何かあれ・・・結婚式みたい・・・だね」

白いドレスに頭にはベールの様な白い布。

結婚式の衣装のような服をきているのでそうみえても仕方が無かった。

それはまるで、未来のための、永遠の愛の誓い——・・・

「あ、優弥いた！エンディング行かないの？」

突然扉が開き、教室にいきなり千秋が入ってきた

2人は急いで顔を離れた

『いつ・・・行く！行きますとも！／＼／』

「・・・／＼／」

「ふうん、じゃあ早くこいよー」

千秋が出て行ったあと、奏太がため息をついた。

「ホラ、行くぞ。」

手を差し出される。

優弥はつい、笑顔になった。

『うんっ』

#47 代休。

pipipi・・・

学園祭の代休の日の朝7時、優弥の部屋で目覚ましがなり続けている。

『うん・・・』

せっかくの休みなので止めようと布団から手を伸ばし、手探りで時計を探す。

「ゆーうや！」

『む？』

部屋のドアの向こうから声がする。

声の主は2回ドアのノックして部屋に入ってきた。

「朝ごはんできたよ」

布団から顔を出して見てみると、そこにいたのは兄だった。

『あれ？お兄ちゃん！学校は？』

「休み」

『お母さんたちは？』

「2人とも仕事。ほら、朝ごはんできたよ」

『はい』

朝ごはんを食べ終えて適当にテレビを見ていた

♪♪♪

ケータイの音が鳴る千秋からメールだ。

今って暇？

どっかいかない？

千秋

優弥も暇だったので行くと返信しておいた。駅前千秋と待ち合わせ

せ。

鞆に適当に物をつめて家を出る

『いつてきまーす』

2階から兄が顔を出す

「いつてらっしゃーい」

眼鏡をかけていた

『勉強？』

「うん」

と、言つて部屋に戻つていった

48 電車内。

優弥が小走りで駅へ向かうと千秋はすでにいた

『ちーあきつ』

優弥が手を振りながら叫ぶと千秋が小さく手を挙げた。

「おーっす」

『静香は?』

静香がいない事に気付いたので聞いてみるとどこから出てきたのか分らない静香と叶らしきパペット人形を取り出した

「これ」

優弥は一瞬でデートと察した

『ああ、デートね。ラブラブですなあ・・・』

「あんたらもな」

『は?!ベ・・・別にラブラブってワケじゃ・・・』

「学祭でちゅーしてた奴らが?」

電車が来たので車内で席を探しながら話を続ける

「お前ら学校でちゅーすんの好きだなあー」

千秋が席を探しながら呆れていた。

『何で知ってるの?!』

「教室の前ですつと見てた。それにあの場所なら校庭に居た奴等も何人か見たんじゃない?」

あいている席があつたので向かい合って座り込んだ

千秋が早速お菓子をひるげる。

『千秋も竜とデートでもすればよかったのに』

「奏太と出かけてる。何、優弥知らなかったの?」

『そっいえば奏太家にいなかった・・・』

「仲いいんだか悪いんだか・・・」

『千秋は竜とラブラブとかないの?』

聞くと千秋が急に赤くなつた。

「べっ・・・べつにそんなのないし！」
『赤くなっただかーわいい！』
「ば、馬鹿にすんな！！」

49 偶然×2？

『あ！この服雑誌に載ってた！』

街へたどり着いた優弥は千秋と適当にショッピングしていた。

優弥は雑誌に載っていた服をずっと見つめていた。

『千秋！買って来ていい？』

「うん」

優弥がレジに行っている間、千秋は適当に店内を見てまわった。

「あ、これ可愛い・・・わっ！」

急に後ろから誰かに抱きつかれた。

何事かと思つて無理矢理離して後ろを振り返る。

「え」

そこにいた人物を見て千秋は一瞬、目を疑った。

『千秋！おまたせー』 お金もう無・・・』

優弥が千秋のところへ戻るとそこには千秋と一緒に奏太と竜がいた。

『何でいんの！！！！！！』

奏太に向かって叫ぶ。

「知るか。こつちが聞きてえよ。お前らこそなんでいんだよ」

「じゃあ・・・とりあえず別行動でもする？」

喧嘩が始まりそうになつた2人を止めるように千秋が言った。

『え？何で？！』

「いや、せつかくカップル揃つてるんだし。」

『とか言つてただ千秋が竜と一緒に居ただけとか？』

優弥が楽しそうに言うという千秋に思いっきりみぞおちを殴られた。

結局奏太と一緒に遊ぶことになつた優弥は今度は奏太と街を歩き回っていた。

千秋が言うには帰りは勝手に帰ってくれ。だそうで。

『え、えつと・・・』

急に話題が無くなったので頑張つて話題を探す。

「あー！！！！！！」

刹那、後ろから大声が聞こえたので2人は驚いて振り返った。

「先輩何してるんですか！！！」

『え』

後ろで指差して立っていたのはけんけんだった。

奏太が呆れた顔でけんけんを見下ろした。

「お前・・・まだあきらめてねえのかよ」

「もちろんです♪♪」

奏太がため息をついて優弥の方を見る。

「おい、帰るぞ。」

『ええ・・・でもまだ・・・』

「いいから！」

優弥と奏太の会話を聞いてけんけんが笑顔になった。

「先輩達帰るんですかー？じゃあ僕も♪♪」

ということに駅に3人で向かった。

#50 クレープ。

優弥、奏太、けんけんの3人は駅に着いた。

3人の乗る電車が来るホームへ向かっているところだった。

優弥がホームを見てみると電車はすでにあつた。

『あ！もう電車来てるよ！』

「急ぐか」

奏太の声に3人は少し急いでホームへ向かった。

3人がホームへ付くと電車が走り出しそうだったので急いで乗り込む。

「……。」

ところが奏太はドアの前で止まった。

『奏太?! 乗らないの?! 戸閉まるよ?!』

「……気が変わった。」

奏太は優弥の手を引っ張ってホームへ引き寄せた。

『わぁ!』

その途端、電車のドアが閉まった。

「あ! ちよ! 先輩?!」

電車はけんけんだけを乗せて走り出した。

2人になったホームで優弥はおそろおそろ奏太を見上げた。

『そ……奏太?』

「気が変わった」

『は?』

「どーせお前まだ遊び足りねーんだろ。ほら! 行くぞ」

『え? あ……へ?』

「うるせーな。ちよつとは静かに歩け」

『……はい』

なんだかよく分らないままとりあえず戻ることにした。

『・・・あ』

優弥はふと呟く。戻ってみたのは良いが1つ問題点が。

「何だよ」

『お金無くなったんだっただ』

「んな変な服買うからだろ。」

奏太が優弥のもっていた袋を見て言った。

『んなこと言われても！結構高いんだよ！！！！』

そんなことを言うと奏太がクレープを買ってきた。

クレープは優弥の好物なのだ。

（奏太・・・やっと女心がわかるように・・・）

と、思いきや奏太は自分で食べた。

『・・・嫌味？』

「うん」

と、あっさり答える。

すると急にクレープをこちらに向けてきた。

「ばーか。嘘だよ。やるよ」

『し・・・仕方ないく、貰ってあげるよ』

仕方なくクレープを一口いただいた。

『おいひい・・・』

5 1 雷。

しばらく奏太と遊びまわったところで奏太がふと空を見上げた

「・・・降りそう」

『何が?』

「雨」

いつの間にか空には黒雲が漂っている。

『そろそろ帰る?』

「そーするか」

電車に乗って駅に着いた頃には今にも雨が降り出しそうだった。

「・・・走るか」

奏太は仕方なさそうに呟いた。

『ええ・・・奏太速いんだもん!』

「お前が遅いだけ」

『私別に標準だし!!!!』

「んなもん知るか。走れつつってんだろ」

『嫌!!!!』

結局歩いて帰っていた。

家までの道を半分開らい歩いた時、空が急に光った。

『雷っ?!』

優弥が雷が大の苦手なのだ。

小さい頃は雷が怖くて奏太に捕まっていたら「うざい」と振り払われた記憶がある。

そんなこと言われても怖いものは怖い。

（実際今もとつさに何かにしがみついているし。電柱?）

はっとして上を見上げる。

・・・奏太だった。

（ええっ?!?!?!何やってんだ自分!!!!また怒られ・・・）

「ごめん」といつて奏太から離れようとした時、奏太の片手が優弥の背中に来た。

そのまま奏太の元へ引き戻され、もう片方の手で優弥の頭をぼんぽんされていた。

（・・・へ？・・・昔と反応違う・・・？）

「お前まだ雷嫌いだったのかよ。」

『あ・・・うつ・・・うつさい！』

奏太を握る力を強める。

ゴロゴロゴロ・・・

雷の音と共に大量の雨が降り出した。

『ぎゃあ！！ぬれる！ぬれる！！！！』

「急ぐぞ」

『ちよ！奏太はやいはい！！』

「お前が遅いって言ってるんだろ。早く走れよ」

『ああ！もう！うつさい！』

52 ご飯はカレー！

駅からはどちらかというと優弥の家のほうが近い。

家が隣なのでほんの数メートルの差なのだが。

奏太は優弥が玄関に入るのを確認してから家に向かった。

『ただいまぁー！お兄ちゃん？』

雷が怖いので帰って即効兄を探しに階段を駆け上がって兄の部屋に向かう。

部屋のドアを開けると兄が荷造りをしていた。

「あ、優弥。お帰り」

『・・・もしかして帰るの？』

「ああ・・・うん。明日から学校だから。お母さん達今日仕事で帰ってこれないかも知れないから・・・留守番お願いね。」

『ええー！！』

「夕飯は作ってあるから。温めて食べてね。」

『え、あの・・・そうじゃ無くて』

「雨でびしょびしょだから拭いときなよ。じゃあもう行くね。」

と、あっさり出て行ってしまった。優弥は急いで自分の部屋に向かう。

そして思いっきり窓を叩くと隣の家から奏太が出てきた。

外は雨が降っているのとおりあえずベランダを伝って優弥の部屋に来了。

奏太も優弥と同じく雨にぬれたままだったが奏太は手にタオルを持っていた。

「何？今会ったばかりじゃん」

『奏太あゝ！！！！』

優弥はとりあえず現在の状況を説明した。

「・・・で、誰もいないと。」

再び雷が鳴る。

『わああ!!』

「・・・」

奏太があきれた顔で優弥を見つめた。

「とりあえずお前頭拭けよ」

奏太が持つていたタオルを優弥に渡す。

奏太がぬれたままなのは気になったが優弥はそのタオルで頭を拭いた。

『・・・奏太のにおいがする』

「お前なんかキモイぞ。」

『香水のにおいしかないんだけど!』

「・・・かさねーぞ」

『・・・すんません』

とりあえず夕食を食べるために奏太と1階に戻る。

夕飯はカレーが机に置かれていた。

『まだ少し余ってるけど・・・奏太食べる?』

「ん?じゃあ食う」

優弥は席について夕食を食べ始めた。

#53 指輪。

優弥は夕食を食べている途中、ふと手を止める。

『そういえば奏太の家の人は？』

「知らね。どつか出かけたんじゃない？」

『ふーん・・・てか奏太頭ふきなよ』

「いい。そのうち乾く。」

『だめだよ！！風邪ひくよ！！』

優弥は肩にかけてあつた奏太に借りたタオルを奏太に渡した。
だが奏太は拭かずに頭にかけただけだった。

「ごちそーさん」

『速っ！』

と言つて奏太は食器を片付けて再び席についた。

・・・。

・・・。

・・・。

「お前食つのおせーよ！！！！」

急に奏太が怒鳴りだす。

『うるひゃい！！！！アンタが速いの！！！！』

「もつと速く食えよ！」

『うるさい！』

2人きりになつても2人の態度は相変わらずだった。

『ほら！食べた！ごちそーさま！！』

「遅い」

再び優弥の部屋へと戻る。

入るなり奏太が優弥の首についているネックレスを見つめる。

「ん？これ・・・」

ネックレスのチェーンには奏太が優弥の誕生日にあげた指輪が付い

ていた。

『ああ。これ？手洗った時とか濡れるの嫌じゃん？だから指より首にしようと・・・』

「ふーん」

奏太が喰らいつくように優弥の指輪を見つめた。

『え・・・あの・・・』

あまりにもじいーっと見るので少しづつ、後ずさる。

奏太は指輪を手にとって見ている。優弥はだんだん後ろへ下がる。

『わっ！』

「?!」

途中、何かでつまづいてバランスを崩した。

指輪を手にとっていた奏太も巻き込まれて2人で、倒れ込んだ。

#54 雨と指輪と草むらと。

時計の針の音だけが静かに響く優弥の部屋。

ベッドの上には倒れこんだ優弥と、その上には奏太。

「いつてえー・・・何やってん・・・」

奏太が顔を上げた。優弥は思わず焦る。どうすればいいのか、この状況。

その時、外が光って雷が鳴り響いた。

『ぎゃあ!!!!!!!!!!!!!!』

当然のように優弥は怖がった。奏太は呆れた顔で優弥を見ている。

『あ』

「・・・」

『・・・すみません』

奏太が立ち上がる。

「一晩中一緒にいるわけにもいかねえし、雷怖いならさっさと寝てろ。」

いつの間にか時計の針は9時をさしていた。

寝るのには少々早い気もするが雷が怖いのではやく寝ることにしよう。

『・・・そうします』

優弥がそう言うとき奏太はベランダから自分の家に戻っていった。

奏太は自分の部屋の窓とカーテンを閉めた。

どれだけ雨が降ってるのか確認しようと優弥はベランダに出て外を覗きこんだ。

刹那、運悪くネックレスのチェーンが切れた。

『えっ?!』

奏太に貰った指輪は呆気なく庭の草むらへ落ちていく。

『嘘でしょお?!!!!!!!』

急いで庭まで駆けていった。急いで指輪を探す。

真つ暗で雨が降っていて、しかも草むらに落ちてしまったのでなかなか見つけることが出来なかった。

『もうー！！！！何処行つたの！！！！』

優弥は傘もささずに大雨の中探し続けていた。

『・・・・？』

急に雨が降らなくなった。と思つて空を見上げると傘をさした奏太がいた。

「・・・・何やってんの」

呆れた顔で優弥を見た。

『奏太から貰つた指輪落とした・・・・』

「んなの探すの明日でもいいじゃん。こんな雨のなか探したら風邪ひくぞ。」

『犬が何か持つてつちゃうかもしれないじゃん・・・・』

「んなのいつでも買うし」

『あれじゃないと嫌なの！』

小さい頃から2人は喧嘩ばかりしてたので誕生日を祝うことなど無かった。

『はじめての、プレゼント・・・・』

「・・・・あ、あれじゃないの？」

『え？』

しばらく呆れた顔をしていたが奏太が急に木を見て言った。
木には指輪がかかっていた。

#55 立ちくらみ？

木の枝に優弥の指輪が見事に引っかかっている。

『あんなところにあつた！！』

奏太がスルスルと木に登って引っかかっていた指輪を取って優弥に投げた。

優弥はそれをキャッチした。奏太は木から飛び降りて再び地上へ戻ってきた。

『ありがと』

「ばーか」

『よかつたああああ』

優弥は安心してその場に座り込んだ。

「きたねーぞ」

優弥は座り込んだまま動かない。

「・・・優弥？」

『スー・・・スー・・・』

奏太が優弥の顔を覗き込むと、優弥は眠っていた。

「・・・ありえねー女・・・」

『ん・・・？』

優弥が目覚めるといつの間にかベッドの上にいて朝になっていた。ふと時計を見た。8時。

『わあ！！！！学校！！！！』

起こしてくれなかった奏太を恨みながら起き上がる。

その途端、なんだかくらくらした。

『・・・立ちくらみ？』

そんなことよりも今は学校へと急ぐ。

『電車間に合うかなあー？？！！！！』

『奏太！！！なんで起こしてくれないの！！！！』

ギリギリセーフ。教室に入った途端にチャイムがなった。

「あ、来たんだ」

『来たんだじゃないし！！あー！疲れた！』

「ご苦労さんご苦労さん（棒読み）」

『やっぱりなんかむかつく！！！！』

「ほらほら、1限目始まるよー（棒読み）」

『うざい！！！！』

1限目の先生は何かとうるさい先生なのでとりあえず席に着いた。

56 マラソン。

2 限目は体育でマラソン。

こんな寒い時にマラソンをするといい出した先生を恨みながら優弥はグラウンドに居た。

「さっむー!!」

体育の先生は無駄に熱血なので必ず半袖半ズボンにしろといわれている。こんなに寒い日でも。

優弥は朝、頭がくらくらしていたのがまだ続いている。

「はあ・・・」

チラリと奏太を横目で見る。

男子はもう走り終えたのでこの寒いのに汗をかいて水を飲んでいる。奏太は1と書かれた紙を持っていた。・・・1着か。

「女子ー！走るぞー！並べー！」

先生の掛け声とともに女子がスタートの準備をしまった。

「奏太にまけたああ！」

竜が2着の紙を持って奏太の肩に手を回した。

「重い」

丁度中間の順位でゴールした叶もよりそってくる。

「みんなはやくていいなあ」

「いやいや、カナは遅いままでいいし。」

しばらくして、だんだんと数人の女子がグラウンドに戻ってきた。なかなか優弥の姿が見えない。

「あれれー？ゆーやん珍しくおそいねえー」

竜の言葉にはつとずる。

「アイツ・・・」

奏太は急に立ち上げてどこかへ駆けていった。

「奏ちゃん？」

「そーたあ？何処行くのー?!」

優弥は中間地点くらいで立ち止まっていた。

「はあー・・・どうしたんだろ私・・・」

頭がくらくらする。立っているのがやつとだった。

「優弥!」

急に奏太の声がした。

びっくりして振り返る。

「奏太?!」

「はあ・・・だから起こさなかったんだよ」

「え・・・?」

安心した優弥は思わず奏太のところへ倒れ込む。

奏太は倒れてきた優弥を支えた。

「あんな雨のなかわざわざ指輪なんか探してるからだよ」

と、呆れた顔で優弥に言った。

「・・・?」

頭が朦朧としていた優弥はいつの間にか奏太の腕の中で眠っていた。

#57 見透かす。

「38.2」

『すみません・・・』

保健室のベッドで横になっていた優弥は奏太の言葉を聞いて驚いた。体温を測ってみると熱があつたのだ。

職員室へ行っていた保健の先生が戻ってきた。

「今、如月さんの家誰もいないんだけど・・・1人じゃ帰れないよね？」

困った顔で奏太をみつめた。

「藤波君・・・悪いんだけど如月さんの家まで連れて行ってあげてくれない？」

奏太が優弥を睨んだ。

「めんどくせえ・・・」

『・・・すみません』

「寝てたらそのうち直るだろ。俺は学校戻るから」

優弥の家に着くなり、適当な言葉を残して奏太は学校へ戻っていった。

奏太に言われた通り、優弥はとりあえず寝ることにした。

奏太が優弥の家を出ると、千秋が居た。

「優弥が心配になって。授業サボってきた」

そう言った千秋はにやりと笑って話を続ける。

「お前さ、朝わざと優弥起こさなかっただろ」

「喧嘩の盗み聞きかよ。嫌な趣味」

「お前等がうるさいから聞こえてくるんだよ！・・・お前等喧嘩ばかりするし心配になってたけど大丈夫みたいだな」

「は？なんでだよ」

「駅反対方向。どうせ薬局でも行くんだろ？」

何もかもを見透かしたような目で、千秋が笑った。

優弥つが目が覚めるといつの間にか夜の7時を過ぎていた。

『・・・もう夜か』

と、枕元にビニール袋が置かれていた。

『・・・？』

何かと思って空けてみると色々と薬が入っていた。

と、ケータイが鳴る。千秋からだ。

『もしもし・・・？』

「おー。優弥？大丈夫かー？何かお前の旦那が色々と薬買ってたぞ。感謝するんだな」

『奏太が・・・？』

「うん。もういいから寝とけ。じゃあね。」

と、電話が切れた。

部屋の外から、誰かが階段を上がって来る音が聞こえる。

『お母さんかな・・・？』

戸が開いて優弥の部屋に入ってきたのは奏太だった。

「あ、起きてた。お前の母さん帰って来てたぞ」

『うん。あ！コレ、薬ありがとう』

「別に。俺もう帰るから」

と、ベランダから自分の部屋へ戻っていった。

58 復活

『如月優弥、完全復活いたしました〜!』

と、目の横の方でピースをしてなんと小学生らしく教室に入った。風邪は1日寝たらすつかり直ってしまった。

「おう！優弥、久しぶりー」

「ゆーちゃん！！おはよう」

と、千秋と静香にまず声をかけられたのだが優弥はちらりと奏太を見ている。

机に座つてのんきに竜やカナと喋っている。奏太がこちらに気付いた。

「あ、来た」

『お・・・おはよ』

「別に来なくてもいいのに。」

『あんた他にかける言葉は無いの?!』

「お前にはない」

『それひどくない?!』

そして奏太は教室から出て行ってしまった。

「奏ちゃん何処行くの？1限目はじまるよ？」

心配した叶が可愛い顔で奏太に聞いた。

「古文めんどくさいからさぼる」

『カナ、あんな奴もうほっとけ』

近くで千秋と静香が集まっていたのでそちらに向かった。

静香がデートの出来事について楽しそうに話している。

「んでね！カナちゃんすつごく可愛くてね」

「そういえば静香と叶はどこまでいったの？」

静香の話をさえぎって千秋が問い詰めると静香はきょとんとしていた

「え？別に手つないだりとか・・・」

「それだけ?!」

優弥と千秋の声が揃った。

「え？うん・・・」

静香はよく分らない顔をしていた。

『ちゅ・・・ちゅーとかは？！』

「そう！優弥と奏太みたいな！」

『千秋ちよつと黙ってください！』

「え？・・・別に無いけど？」

『馬路ですか・・・』

「誰よりも先に付き合ってた2人が・・・」

『そうだとは思ってたけどね』

と、チャイムがなって先生がきたのでとりあえず席に座った。

#59 始まりは些細なコト。

今日も何とか学校が終わり、いつもの6人で帰りの電車に乗っていた。

1番最初に静香と叶が電車を降りて、電車を降りた後も帰り道が途中まで一緒なのでしばらく一緒に帰っている。

静香は今日の学校での出来事を思い出した。

あまりにも展開が遅すぎるため千秋が大量の少女漫画を貸してくれたのだ。

と、いろいろ考えているうちに分かれ道にたどり着いていた。

「しーちゃん？」

静香がぼーっとしていると叶が静香の顔を覗き込んでいた。

「え？何？」

「ここではいはいだよ？」

「あーうん」

（確か・・・ちーちゃんの漫画ではここでちゅ・・・ちゅーしてた・・・）

そんなことを思い出して静香は叶の服の袖を引っ張り、しばらくじつと叶の顔を見つめてみた。

「カナちゃん・・・」

「しーちゃん？はいはい」

「え・・・？あ、うん」

そういつてあっさり帰って行った。

「・・・帰っちゃった」

『え？ちゅーされなかった？！』

次の日、静香は教室で優弥と千秋に昨日の出来事を話してみた。

「それって別にカナは静香のこと好きじゃないとか？」

『こらこら、千秋！』

「え」

『ああ！！別にそんなわけ無いじゃん！ほら、カナ結構鈍いから「ちゅーして？」くらい言わないとき！！ね？千秋ー！！』

「・・・」

優弥は必死にそう言ったのだが千秋からの返事がない。

静かに千秋の方へ顔を向けると千秋はいつの間にか机に顔を伏せてぐっすりと眠っていた。

『こんな時に寝るなあー！！！！！！』

優弥はかなり必死に千秋の体を揺らすのが起きる様子が全く無かった。

「好きじゃない・・・好きじゃない・・・」

魂のぬけたような顔で静香はどこかへ歩き出した。

『しーずかー！！！！何処行くの？！』

「わかんないいいい・・・」

そう言いながら教室を出て行った。

『大丈夫かなあ・・・てか千秋ー！！起きろー！！！！！！！！！！』

「ち・あ・きいっ」

そのとたん、アホみたいな顔で竜がやってきた。

机に顔を伏せて寝ている千秋の真横にしゃがみこんでそのままぐんぐん近寄っていく。

「眠り姫はチューすると起きるんだよぉ」ちゅー・・・」

「人が寝てるときに何しようとしてんだよっ！」

千秋が飛び起き、見事に殴り飛ばした。

『この2人も大丈夫なのかなあー・・・』

#60 決意

『おはよー』

朝、優弥は教室に入るなり明らかに落ち込んでますというオーラを出していた静香のところへ向かった。

「ゆーちゃん・・・おはよ」

『元気だそーよ』

「だってえええええ」

「どったの？」

いつの間にか後ろに立っていた千秋が話に割り込んできた。

『わあ！千秋！おはよ』

「おはよう。何この暗い空気」

『知らない。朝から静香がこのような調子で』

「どしたんよ、静香」

「花占い」

静香が小さな声で呟いた。

『「は？」』

千秋と優弥が声を合わせて静香に聞き返すと静香は急に壁の方を向いた。

「花占いやってたらどうしてもカナちゃんは私のことが嫌いになっちゃうの」

『花占いっ？！』

「信じんなよ！！！！」

『乙女チックなこと』

「叶が静香のこと嫌いなワケ無いじゃん！」

『そうそう！』

千秋が静香の肩をつかんでそう叫ぶ。優弥もそれに頷いた。

「・・・ほんとに？」

涙目で静香が訴える。本当に可愛らしい子だ。

『うん。ほんと』

「カナちゃんのところ行ってくりゅ」

優弥の返事で静香は急に幸せオーラを出して奏太と竜と叶が喋っていたところへ向かった。

「ひなたくーん！日向叶君！」

静香が向かおうとした時、教室に急に他のクラスの女子がやってきた。

呼ばれた叶が振り向き、首を傾げた。

「・・・？誰？」

「隣のクラスの者です」えと・・・これ！家で作ってきたから食べて！」

と、笑顔で叶にカップケーキらしきものを手渡す。

「？・・・ありがとう」

「きゃあー！！可愛いー！！じゃあね！ばいばい」

その様子を呆然とした様子で見っていた静香が優弥と千秋の元へ引き返してきた。

「もういいー！！」

『わお』

「どーした」

「きつとあの女の人が好きなんだあー！！」

『いやいやいや、おちつけ？さすがにそれは無・・・』

「もう別れるー！！」

『「はい？！！！！」』

静香の決意に、優弥と千秋は揃って叫んだ。

6 1 ピンチ。

翌日。教室の雰囲気は昨日よりも更に暗かった。
優弥は教室の隅で一人で怪しげに体育座りをしている静香の元へ近寄った。

『おはよ。静香、まさかほんとに別れたの？』

「うん！もういいの！！」

呆れた様子で千秋もやって来る。

「・・・何この雰囲気」

4 限目の体育が終わり、更衣室。

奏太と竜はもう着替えを終えているが叶だけがぼーっと突っ立っていた

「カナ、どうしたんだよ」

「どしたのー？」

奏太と竜が声をかけると叶は急に喋りだした。

「別れた」

叶の一言で奏太と竜の動きはぴたりと止まる。

そのまま叶はどんどん暗くなっていくので仕方なく奏太は叶を無理矢理着替えさせた。

「別れたって・・・静香と？」

「ええ？！なんでえー？」

そう叫んだ竜の疑問に叶は寂しげに答える。

「ほんとに好きでいてくれるのかわかんなくなった、だってさ」

「何？カナは静香のこと嫌いななの？」

「そんなわけないじゃん・・・」

その時突然更衣室のドアが開いて2人の同じクラスの男子が勢いよく入ってきた。ちなみに名前はうる覚え。

突然入ってきた男子2人は急に叫びだした。

「日向いるか?!」

「ヒナ、お前って前原の彼氏だよなあ?」

クラスメイトの問いに、叶は少し戸惑う。

もう少し空気を読んで欲しい。

「あ・・・えつと・・・」

「なんか男子に絡まれてるけど?」

「え?」

奏太と竜と3人で廊下に出てみると3人ほどの男子が静香のまわりに集まっていた。

「前原さあーん♪今日の帰り遊んで行かなあーい?」

「え・・・あの・・・えつと」

「いいじゃーん♪」

と、静香の周りを囲んでいた男子生徒のうち一人が静香の腕をつかんだ。

「やつ・・・止めてください!」

その様子を眺めていた竜は突然手をポキポキとならした。

「殴りに言ってもいいかい?」

竜が歩き出していたが奏太は肩をつかんで引き止めた。

「いや、行くな」

「何だよっ!マイスイートハニーの彼女が大ピンチ・・・」

「何意味不明な事言ってるんだよ。そのスイートハニー見てみろよ」

「んにゃ?」

竜が気付いた頃にはもう叶が静香のもとへ歩み寄っていた。

#62 彼女。

3人の男子生徒と静香の間に叶が無理矢理入り込み、急に叫んだ。

「やめてください!」

「は?意味わかんね」

静香は叶の登場に驚きながらもおろおろしていた

「カ・・・カナちゃ・・・」

「お前には関係ねーだろ。俺らデート行くんだもんなぁー?」

男子生徒は途中から静香のところを向いて言った。

静香はおろおろしていた。

「・・・ります!」

「あ?」

「関係あります!ば・・・僕の彼女にさわらないでください!」

叶の言葉に3人の男子生徒と、静香も驚いていた。

「はぁ?だからなんだよ!!」

男子生徒のうちの1人が叶に向かって殴りかかろうとしていた。

「カナちゃん危なっ・・・」

ところがその手は叶を殴る前に止められた。

竜が男子生徒の手をつかんでいたのだ。

「それ以上ハニーをいじめちゃ許さないよーん」

のんきな竜に男子生徒の怒りが強まっていくのがさすがの竜にもわかった。

ところが男子生徒が振りほどこうとしてもびくともしない。

竜は握る力をだんだん強めていった。

「いったたたたたたたたた!!!!!!!!」

「コイツ怒らせると学校壊しちゃうかもよ?」

後で奏太が腕を組んで壁にもたれかかりながら意味ありげな表情で呟いた。

もちろん、学校なんか壊すわけが無い。

「竜、その辺にしておけ。」

いつの間にか千秋もいた。

腕を組みながら呆れた様子でじっと見ていた千秋の一言で竜の手はあつさり離れた。

『千秋の愛の力だね』

いつの間にか千秋の隣にいた優弥が笑顔で呟いた。

「クソッ！覚えてろよ！」

3人の男子生徒は走って逃げていった。

「今の全然力入れてなかったのにナァー？」

竜が不満そうに言っていたがすぐに歩き始めた奏太に呼ばれる。

「竜、速く来い」

その一言で竜は叶と静香の存在に気付いた。

「2人にしておけ」

「ふふふーっりょーうかいっ」

とりあえず更衣室の前に座り込んでいた叶と静香を2人にして他の4人は教室に戻ることにした。

#63 笑顔。

更衣室の前で叶と静香が向き合って座り込んでいた。先に静香が口を開く。

「何で・・・？何で、彼女なんていったの？」

「わっ・・・別れようって言われても・・・しーちゃんは好きだし・・・ごめん、勝手なこと言って」

静香が俯いた。地面に数滴の涙が落ちていく。

「何でごめんなんて言うのお？・・・悪いのは全部私なのにつ・・・勝手なことはかり言ってたのは私の方だよ」

「しーちゃん・・・」

「だって・・・せっかく付き合ってるのにカナちゃん・・・ちゅーも何もしてくれないんだもん」

叶がぎゅっと静香を抱きしめた

「ごめんね・・・僕、しーちゃんのこと、大好きだから・・・ね？」

「うんっ・・・助けてくれてありがとう」

2人は向き合って笑いあった。

『仲直りしてよかったねえー』

帰りの電車。いつもの6人で帰っていた。

「お騒がせしてすません」

優弥の声に、静香はうつむいてあやまった。

電車が静香と叶の下りる駅に着くと、千秋がにやりと笑って手を振る。

「まあまあ、せっかく仲直りしたんだから。仲良く帰りなさいな」

「もう／＼ばいばい！」

静香は恥ずかしそうに電車から降りていった。

電車を降りた後、2人は仲良く手をつないで帰っていた。

「そういえば今日から12月？」

静香がふと思つたことを口にした。

「もうすぐクリスマスだねえー」

そして、いろんなことを話し込んでいるうちに別れ道に着いた。

「あ、カナちゃん、ばいばい」

静香はそつと手を離れた。

「んー・・・」

叶がなにやら考え込んでいた。

「?・・・カナちゃん？」

刹那、叶の顔が近づいてきて、静香にそつとキスをした。

「ちゃんと好きだってこと・・・信じた？」

叶があまりにも可愛らしい表情でそう言うので静香は思わず笑ってしまった

「信じたっ！」

#64 転校生。

12月上旬、街はすでにクリスマス気分だった。でっかいツリーが立っていたり、クリスマスセールなんかをやっている店もあった。

『すっかりクリスマスモードだねえー』

それを見ながら優弥は思わず呟いた。

学校の帰り、優弥と千秋と静香でカラオケに行くことになり、3人で街を歩いている。

「イブってまた何かやる？」

静香が首を傾げて優弥を千秋を見つめながら言った。

「クリスマスイブは毎年3人で集まって騒いでいる。」

去年は盛り上がりすぎてイブの朝から遊んでそのまま静香の家でクリスマスをむかえてしまった。

『やろーよ！やろーよ！』

優弥は楽しそうにピョンピョン跳ねながら千秋に言った。

「そだな。今年は順番的に優弥の家か？」

『あー、お兄ちゃん帰ってくるかも』

「いーじゃん。別に」

と、あれこれ話しているうちにカラオケに着いてしまった。

翌日、教室に行くと奏太たち3人が女子に取り囲まれていた。

『な・・・何あれ。いつもより人多くない?!』

と、1人で呟いていると静香と千秋がこちらに向かってきた。

「皆クリスマスにデートしたい奴らだよ」

千秋が呆れた様子でそう言っ、ため息をついた。

『ええ?!何それ!!』

「私もう力ナちゃんと予約済みだよ」

静香が嬉しそうに言う、と千秋も続いた。

「竜が私以外と行くって言いそうに無いから大丈夫だろ」

「竜ちゃんちーちゃんのこと大好きだもんね」

「優弥は？」

静香と千秋が2人そろって優弥を見た。

『・・・まだ約束してない』

「さーあ、どーする？」「優弥は何も言ってこないし、そこらの女子とクリスマスを過ごそう」て感じになっちゃうかもよー？」

千秋が途中で奏太の真似をしながら言った。静香があわてて否定している。

「そんなこと無いって！ほら、今のうちに奏太君に言っておけば？」

『う・・・うん』

勇気を振り絞って奏太の所へ行こうとしたがいいところで先生がやってきた

皆が席に座るといきなり先生が一言叫ぶ。

「突然だが転校生だ」

もちろん皆がざわついた

「転校生？こんな時期にか？」

「美少女かな？美男子かな？それともキモイ奴かな？」

「なんでこんな中途半端な時期に？」

いろんな声が優弥の耳に聞こえてきたが、転校生が教室に入ってきた。

「えっと、品浜悠希です！よろしくお願いします！」

茶色の髪をツインテールに結んだ可愛い少女。

#65 告白。

突然立ち止まった悠希に奏太は意味がわからないとでも言いたげな顔をしていた。

悠希は一度笑って、奏太を指さした。

「君・・・私と付き合って!!」

「・・・は？」

「一目惚れしちゃった」

「ぼー・・・」

昼休みの屋上。優弥は千秋、静香と一緒にご飯を食べていた。

「優弥、ぼーっとするのはいいけどわざわざ”ぼー”って口で言わなくていい」

「ゆーちゃん、大丈夫？」

静香が心配そうに優弥の顔を覗き込む。

「うん・・・」

あの時は結局すぐに授業が始まったのであの話の続きは聞けなかった。

「てゆーかお前はやく奏太誘えよ。クリスマスデート」

「うん・・・」

「ほら、噂をすれば奏太君だよ??」

「うん・・・え?!」

屋上の入り口を見てみると奏太がパンの袋をくわえてはいつてきた。

「そそそ奏太!!どどこどうしてここに?!」

「日本語喋れよ」

「十分日本語だよ!」

奏太が優弥の腕を引っ張って座っていた優弥を無理矢理立たせた。

「ちよっとコイツ借りてく」

奏太が一言残してとりあえず人気の無い場所に移動した。

「あの告白、断ったから」

『そ．．．そう．．．えっと』

「？何だよ」

『ク．．．クリ．．．めりーくりすます！』

クリスマスデートに誘おうとするがいざとなるとやっぱり言えない

「．．．ちょっと早くねーか？」

『じゃなくて．．．クリスマス．．．ひ、暇？』

「．．．暇だけど？」

『じゃ．．．じゃあ、で．．．デートとか．．．したり．．．』

「．．．別にいいんじゃない？」

『そそそそっ？！じゃ．．．じゃあね！』

優弥は急いで退散した。

#66 クリスマスプレゼント。

「奏太くーん ♪ ♪」

「・・・・・・」

悠希はあれから奏太にべったりだった。

現在も奏太の後ろから首に抱きついている。

じつとその様子を見つめていた優弥を千秋と静香が次々に優弥に話かける。

「大変なことになってるなー」

「・・・・・・」

「奏太君好かれてるねー」

「・・・・・・」

「ねー奏太君、クリスマス暇あ？」

突然聞こえたその言葉は悠希のものだった。

「おい、優弥、どうするよ。あの女クリスマス誘ってるけど」

千秋が優弥をつんつんと突いた。

「っ・・・・・・」

優弥は席を立って、奏太の所へ向かった。

『奏太は私のか・・・彼氏だからこれ以上近づかないで！』

奏太は驚いた顔をしていたが優弥の言葉に悠希は言い返す。

「別に関係ないじゃん。私、奏太君奪ってやるから」

ということで大変な日々が始まりました。

「竜ちゃん、奏ちゃん」

昼休み、突然叶に話かけられた。

「なになぁに？」

「？」

叶はジュースを飲みながら話を続ける。

「クリスマスのプレゼントは何がいいと思う？」

「んゝ・・・アクセとか、それに・・・」

叶は次々と出てくる竜のアドバイスを必死にメモしていたが奏太は財布を取り出した。

奏太は財布の中身を全部出してみる。全財産777円。

「全然うれしくねーよ」

そんな奏太の顔を竜が覗き込んだ。

「なあに？今クリスマスプレゼントの事思い出したような顔してんね？」

「別に。そんなんじゃないよ」

67 喫茶店

「奏太ー帰ろー」

放課後。いつもの6人で帰ろうと、優弥は奏太の所へ向かった。

「俺今日寄る所あるからパス」

「え、なにそれ」

「・・・」

聞いてみたが奏太は返事を返さずに教室から出て行った。

「???」

後ろから竜と千秋がやってきた。

「何？奏太どしたの？」

「奏ちゃんいないとつまんなーい」

「・・・さあ？」

奏太は普段優弥たちとはあまり来ない街を歩きまわっていた。

「・・・」

ふと、とある喫茶店で立ち止まった。

窓にバイト募集の紙が貼り付けてある。

「・・・こんな喫茶店あったのか。ここでいいか」

奏太はその喫茶店へと入っていった

次の日。外は雨が降っていた。

この日の帰りも奏太は寄る所があると言って1人で帰っていた。

「何なの？」

「まあいいじゃん。何か新しい喫茶店出来たらしいから今日はそこ行こう！」

千秋が優弥に肩を組んできた。

「ああ、あの滅多にいかない所にあるヤツ？」

「そう、それ」竜、静香、カナ、帰るぞーい」

優弥は千秋達と一緒に喫茶店に入った。さすがにまだまだ綺麗だ。窓側の方の席が開いていたのでとりあえず座る。

「お待たせいたしました。こちらが・・・」

と、後ろの席からやる気のなさそうな、聞き覚えのある声が聞こえた。

『え・・・何、幻聴?!』

優弥は驚いて後ろを振り返る。

そこには奏太の姿があった。

『は?! 奏太?!?!!』

「げ・・・」

#68 同じバイト。

優弥達がやってきた喫茶店には、間違いなく奏太の姿があった。

『何してんの・・・』

「おまえらこそ何してんの」

奏太の質問に千秋が頬杖を突いて窓をじーっと眺めて答えた。

「・・・雨宿り？」

「うそつけ。もうとづくに雨やんでんぞ」

「うっさい。たまたまだよ。奏太こんなとこにいたのかよ。」

千秋がようやく奏太の所を向いて言い返した。

「ねえ、奏ちゃん。オススメどれなの？」

叶がメニユーを手に持って奏太に聞いた。

奏太は静香の前に広げてあるメニユーを見た。

「知らないよ。これとかじゃない？てかあんたら金持ってるの？」

「お水を5つ。釣りはいらねえ」

因みにお水にお釣りは全く関係ない。お水は無料だ。

千秋がかっこつけた様子で言うとは何故か竜がお盆で殴られた。

「いったあ！！何すんのさ！てか何で俺？！」

「近くにいたから」

「えーつと・・・じゃあドリンクバー5つ」

奏太と竜のやり取りを無視して静香が注文した。

「あいよ」

奏太が戻ろうとした時、また誰かが店に入ってきた。

「すいません！遅れました！！」

入っていきなり叫んだ少女はどうやらバイトの子らしい。

『バイトも大変なもんだねえー・・・あれ？今の声どつかで・・・』

「あいつもここでバイトしてたんかよ」

『え？』

奏太の声で入り口の方をしてみる。品浜悠希だった。

めんどくさそうな顔で奏太は戻って行った

「そういえば何でアイツこんな時期に転校してきたんだ？すっごく微妙な時期なんだけど。」

千秋が疑問を打ち明ける。

『さあ？離婚とかじゃないの？』

「・・・夜逃げ？」

「何でそうなる。」

真面目な顔で変なことを言った竜が千秋に叩かれた。

「おまたせ」

コップを持つて奏太が戻ってきた。叶がそれに気付く。

「はいね」

「コップだけだからね。てかあんたらさっさと帰ってね」

『なんとも感じの悪い店員なこと』

優弥が呆れたように言った。

「お前まじ黙れ」

その後、千秋と奏太で何やら話こんでいたが優弥は奏太が悠希と同じバイトだということが気になって仕方が無い。

『・・・・・・・・』

それを見た奏太は優弥の頭をぽんと軽く叩いて戻っていった。

『・・・・・・・・／／／』

#69 イルミネーション。

「奏太君もこのバイトだったんだ」

もう店も閉めて真つ暗になった喫茶店から家に帰ろうとした奏太は悠希の言葉で振り返った。

「何？まさか私のこと追いかけて？！」

「んなわけあるか。」

「へへへ、残念。ねー、クリスマスデートしようよー？」

「残念ながら先客がいるもんで」

「えー・・・」

『そーうた！』

翌日の放課後、優弥は雑誌を持って奏太の席へ向かった。

「あ？」

『ここ！ここ！このイルミネーション見たい！』

と、雑誌を指差した。

「・・・いつ？」

『だからクリスマス！』

「ああ・・・。いいんじゃないの？そこらへんは自由。」

『なにそれー』

と、奏太は鞆を持って歩き出そうとした。

「じゃ、俺今日竜ん家よってくから」

『いつてらっさあーい・・・』

「ただいまー」

優弥が夕食を食べ終えて部屋に戻ると玄関で声がした。

『おかえりー？』

誰かと思つて覗いてみると玄関には兄がいた。

『あれー？学校は？』

「冬休みなつたから戻ってきた。母さん達は？」

『いや・・・まだ誰もいないけど？』

「ふーん」

そう言つてあつさり自分の部屋へ行つてしまった

『ごはんはー？』

「いない」

#70 クリスマスイブ。

「ちーっす！ゆーやあー？」

玄関で千秋の声が聞こえる。

優弥は急いで階段を駆け下りた。

『いらっしやーい』

今日はクリスマスイブ。

約束通り、千秋と静香が家に来た。

「静香は？」

『2階で待つてる』

そして千秋と二人で2階の優弥の部屋へ向かった。

「おー、静香ー！メリクリー」

「ちーちゃん！！メリクリー」

部屋の机にはケーキが2つ置かれていた。

千秋が呆れた様子でそれを見つめた。

「何で2つ・・・？」

『1つは静香でもう1つはお兄』

「実はココにもうひとつ」

と言って千秋は持つてきていた箱を優弥に突き出す。

『千秋もかよ。しかも市販かよ』

「きにすんなっ！」

「お前ら騒がしいんだけど」

数時間後、窓が開いて突然そう言ったのは奏太だった。

『うつさいなあ。クリスマスくらいいいじゃん』

「つか、優弥窓の鍵しめとけよ」

優弥と奏太のやり取りに口を挟んで千秋がつつこんだが優弥は何も気にせず話を続けた。

『ていうか奏太は竜の家でクリスマスしてんじゃないの？』

「バイトだから帰ってきた」

『ふーん・・・いつてらっひゃーい』

そして奏太はバイトに行ってしまった。

店の閉店時間も過ぎたので奏太は片付けをしていると帰ろうとしていた悠希に見つかった。

「奏太君！」

「・・・何？」

「冷たいなあー」

悠希は奏太を見つけるなり奏太の所へ駆けつけてきた。

「手伝おっか？」

「別にいい。・・・俺明日でバイト止めるから。」

「ええーそうなのー?!」

「そうなの。じゃ、帰るから。」

早く帰ってしまおうと思い、片付けをさっさと終わらせて奏太は店を出た。

#71 当日。

♪♪♪

昨日のイブで学校も終わったのでぐっすりと眠っていた朝、優弥は携帯の音で目が覚めた。

『・・・はい』

電話だったので出てみると奏太だった。

「・・・寝てた？」

『何の御用？』

電話の向こうは何やら騒がしかった。

『てか、こんな朝から何処にいんの』

「バイト。朝っていうかもう10時だし。」

奏太に言われて時計を見ると10時30分だった。

『わお』

一方奏太は器用に肩と顔の間に携帯を挟みつつ、皿を探していた。

「あ、そーだ。今日さ、夕方にならないとバイト終われそうにないから5時に駅でいい？」

『うん。じゃあバイト終わったらマツハで来てね』

「不可能なことを言うな」

『とりあえず頑張れ。じゃ』

携帯をポケットにしまうと、悠希に話しかけられた。

「彼女？」

「別に」

5時に駅という約束だったがバイトが思ったより長引いてすでに5時半だった。

奏太は現在更衣室にいた。

とりあえずケータイで時間をみてる。

「・・・やべ」

と、そこへ悠希がやってきた。

「やつほ」

「ここ女子の来るところじゃないんだけど？」

男子更衣室に堂々と悠希がやってきた。

「いやいやいや、奏太君にお話がありましてね」

「何？」

「今から彼女のところ？」

「・・・だからなんだよ」

奏太が答えると悠希は何か考えていた。

・・・と思うとケータイを取り出していじっていた。

「用がないなら帰るけど？」

と、更衣室から出て行こうと思った刹那、

「あ！待って！！」

悠希に腕をつかまれた。

#72 電話で。

悠希は奏太の腕をつかんで引っ張った。

奏太はバランスを崩す。

倒れるその瞬間、奏太の唇が悠希の頬に触れた。

すぐに奏太は顔を引き離れた。

「・・・何すんだよ」

「あーあ。ちよつとずれちゃった。・・・でも、ま、いつか」

悠希は奏太にケータイを見せた。

たった今起こった出来事の写真が写っていた。

奏太の唇が触れたのは頬のはずだったがその写真を写した角度からは完璧、キスしているように見えた。

「・・・器用だな、お前」

「この写真、彼女にバラされなくなったら今日、今から私とデートして？」

「は・・・？意味わかんねえよ」

「・・・ばらすよ？」

「・・・」

「・・・」

優弥は駅でもう1時間くらい待ったが奏太がまだ来ない。

「おそい！！！」

優弥は携帯を手にとって奏太に電話をかけてみる。

「もしもし」

疲れ果てたような声で奏太が出た。

「ちよつと奏太！おそいんだけど・・・」

優弥が話している途中、電話の向こうで奏太の他にもう一人、別の人物の声がした。

「ちよつと奏太君ー？」

ブッ・・・ツッ・・・ツッ

そこで電話が切られた。

確かに、今聞こえたのは悠希の声だった。

『・・・奏太？』

奏太のケータイは現在悠希の手にあった。
優弥と話している途中に奪われたのだ。

2人は街をぶらぶらと歩きまわっている。

「何すんだよ」

「どうせ彼女でしょ？」

「・・・だから何だよ」

「私とデートするって言ったじゃん。ほら、次はあのお店いこー！」

悠希は強引に奏太の手を引っ張った。

#73 ピアス。

『もおおお！！！！何で来ないのおお！！！！』

1時間半ほどたっただろう。未だに優弥の元に奏太の姿は見えない周りを見渡してみるとカップルだらけだった。

『もう・・・かえろっかなあ・・・』

「そんでそんでー！えつとー・・・次はあの店！！！！」

その頃奏太はずっと悠希に引っ張りまわされていた。

「あの店もいいなあー！」

「・・・いいかげんにしろよ」

奏太は悠希に強引に引っ張られていた手を無理矢理離した。

「・・・ばらしてもいいの？写真」

悠希は手に写真を取った自分のケータイと取り上げた奏太のケータイを持っている。

「・・・勝手にしろよ」

奏太は自分のケータイを奪って走り出した。

周りを見渡してもカップル。奏太の姿も見えない。

『帰ろう・・・』

電車に乗って帰ろうと思い、引き返そうとした。

「・・・」

突然、誰かに腕を引っ張られた。

『?!』

「っ・・・」

息を切らして奏太がやってきた。

『そ・・・奏太！！今まで何やって・・・』

「別に・・・いくぞ」

奏太が前を歩き出した。

『え?!ちよつと待つて!!』

前を歩いていた奏太がいきなりこちらを向いた。

「・・・はい」

奏太が手をグーにしてこちらに向けてきた。

『何・・・?』

奏太は優弥の耳にかかっている髪をそつと耳にかけて耳に何かしていた。

『・・・何?』

優弥は耳を触つてみるとピアスが付いていた

「・・・クリスマスプレゼントッ!」

早口に言つて再び歩いていつてしまった

『あれ・・・?』

奏太の耳を見てみると同じピアスが付いていた。

思わず、笑つてしまった。

『おそろい・・・』

「早く行くぞ」

『ああ!ちよつとまってよ』

♪♪♪

『?』

突然、知らないアドレスからメールが来た。

『・・・何・・・?この写真』

そこには、悠希と奏太がキスをしている写真が付いていた。

#74 竜のヒミツ？

冬休みもお正月も無事終わって約2週間ぶりに学校へやってきた。
お昼、優弥はいつもの3人で屋上でご飯を食べている。

「いただきます♪」

手を合わせてご飯を食べ始めた静香が急に優弥と千秋の方を向いた。

『し・・・静香？』

「クリスマスどうだった？」

千秋が恐る恐るそう聞くとキラキラと輝いた目で見つめられた。

「あのねあのね！！！！カナちゃんと一緒にご飯に行って、カナちゃんがクリスマスのプレゼントをくれて、あ！私はマフラーあげただけだね！それで！」

嬉しそうに話す静香だが千秋が呆れた顔で買ってきたパンをかじっている。

「あー、はいはい。幸せそうで何よりですな。はいはい。」

「ゆうちゃんは？」

優弥は再びキラキラした目で静香に見つめられた。

『え！？・・・別に・・・普通にイルミネーション見て・・・』

・千秋は？』

あまりたくさん喋っていると千秋にいじられそうなのでと突然千秋に振ってみた。

「あー、竜がなかなか来なくてさ、仕方なく迎えにいったんだよ。」

「りゅーうー！何してんだー！」

クリスマス。千秋が迎えに行った竜の家はごく普通のアパートだった。

ふと、突然扉が開き、竜が姿を見せた。

しかし、下はスウェット、上は無地のＴシャツにパーカーという明

らかに今からデートする格好ではなかった。

「あれー？千秋だあー。今日って25日なのー？あー。そかそかー。」

「お前日付感覚狂ってねーか？」

竜が着替えてきたので街をブラブラ歩いていると突然竜が千秋の手を引っ張りながら歩き始めた。

「ちょ、何？！」

やってきたのは明らかに高そうなレストラン。

「おなかすいたからねー」

「え、ちょ、りゅ・・・」

千秋の言葉など全く聞かずに中へと入ってしまった。

なるべく安いものをと頑張って選んで食べて会計に行った。

「えつと・・・竜、やっぱり割り勘した方が・・・」

「え？何で？」

きょんとした顔で千秋を見つめた竜は財布の中から金ピカのカードを取り出し、店員に見せた。

「カード使えまーすか？」

「えええ？！」

「てな感じでね、色々ありましたさ。」

千秋は遠い目をしながらそう語った。

『え、何それ！ちょ、もつとくわし』

「ちいーあーきっ！」

優弥の言葉を遮るようにして後ろから竜の声が聞こえた。

#75 気になるコト。

「ちいーあーきーっ！」

後ろから竜の声がしたので振り返ってみると、屋上の入り口付近に奏太と竜と叶がいた。

「んかんか。千秋はそんなに僕のことを知りたいんだね」

竜が千秋に肩を組んできたんで千秋はめんどくさそうに振り払った。

「てか、お前ら知らなかったっけ？」

パツクのミックスジュースを飲みながら奏太が言った。

「知らない知らない！！」

優弥がぶんぶん手を振ると突然竜が語りだした。

「千秋が来たのは本当の俺んちじゃあなくて、ほんとの家はあ、あれ！」

すると竜はものすごく高いマンションを指差した。

「えええ？！あのマンション？」

「とーちゃんが、しゃちよさんやってんの」

竜は笑顔で再び千秋の肩に手を回した。

「しゃちよさん？！」

それからも竜への質問が長々と続いた。

そんな会話に適当に返事していた優弥には、最近気になっていることがあった。

クリスマスの日のお悠希からのメール。それは奏太とお悠希のキスの写真だった。

でも、この関係が崩れるのは嫌だったので優弥はまだ誰にも言っていないかった。

「・・・何？」

「え？」

突然奏太に話しかけられた。

自然と奏太の方を見てしまっていたようだ。

『べ・・・べつに!』

「じゃあこれ捨てといて。」

奏太は優弥にジューズのパックを押し付けてどこかに行ってしまった。

「何だよ、それ」

放課後、電車の中で竜の耳にぶら下がっている人気キャラクターのピアスを見た千秋が急にそう言った。

「あ、気付いたあ?」

「ね、そういえばピアスといえば、ゆーちゃんと奏太君。おそろいでつけてるよね」

突然静香が優弥の所を向いたのであわてて耳元を手で隠した。奏太は平然としていたが。

静香の話に千秋が食いついてきた。

「おお?! ちょ、見せる!」

『やーめーなーさ・・・』

千秋とふざけあっていると、優弥は視線を感じた。

横を見ていると叶が寂しそうな目でジーっとこちらを見つめていた
『う・・・』

子犬のようなその視線に耐えられなくなり、仕方なくピアスお披露目会が勝手に開催された。

#76 バレた。

外がだんだん薄暗くなってきたある日の放課後。
優弥は教室で一人、職員室に行った奏太を自分の机の上に座って待っていた。

ふと、携帯を取り出して例の写真を見してみる。

『・・・・・・・・』

キスしてる。

明らかにキスしてる。

『あー！もう！どーすればいいの？！！！！！』

優弥は思わず頭を抱えた。

このまま黙っているわけにもいかない。

かといって奏太に聞き出すのも怖い。

『?!』

突然誰かに携帯を持っている方の手首を後ろからつかまれた。

振り向いて見ると、そこにいたのは奏太だった。

『・・・・・・・・』

奏太は携帯に写っている写真を見て明らかに驚いている様子だった。

「アイツ・・・・・・・・」

『・・・・・・・・』

「・・・・・・・・」

『奏太、痛い』

奏太に握られている手首はだんだんと力が入っていつていた。

奏太は静かに手を離れた。

『キス・・・・・・・・したんだ。品浜さんと。』

「は？ちげーよ。んなわけ・・・・」

「やつほー♪奏太君と彼女さんだ♪」

奏太の話を遮って教室に悠希が入ってきた。

悠希は教室に来るなりに奏太に飛びつく。

「ね、ね、奏太君♪」

「お前ちよつとは空気読めよ」

「えー？何何？」

『もういい！勝手に2人でいちゃついてれば？！』

優弥が叫んでも悠希はブイサインを優弥に向けてくる。

「そうさせてもらいまーす♪」

『っ・・・』

優弥は教室を飛び出した。

#77 無視？

翌日。

優弥は少し反省していた。

（少し言い過ぎたかなあ・・・）

そんなことを登校中考えていると玄関でバツタリと奏太に出くわした。

奏太はこちらに気付いていなかったが勇気を振り絞って話しかけてみることにした優弥はそつと近づいてみる。

『そ・・・奏太！！！！』

「？」

奏太は一瞬こちらを向いたが、返事もせずすぐに歩き出した。

『・・・・・・・・・・・・はい？』

「ちょっとは信じてやってもよかったんじゃないの？」

昼休みの屋上。千秋は呆れていた。静香はなにやらおろおろしている。

『そりや・・・最初は信じてたけどさ、あの時はさあー・・・』

「話も聞かずに勝手に被害妄想。そりや奏太も怒るわな」

『被害妄想って・・・。まだあっちがキスしてないとは限らな・・・ムゲ』

話している途中で千秋に今日のおやつを口に押し込まれた。

「ただの被害妄想」

『う・・・』

「だいたい、優弥の誕生日にあんだけ堂々とキスしてた奴等が何やってんだよ」

『う・・・』

『・・・・・・・・・・・・。』

「おい、早くしろよ」

午後の授業。今は10分休憩の時間だった。

教室移動は無いので優弥達は教室にいる。

そして優弥は、竜や叶と話している奏太の背中をじっと見つめていた。

さつさと謝ってこい、と千秋にせかされるも、なかなか言えないでいたのだ。

なかなか行かない優弥に呆れて千秋がため息をついた。

「おい、次の授業古文だからどうせ奏太サボリに行っていないくなるぞ。早くしろよ」

「・・・・・・」

「もしもーし！聞いてますかー？」

「聞いているさ」

そんなこんなしているうちに奏太は教室を出て行ってしまった千秋が再びため息をついて腕を組む。

「・・・よし。わかった」

悩んでいる優弥に千秋が何かを提案したようにそう言った。

「・・・何が？」

「あと3週間後に迫っているバレンタインに告れ。」

「バレンタインか・・・3週間後なんだ」

「そうだ」

「わざわざカウントしてるんだ。そかそか。竜のためか」

「は？！ち・・・違うし！！！」

#78 いつもと違う？

バレンタインはどうするか結局答えが出なかった。

1限目から体育なので現在、優弥は髪を縛りながら千秋、静香と共に更衣室から外へ続く廊下を歩いていた。

「今日は外で久々に短距離でもするか」という体育教師のあほな考えにより、外になったのだ。

この寒いのおかしいんじゃないのか？

でも普段は半そで半ズボンが絶対なのだが生徒達の抗議により今回だけは半袖半ズボンでなくてもいいという許可がおりた。

「普通こんな時期って体育館で体育やるもんじゃないのか？」

千秋は全く納得いかないらしく、さっきからずっとこの調子だった。

『まあまあ。おちつけ』

優弥が何度も落ち着かせるが千秋は不満らしい。

3人は玄関で靴を履き替えて外へ向かった。

最初は男子が走り、その後が女子なので3人は適当に座りながら喋っていた。

最初の5人ほどの男子が先生の合図と共に走り出す。

「んで、バレンタインはどうするんだよ」

男子の様子を見てみると、千秋が突然そう言った。

「今年何作ろうかなー？」

静香はさっそく何を作るか考えているようだ。

『んー・・・バレンタインねえ・・・』

「ほら、噂をすれば。奏太の番」

千秋はスタート地点の方を指差した

5人ほどの中に奏太がいる。

「位置について、よい・・・」

先生の掛け声の次の瞬間、ピストルの音と同時に5人は一斉に走り出した。

1着でゴールしたのは案の定、奏太。

ところが、まわりの女子の反応はいつもと違っていた。

「きゃああ!!!!!!」

「奏太くん!!!」

「おめでとーう」

女子の高い声が、グラウンド中に響いた。

いつものことなのだが、今日はいつもより人が多いのだ。

『な・・・何これ?!』

「おい、さっきのどういうことだよ」

体育の授業後、更衣室で千秋が女子の一人に問い質していた。

その女子はびくびくしながらも懸命に答えていた。

「何か、奏太君が優弥と別れたって噂がひろまって・・・」

話の途中で千秋が優弥の方を向いた。

「・・・別れたのか?」

『記憶にございません』

千秋が再び女子のところをみて質問しまくっていた。

「その噂、誰から聞いた?」

「転校生。品浜さん」

その名を聞いた途端、優弥はあることに気が付いた。

『ねえ・・・品浜さん、居ない』

更衣室には、さっきまで一緒に体育をやっていたはずの悠希がいなかった。

#79 決意。

体育の後、更衣室にいなかった悠希は次の時間の授業では普通に教室にいた

教室の隅で話している千秋と優弥の隣でオロオロしていた静香が喋りだす。

「でも・・・体育の授業中は品浜さん居たよ？」

静香の言葉をきいて千秋は悠希を睨みつけた。

「じゃあ、更衣室の時にだけ居なかったってことか？」

「・・・もっ・・・もっいいいよ！ほら！授業始まるよ！席着こう？！」

そう言つて自分の席へと向かう優弥の背中を千秋と静香はただ見つめることしか出来なかった。

「はい、今日の授業はここまで。」

チャイムと同時に先生が授業の終わりを告げた。

「あと、今日の日直。女子の方でいいや。この後職員室に来なさい」
先生のこの一言で優弥は黒板を見た。

日直という文字の下には？如月優弥？という名前と？藤波奏太？という名前が書かれている。

「?!」

つい立ち上がってしまった。

（そうだ。今日私奏太と日直なんだ）

帰ろうとした先生が優弥を見た。

「日直お前か？ノート運ぶだけだ」

「は?!めんどくさ!」

「サボるなよ？」

そう言い残して先生は教室から出て行った。

『重つ・・・』

先生にノートを渡された優弥は現在渡り廊下を歩いていた。

『てか力仕事って普通男子でしょ?!』

「如月さんっ」

優弥が一人でぶつぶつ言っていると、突然後ろから名前を呼ばれた。

『・・・?』

振り向いてみると悠希が妙な笑みを浮かべてこちらへと向かって走って来ている。

「あのね、一応報告を」

『・・・何?』

悠希は「手伝うよ」といつて優弥の持っているノートを半分持った。

「私、バレンタインデーに奏太君に告白するから」

悠希は勝ち誇ったような顔で優弥を見ていた。

『・・・何?それで奏太がいいよって言うとも思ってたんの?』

優弥が冷たく接しても悠希は笑顔で返した。

「やだあ。そんなわけ無いじゃん・・・でも喧嘩中のくせに、そんな状況でよくそんな事言えるね」

『・・・別に』

そう言つて優弥は一人で走って教室へと向かい、教室に入るなり千秋と静香の前に立った

「おおぅ、・・・優弥?どした?」

『私、バレンタインに謝る』

「・・・ゆーちゃん?」

静香は心配そうな顔で見っていた。

80 自信。

空はだんだんと薄暗くなつて来ていた。
教室に残っているのも優弥ただ一人。

その優弥は日直の為、黒板の前でぴょんぴょん跳びながら懸命に黒板を消していた。

『・・・届かないし!』

刹那、急に優弥の手から黒板消しが無くなった。

・・・いや、誰かに抜き取られた。

『・・・?』

後ろからは、奏太の香水の香りがした。

(奏太・・・?!)

しばらくの沈黙。

久しぶりのこの香りに、胸が高鳴る。

『・・・ありがとうございます』

優弥はそう呟いて優弥の机の上にあった日誌を手にとって走って職員室へ向かった。

「えーっと、とりあえずここでこれをまぜて」
時が経つのは以外に早い。

あつという間にバレンタインが翌日に迫った日の放課後。

優弥と千秋と静香は調理室でチョコを作っていた。

『あとは冷やすだけ』

優弥がそう言った途端、調理室に叶が入ってきた。

「なんかいい香りがする」

「カナちゃん!何でいるの?」

静香が嬉しいような驚いたような表情でいた。

「今日日直だったから。ね、ね、これ僕にもくれるの?」

叶は可愛い表情でチョコを指差す。

「うん！明日のお楽しみ♪」

2人の世界に入ったところで千秋が邪魔するように突然呟く。

「カナはどちらかというところとあげる側じゃないのか？」

「もう！ちーちゃん！カナちゃんは男の子だよ！」

静香はぴょんぴょん跳ねながら千秋に言った。

『一応ね』

優弥が呟くと叶は楽しそうに笑いながら帰っていった

『………はあ』

急にため息をついた優弥を心配するように千秋は顔を覗き込む。

「………どうした？」

『………自信ない』

「は？ここまで来ていきなりどうしたんだよ」

『だって……この前も無視されたし、品浜さんにもあんなこと言われちゃったし』

以前、悠希に「でも喧嘩中のくせに、そんな状況でよく言えるね」と言われたのが今更になって頭の中で繰り返し流れる。

確かに、バレンタインに奏太と仲直りできるという自信はない。

奏太の事情も聞かずに勝手に怒った優弥が悪いのだから。

「……何あったか知らねーけど、お前等なら仲直り出来るだろ」

『うん……ありがと。千秋』

「別に」

8 1 信じたかった。

教室は妙にざわついている。女子達のオーラも、いつもと少し違って見えた。

今日はいよいよバレンタイン。

バレンタインデーがやってきてしまったのだ。

周りを見渡す限りではまだ奏太も竜も叶も来ていなかった

『あ！』

教室の戸が開く。入ってきたのは奏太と竜と叶だった

それぞれすでに5、6個ほどのチョコを持っていた。

下駄箱に入っていたのだろうか？

「きゃああああ」

3人が入ってきた途端、教室はどこぞのアイドルのコンサートかのような歓声があがった。

『?!... あんなの中に入り込めないよ!!』

優弥は千秋と静香に泣きつくとも2人はすっかり呆れた様子だった

「このこと忘れてたな」

「カナちゃん?！」

静香は女子達で見えなくなった背の小さい叶を必死に探していた。

『あーあ。...家で渡すしかないのかなあ』

千秋と静香は一緒に帰ろうと誘って渡すといっていた。

さすがに優弥は今の状況でそんなことをする勇氣はなかった

『...あれ?』

あきらめて帰ろうとした時、視聴覚室に奏太の後ろ姿が見えた。

（奏太?!なんでこんなとこにいるの...?つか!もしかして

今がチャンスなんじゃ...）

そう思った優弥は少しづつ視聴覚室へ近づいていって見た。

『?!...』

そこで目にした光景はただの奏太の後姿ではなく、悠希と抱き合っている奏太の後姿だった。

『奏……太？』

優弥は逃げるようにして、その場から走り去った。

（っ……何で？何であの2人が抱き合ってるの？）

走っているうちにいつの間にか校舎の突き当たりに来てしまっている。

優弥はそのまま立ち止まり、しゃがみ込んだ。

『どおして……？』

自然と涙が零れ落ちる。

奏太のことを信じたかった。

奏太は裏切らないと心のどこかで思っていた。
でも、現実は一……

「……先輩？」

一人で泣き崩れていると後ろから懐かしい声がした。

『けんけん?!』

振り返ってみると心配そうに優弥を見ていたのはけんけんだった。
妙に懐かしい。

「あ、やっぱり優弥先輩だった。……ってどうしたんですか?!」

優弥が泣いているのをみてけんけんがおろおろしはじめた。

『うつん……。別に。なんでもない』

優弥は自分の服の袖で涙を拭いた。

「奏太……先輩ですか？」

『ほんとになんでもないの!じゃあね。けんけん』

下校時刻が迫っていたので優弥は急いで玄関へ向かった。

8 2 図書室。

♪♪♪

ケータイの目覚ましは部屋に響く。

優弥はすでに起きていたのですぐにとめ、ケータイを机の上に置いた。

おきていた、というか全く眠れなかった。

あまり気が向かないが優弥は準備をして学校へと向かう。

教室へ入るといつも通り千秋と静香が挨拶をしてきた

「優弥ー、おはようーさん」

「ゆーちゃんおはよー」

『・・・おはよう』

あまりのテンションの低さに千秋は首を傾げた。

「・・・？バレンタイン、上手くいかなかったのか？」

『別に。・・・。。。うう。。。千秋いい』

いきなり千秋に泣きついた。

「どうした、どうした？！」

優弥は昨日あったことを全部千秋と静香に話した。

静香は心配そうに話を聞いてくれるが千秋はすっかり呆れた様子だった。

「ゆーちゃん・・・」

「んなもん、その2人に突っ込んで行って割り込めばいいじゃん」

『んなこと出来るわけないじゃん』

「私ならそうするぞ」

『・・・ほんとに？』

「ごめんなさい、嘘でした」

放課後、優弥は静香に頼まれた本を図書室に借りにきていた。静香は塾で早く帰って行ってしまったのだ。

『えーっと・・・あ、あつた』

一番上のほうの段に、静香に頼まれた本があつた。
優弥は本に向かって手を伸ばす。

『・・・ぐ・・・』

背伸びをしてみるが届かない。

『上っちゃおうかな?』

本棚に足でもかけようかと思つたところ、後ろから声がした

「優弥先輩、そんなことすると見えちゃいますよ? スカートの中」

『ええ?!』

驚いて振り向いてみるとけんけんだった

「とりましようか? 本」

けんけんが本棚を見上げる

『あ、お願いします』

そういうとけんけんは楽々と本を取つて優弥に手渡した。

『ありがとう』

「どういたしまして。・・・あ、あれつて」

『・・・?』

けんけんが廊下を見て呟くので廊下の方を見ると、図書室へ向かう2人の生徒が見えた。

『あ・・・』

奏太と悠希だった。

83 割り込む・・・？

悠希と一緒に図書室へと向かってきている奏太を見て、優弥は思わず呟いた。

『奏太・・・』

「・・・もう帰りますね」

けんけんは静かに微笑んで図書室から出て行ってしまった。

『あ！ちよ、けんけ・・・』

そんなことをしている間に奏太と悠希は図書室に入ってきた。思わず優弥は本棚の影に隠れる。

「ごめんね、奏太君。こんなところに呼び出して」

「・・・別に」

悠希と奏太の声がはつきりと聞こえる。

「えと・・・昨日の返事、聞きたくて」

（返事・・・？やっぱり品浜さん昨日告白したんだ・・・）

『・・・』

ふと、優弥は千秋の言葉を思い出した。

”んなもん、その2人に突っ込んで行って割り込めばいいじゃん”

『そんなこと、出来るわけない・・・』

そんな言葉が、頭に繰り返し流れてくる。

『でもっ・・・』

気付いた時には優弥はそこら辺にあった本を投げつけていた

『あ・・・』

本は2人の間をすり抜け、壁に当たって落下した

「何?!」

「？」

驚いた2人は、優弥に気付く。

優弥は手を強く握り締めた。

（大丈夫。奏太を信じるんだもん・・・）

心の中で何度もそう言い聞かせ、優弥は静かに口を開き、喋り始める。

『・・・私じゃもう・・・だめなの？』

わかってている。全部、悪いのは自分だ。

奏太を信じないで、あんなたった1枚の写真で奏太との関係もこんな事になってしまつて。

『・・・お前気付いてないのかよ』

奏太からは、よく分らない返事が返ってきた

『へ・・・？』

「優弥、コイツの手押さえとけ」

奏太が悠希を指さした。

久々に奏太に呼ばれたという感動に浸る暇はなく、優弥は指示通りに悠希の後ろにまわつて悠希の両手をつかんだ。

『・・・つかんだよ・・・？』

「ちょ・・・何?!」

悠希が抵抗するので優弥は力を強めた。

『・・・何するの・・・？』

優弥と悠希の声など聞こえないかの様に、奏太が悠希に近づいて制服のボタン一つ一つ、外していった。

「ちょ・・・奏太君?!」

『奏太!!何してんの!!』

そんな2人の言葉は無視して、奏太は次々とボタンを外していく

「・・・」

制服のボタンが全て外されると、奏太は悠希のシャツを思い切り捲り上げた

『ちよつと、奏っ・・・』

優弥が目にした悠希の上半身は、全く凹凸の無い体だった。

それはまるで、男の子・・・。

8 4 悠希のヒミツ？

悠希の上半身は全く凹凸というものがなく、それはまるで、男の子。

『えと・・・ずいぶん胸が小さい・・・』

「ちげーよ」

優弥の言葉は奏太によってすぐに否定された

『え・・・じゃあ・・・もしかして・・・』

悠希は明らかに悔しそうな表情をしている。

「こいつ男。あんなにべったりくっつかれるとさすがに誰でも気付くだろう」

『・・・・・・え』

体育の時、更衣室には悠希の姿が毎回無かったのはそのせいだったのだ。

「はなしてよっ！」

悠希は優弥に捕まえられていた手を無理矢理離した。

「そうだよ。男だよ。前の学校でバレたから転校してきたの！文句ある？！」

悠希は少々やけになっていた。

突然変わった悠希の態度に少し焦りながらも、優弥は悠希を見上げた。

『いや、別に無いけど・・・また、転校する気なの？』

優弥と奏太にばれたのでまた転校していくのだと優弥は思ったが、

悠希はそれを否定した。

「するわけ無いじゃない！奏太君あきらめてないもん！」

『え、でも男・・・』

「心は女の子だもんっ！奏太君に一目ぼれしたんだもんっ！」

『まじですか・・・』

「だからっ！私奏太君あきらめないから！」

そう言っつて悠希は走って去っていく。

奏太と図書室に2人で取り残されてしまった。

『あ……』

奏太は帰ろうとして図書室のドアノブに手をかけている。
何も変わらないまま、奏太が行ってしまう……
そう思った時には走り出していた。

『奏太！！』

「？」

優弥は振り向いた奏太の首に腕を回して、思いっきり背伸びをして
――奏太と唇を重ねた。

勢いが付きすぎて優弥はそのままバランスを崩した。

優弥につられて奏太も図書室の地面に座り込む破目になってしまった。

そんなことは気にせずにそのまま奏太に抱きついた

『ごめんっ……信じてあげられなくて』

優弥の目から涙が零れた。

馬鹿なのは、自分だった。

奏太を信じずに、勇気も出せずにいた自分が馬鹿だった。
そう自覚した優弥には、ただ謝ることしか出来なかった。

『ごめんね……』

「……」

だが、奏太は無言のまま立ち上がった。

（……やっぱり、もうダメなの……？）

涙が出そうになり、視界がぼやける。

だが突然、手が差し伸べられた

『え……？』

上を見上げると奏太は、優しい表情で笑み浮かべていた。

優弥でさえも見たことの無いその表情に、一瞬戸惑ってしまった

「……ほら、帰るぞ」

『……許して、くれるの？』

「写真のこと、お前に黙ってた俺も悪かったし」

優弥は差し伸べられたその手を、強く握り締めた。

85 カラオケ。

『ちよつと奏太！！今ぶつかつたでしょ？！謝りなさいよ！！』

「は？気のせいだろ」

翌日の教室には優弥の声が響いていた。

周りの生徒は楽しそうにそれを見ている。

「久々に始まつたー」

「喧嘩してたんでしょー？仲直りしたんだー」

「奏太くーん」

仲直りはしたのだが、優弥は聞きたいことはたくさんあつた

キスの写真の真実とか、抱き合つていたこととか。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「おい、優弥？」

考え込んでいるうちに黙つてしまっていた。

奏太が優弥の顔を覗きこんでいる。

『な・・・なんでもない』

「おい、そこのお2人さん」

不意に千秋が話しかけてきた。

『何？』

千秋はそこらの机に座つて今日のおやつらしきものを食べていた。

千秋に続いて静香が嬉しそうに喋りだす。

「あのね、せつかく2人が仲直りしたから今日カラオケでも、と思つて」

『ほんと？！いくいく！！』

♪♪♪

「じゃーん」

カラオケへやってきて1時間ほどたった時、千秋が数本の割り箸を

取り出した。

どこに隠し持っていたのだ。

『・・・何？その割り箸』

優弥が千秋に聞くと千秋は何かを企むように微笑んだ

「王様げえむ♪」

『王様ゲームで。ここは合コン会場か』

「王様げえむ？」

静香の頭には完全にクエスチョンマークが浮かんでいた
王様ゲームを知らないとは。

『とりあえず王様になった人は何でも命令すればいいの』

「へーえ。楽しそう♪やろっよ！！」

優弥の適当な説明で理解が出来たのか、満面の笑みで静香が優弥の方を向いた。

『う・・・』

この笑顔には勝てない。

『わかったよ・・・』

いきなりの王様ゲームが始まった。何故だ。

86 王様ゲーム。

「王様だーれだ！」

全員の掛け声で千秋の手から割り箸が抜かれた。優弥のひいた割り箸には？3？と書かれていた。

「やった♪王様ー！」

そう叫んだのは千秋だった。

『えー千秋何か細工したんじゃないのー？！』

「してねーよ。えつと、じゃあ、4番と1番が本日のカラオケ代をおごる！」

いきなり王様ゲームやりだすと思ったたらそれが千秋の目的か。

「俺いちばーん」

竜が割り箸を持って手を挙げた。

「あ、私4番だ」

静香が自分の割り箸を確認して言った。

「ここは普通竜がおごるところだろ」

千秋が提案した。

それに奏太それに続いて呟く。

「まあ、普通はそつだろうな」

竜が笑いながら聞いたことのある音楽に乗せて歌い始めた。

「ぱぱと喧嘩してるからー♪お金なんて全然無いつ」

「役に立たねーな」

奏太が竜の頭を軽く叩く。

「いいよ、私が払うよ」

静香が笑顔で竜に言った。

「静香しゃんつつ！！あなたいい子！！」

竜が静香の頭をなでなでし始めた。

静香におごらせた当の本人、千秋はしらんぷりでどこか横の方を向いていた

叶がみんなの割りばしを集める。

「ささ、2回戦ー」

千秋が話をそらすように言い出した。

「王様だーれだ！」

再び割り箸を引くと優弥は”王様？と書かれた割り箸をひいた

『あ、王様』

何を命令しようか考えた結果、

『5番の人！くすぐりの刑！』

「は？！」

叫んだのは千秋だった。

優弥はにやりと笑ってやった。

『皆、かかれーい！』

その声で皆が一斉に千秋にこちよこちよを شدした。

87 聞きたいコト。

「あー、楽しかったあー!!」

優弥は皆とも別れて家に帰り、ベランダで奏太と話していた。

「千秋こちょこちょ弱いのか」

「うん、特に脇腹」

今日のことをいろいろ思い出してみた。

「結局奏太一回も王様なれなかったし」

笑いながら奏太に言った。

「じゃあ、代わりに今一個命令する。」

奏太は優弥の家のベランダへ進入してきた。

「何それ。意味分んない」

そう言いながら笑っている優弥から目をそらしていた奏太がいきなり優弥を向いて言った。

「お前、何か隠してるだろ」

「・・・?」

何のことがよく分らず少し考え込んだ。

今日の王様ゲームで盛り上がりすぎてすっかり忘れていた。

キスの写真のこととか、抱き合っていたこととか、聞きたいのに聞けないことがあった。

「あ・・・あるわけ無いじゃん!そんなの!てかそれは命令なの?」

優弥が否定すると奏太からのデコピンをくらった。

「いった!何すんの!」

「ばーか。何年一緒にいると思ってんだよ。嘘ついてんのバレバレ」

「・・・だって、自分でもどうすればいいのか分んないんだもん」

「何が」

優弥は泣きそうになるのを必死にこらえた。

「奏太のこと・・・信じるって決めたのに・・・キ、キスの写真のこととか、バレンタインに2人で抱き合っていたこととか、

気になるんだもん!!」

優弥が打ち明けると奏太は一度ため息をついてから言った。

「そんなことかよ」

『そんなことつて！私は本気で悩んで・・・』

そして優弥の言葉を遮るように奏太が喋りだす

「キスの写真は、たまたま頬にぶつかったところを撮られただけ。抱き合ってたのは悠希が転んだのを支えた。ただそれだけ」

『う・・・あ・・・・・・うん』

ほんとになんでもなかった。

こんなことで悩んでたのか、私は。

その時、突然温もりに包まれる。

奏太に抱きしめられていた

『そつ・・・奏太?!』

「ばーか」

『はい?!何それ!!』

「ばかにばかって言っちゃ悪いのかよ」

『別そんな・・・って、それって私がばかってことじゃない!!』

「気付くの遅つ・・・」

#88 お誕生日会。

「ん……」

春休みに突入したある日の昼11時。
ようやく優弥はベッドから出てきた。

「眠……」

目をこすりながら階段を下りていると突然携帯の音がしたので再び部屋に戻った。

「もしもし？」

「あ、優ちゃん？」

この可愛らしい声でわかった。静香だ。

「あのね、今日ちーちゃんが私のお誕生日会をしてくれるんだって
！」

「千秋が？」

「そう！優ちゃんも来ない？」

そつえば今日、4月5日は静香の誕生日だった。

「ん、行く。何時から？……わかった。……うん、じゃあね」
電話を切って再び階段を降りはじめた。おなががすいた。

夕方4時30分。優弥は奏太を迎えにいった。

「そーうた！早く！！」

玄関から奏太が暗い顔で出て来る。

「……？何でそんな暗いの？」

「コンタクト落とした」

「ああ、それで眼鏡かけてんのか？」

バカにしながら笑ってやったら足を思いつきりふまれた。いたかった。

夕方4時55分。約束の時間は5時。
5分前に静香の家に着いた。

家の中から静香が出て来る。

「優ちゃん！奏太君！いらっしやい！ちーちゃんもう来てるよ」

『お邪魔しまーす』

静香の部屋に入ると机の上にケーキが置かれていた

『おお！静香が作ったの？』

静香の方を見ると静香は首を横に振った。

「ううん、ちーちゃんが作ってきてくれたの」

『へー。千秋こんな作れたんだ』

ふと部屋を見渡してみると千秋の姿は無かった。

『千秋は？』

「ちーちゃんなら竜ちゃん迎えにいったよ？」

『へーえ。カナは？』

「そろそろ来る頃だと思うよ？」

『じゃあもう少し待つか。』

優弥の言葉に奏太が反応した。

「”じゃあ？”って。お前カナがもう少し遅かったら先に始める気だったのかよ」

『うん。そうだよ』

別にそんなつもりは無かったのだが、笑顔で答えてやった。

89 ご馳走。

「しーちゃん？いるー？」

数分後、玄関からカナの声が聞こえたので静香は玄関へと向かい、カナを連れて戻ってきた

優弥はふと、思っていたことを言ってみた

『ねえ、ケーキだけ？』

静香が笑顔で質問に答える。

「ああ、竜ちゃんが何か持って来てくれるみたいだけど・・・」

「食い意地張ってんなよ」

奏太が隣でケータイをいじりながら言った

『別に食い意地なんか張ってませんー！』

その時、ふと外の方が少々騒がしくなってきた

「これくらい自分で持つて行くって。早く帰って俺のばしゃんの世話でもしてきたら？」

と、外からは竜の声。

「ええと・・・では帰りは？」

聞いたことの無い女性のような声も聞こえた

「適当に電車で帰るよ」

会話からして竜の家に仕えている誰かと竜が話しているのだろう

「おーい、竜ー早くしろー」

突然千秋の声が混ざり、インターホンがなったので静香が玄関まで迎えにいった

竜はご馳走をかかえてやってきた

「やほやほー」

竜は持っていた荷物を床に置いて千秋から紙袋を受け取った

「ほい、フランス土産。優弥、奏太、静香、カナ、千秋」

竜はチョコレートのような箱をひとつひとつ皆に手渡していった
『フランス・・・』

改めて驚かされた

「お前冬休みの時アメリカ行ったとか行ってなかったっけ？」

奏太の問いに竜は常に笑顔でいるだけだった

皆が集まったので誕生日パーティーを始めることにした

『静香誕生日おめでとーう』

優弥の言葉に皆が次々静香にプレゼントを渡し始めた

「ところで」

千秋が楽しそうな表情で言った後、6本の割り箸を取り出した

『またあ?!』

王様ゲームだ。最近ハマってしまったらしい

静香の誕生日会で王様ゲームが始まってしまった

#90 お土産のチョコレート。

王様ゲームが始まって数分後、王様は千秋となった
千秋は楽しそうな表情で王様の割り箸を持っていた
「どうしようかなあゝ？・・・じゃあ、3番の人」

優弥の手に3と書かれた割り箸があった

「げ、私?!」

その言葉で千秋はにやりと笑った

「ほほーう。優弥か」

「え、何それ」

優弥は竜が持つて来たジュースをコップに入れる。

飲もうとした時に千秋がようやく命令を言った。

「じゃあ優弥は奏太へほっぺちゅーでもしてもらおうかなあ」

「ぶほっ」

思わずジュースを噴出してしまった

「俺まで巻き込む気かっ！」

奏太も少々頬を赤らめて千秋に怒鳴るが王様の命令は絶対だった

「っ・・・／／／」

あまりの恥ずかしさに一瞬で済ませてしまった。

「これでいいでしょ!」

優弥はすっかりふくれて竜のお土産のチョコレートを開け始めた

「ちよつと味見〜」

一口、口にいれてみた

「何これ!!!おいしい!!!!」

優弥のその言葉で奏太も優弥のチョコをひとつ食べた
が、反応がいまいちだった

「・・・おい、竜。これ酒入ってない？」

「うんー。そうだよー。だからあんまり一気に食べない方が・・・」
竜の話が急に止まった。

奏太もさつきからケータイをいじっていた手を止める

皆同時に優弥の方を見た

しかし、すでに遅く、優弥は少し味見とか言っていたくせに次々に食べていた

おそろおそろ奏太と竜が優弥に話かけてみる。

「おい、優弥？」

「あの・・・ゆーやん？それそんなに一気に食べるものじゃ・・・」

優弥はチョコを食べながら奏太の方を向いた

「あ、そーたあ〜」

優弥は奏太に抱きついた

「そーたも食べるう〜？」

優弥は奏太の口にチョコを無理矢理突っ込んだ

「完全に酔ってるし・・・」

「きやはは〜」

全体重を奏太に任せた優弥が落ちそうなので奏太は床に手を着いた。
反対の手で優弥を支えながら奏太がため息をつく。

「アホだろ、コイツ」

9 1 懐かしい人々。

すっかり寝てしまった優弥を竜と奏太で何とかソファまで運んだ。その優弥はソファで小さくなつて眠つてしまっている。

しばらく喋っている時計は夜の10時をまわっていた。

千秋は残っていたケーキを食べながら喋っている。

「もう3年生かー。実感無いなー」

「まあ、うちの学校クラス替えないからねー」

静香が叶と片付けをしながら答えた

何故主役が片付けているのだ

「優ちゃんもその状態だし、そろそろお開きにする?」

静香の提案に皆が賛成し、片付けを始めた

「おい、優弥。帰るぞ」

奏太は優弥の頬をぺちぺち叩いた

『うにゅ・・・』

奏太は優弥の前でしゃがみ、おんぶの体制になった

優弥は奏太の背中にしがみついた

帰り道、奏太は優弥を背負いながら歩いていた

その時、なんとも懐かしい人物に遭遇。

麻衣とけんけんがコンビ二の袋を持ちながら前方から歩いてきていたのだ。

けんけんが楽しそうに麻衣に話しかけていた

「でねー、その時にさー・・・あ!」

向こうもようやくこちらに気付き、奏太の目の前で立ち止まった

「奏太先輩!!!!!!」

いきなりけんけんに叫ばれた

「・・・何?」

「あれだけ優弥先輩泣かせておいて!!!今更なんですか!!!2人で

ラブラブ歩いちゃって!!!」

なんだかいきなり怒鳴られた。

麻衣は必死にけんけんを止めている。

「ちよつと、うるさいって!夜中だよ?!」

「……泣いてた?優弥が?」

奏太は幸せそうに眠る優弥を見た

「ごめんね、奏太君。ほら健吾、こんな夜に叫ぶと近所迷惑でしょう?!」

麻衣が奏太にあやまりつつも大声でけんけんを叱っていた

その後は兄弟喧嘩をしながら去っていった

あの兄弟喧嘩も十分近所迷惑だと思っただが。

そんなことより。

「……泣いてたって……いつ……?」

『むにゃ……』

奏太は再び歩き出し、呟いた

「……ごめん」

自分でも見当はつく。

おそらく悠希のことです。いろいろとごちゃごちゃしていたときだろう。でもこんなにも本格的に優弥に謝ったのは数年ぶりだったので自分でもだんだん恥ずかしくなってきた。

奏太は家へと向かう足を速めた。

9 2 新学期。

ふと気付くと優弥は、学校の中にいた。
何がなんだか分らないが、自分はしゃがみこんで泣いているようだった。

優弥はこの場面を知っている。

『これ・・・バレンタインの時の私・・・？』

何がどうなっているのか分らない

何故自分は学校にいるのだろうか？

何も、思い出せない。

ふと、向こうから誰かがやってきた

『・・・誰？』

それは、奏太だった。

奏太は近づいてきて優弥の前でしゃがみこみ、寂しそうな顔でこちらを見つめていた

「・・・ごめん」

『奏太！！！』

気が付くと、優弥はベッドの上にいた。

『・・・夢？』

時計を見してみる。朝の6時だった

『あれ・・・？私いつの間にベッドに・・・』

優弥は昨日あった出来事を途中から全く覚えていなかった

真実は、奏太がベッドまで運んでねかせ、現在に至る。

ケータイで日付とメールを確認。

『今日からまた学校か』

短かった春休みは昨日で終わり、今日からはまた新学期。

そして優弥達は3年生。

とはいってもクラス替えが無いので実感が無い生徒も少なくはない。

優弥はベッドから降りて学校へ向かう準備を始めた。

学校で始業式が行われた。

去年より先生が1人、2人ほど減っている。なにかとうるさかった体育教師がいない。他の学校へ移るのだろう。

校長先生の長い話を聞き、教室に戻ってもまた新しい女の担任の長い話を聞いて話は突然修学旅行の班についてと変わった。

先生は、ずっとケータイをいじっていた千秋に班決めのくじをつくるよう頼むが千秋と先生との言い争いが始まってしまった。

優弥はそんな千秋にひっそりとメールを送る。

内容は「どうせならくじに細工でもしてやれ」ということ。

千秋はそのメールを見て先生との言い争いをやめ、黙々とくじをつくり始めた

教卓の上にたくさんの紙切れが置かれた

「暇な奴からくじ引きに来い」

千秋のなんとも適当な掛け声のせいで一斉にたくさんの人々がきてしまい、先生の指導により1列に並ばされてしまった

千秋は優弥、奏太、竜、静香、カナが来た時だけ先生にばれないようにくじを手渡した。

「ふん！ばーか、私にくじなんか作らせるからだよ！」

千秋は窓の外を見ている先生に対して舌を突き出した

その後、千秋の細工により優弥、千秋、静香、奏太、竜、カナで同じ班になったということはない。

9 3 班長は誰？

「いいなあー、あの班。」

「奏太君も竜君もカナちゃんもいるじゃん!!」

「うらやましすぎる〜!!」

翌日、昨日決めた班で修学旅行中には何処へ行くかを話しあっていた。

修学旅行先は沖縄。皆が話し合う中、ところどころから女子の声が聞こえてくる。

それは、優弥達6班への言葉。

「ふーんだ!私にくじを作らせるからだよ、ばーか!」

千秋は羨ましそうに見ていた女子生徒にばれないように舌を突き出した

『そんなことより。何処行くの?』

優弥は沖縄のガイドブックを見ている

優弥の問に千秋は適当に答えた

「んなの、どこでもいいじゃん」

『まあ、そうなんだけど』

その時、不意に廊下からなんと元気な叫び声が聞こえた

「ちよつとちよつとちよつと!先輩!!」

教室の廊下側にある窓からいきなり顔を覗かせていたのはけんけんだった

『わあ!!けんけん?!どうしたの!?!』

「3階の多目的室にちよつと荷物運びに行った帰りです。それより!!!」

けんけんはいきなり奏太を睨み始めた

「先輩!だからなんでそんないちやいちゃラブラブしてんすか!!」

『いちやいちゃラブラブ・・・?』

ただ話し合っているだけのこの状況の何処がそう見えるのだろうか

「お前いい加減あきらめろよ」

奏太がけんけんと言つとけんけんはあきらめません！という目で奏太を睨みつけた。

「俺まだ優弥先輩のこと、あきらめたわけじゃないんですからね！
！」

そう言つてけんけんは去つていった

「・・・さあ、班長誰にしようか？」

静香が何も無かつたかのように話を進めた

そつだ。とりあえずこの班の班長を決めなければ。

『ん・・・』

改めて班員を見してみる。

静香と叶はそんな感じのキャラじゃない。

奏太はめんどくさいとか言いそう

千秋も奏太と同じかもしれない。

思考を巡らせる。

『・・・千秋お願い』

優弥は親指をたてて千秋に言い放つた

「は？！なんで私なんだよ！めんどくさい！」

優弥の予想通りの反応だ。

千秋はいきなり先生の方を振り向き、叫んだ

「せんせーい！6班の班長は頭のいい奏太君に決定デース」

『なんと。いきなり奏太に押し付けやがつた』

そんな優弥の声など聞こえないかの様に千秋はガイドブックを見始める。

さつきまでみてなかつたくせに。

「は・・・？何で俺なんだよ。おい、千秋！」

奏太の声は先生には聞こえておらず、先生は「そうかそうか」と頷いて黒板の”6班班長？”という文字の隣に奏太の名前を書き始めた。
「じゃ、頑張りな」

千秋がそう言つた途端、授業の終わりを告げるチャイムが鳴つた。

9 4 楽しそうに？

「ゆーやちゃんっ！お帰り〜」

班長決めから数週間後、優弥が学校から帰るとリビングから顔を出したのは奏太の姉、奏だった

『あれ・・・？どうしたの？』

奏は優弥の兄、祐人と一緒にテレビを見ていたようだ。

優弥の問いに奏太の姉は寂しそうに答えた

「だってえー、折角帰ってきたのに家に誰もいないし奏太だっていなくて寂しかったから・・・」

『奏太ならもう帰ってきてるよ？』

優弥がそう言っていると奏太の姉は「ほんとっ？！」と、嬉しそうに帰っていった

『ご飯は？』

「そこ」

そういつて祐人はテレビを見ながら食卓を指差した

『おおー、ビーフシチュー』

机の上にはラップされたビーフシチューがあった。まだ少しあったかい。

優弥は食卓についてテレビを見ながらご飯を食べ始める。

テレビではちょうど修学旅行先の沖縄の紹介がされていた。

『修学旅行かあー・・・』

今日、学校で奏太の班長の件で未だに千秋と奏太はもめていた。

結局奏太がやることになったのだがその代わり副班長は千秋ということとで解決した。

『副班長って。仕事少ないじゃん』

「なにブツブツ言いながら食べてんの？」

祐人が笑いながら優弥を見ていた

『あのね、修学旅行の班長が何故か奏太に決まってねー、それでね』

優弥は話している途中に祐人が驚いた表情で優弥を見ていたことに気付いた

『・・・何?』

「あ、いや。楽しそうに話すなあーって。」

優弥にはよく意味が分らなかった。首を傾げる。

『どういう意味?』

「今まではさ、奏太の事話す時はいつも怒ってたじゃんか」

『え?・・・そう?』

俯いた優弥を見て祐人は楽しそうに笑った

「優弥の彼氏がまだ奏太でよかったよ。きもい人とか性格最悪な人だったらどうしようかと」

祐人の言葉に優弥は顔を上げた

『あれー?!お兄ちゃん私と奏太が付き合ってる事知ってたっけー?!』

祐人に、奏太と付き合い合っていると話したことはあったか?と優弥はいろいろと過去を振り返ってみた

祐人は立ち上がってリビングのドアの前で優弥の方を見て笑った

「何言ってるの。去年の学祭の時俺見たじゃん」

そう言って祐人はリビングから出て行った。

『あ、そっか。・・・楽しそう、ねえ・・・』

優弥は奏太との事をいろいろ振り返ってみた

『まあ、よくここまでになったもんだ』

と、優弥は一人で頷いていた。

ふと、カレンダーをみて気付けば明後日が修学旅行となっていた。

#95 最後。

『私って最近楽しそう？』

お昼休み。ご飯を食べ終えた優弥、千秋、静香は教室の机にお菓子を広げながら喋っていた。

優弥は昨日祐人に言われたことを2人に聞いてみた。

「は？楽しそうって？」

千秋がお菓子を手に取って聞いてくる。

『いや、昨日お兄ちゃんに昨日言われたんだけど、奏太の事話す時私が楽しそうだって・・・』

優弥が説明すると、千秋からは結構冷たい言葉が返ってくる。

「んなことしてるかよ」

その隣で静香が笑顔でお菓子をたべていた

「私も楽しそうだと思うよー？昔は喧嘩ばかりしてたから」

『やっぱりそうなのかなー？嬉しそうなのかなー?!』

千秋が優弥の姿を見て不思議そうに首を傾げる。

「でも、それがどうしたんだよ」

『いや、なんだか自分で自分がキモイです』

机に顔を伏せた優弥に静香は相変わらすの笑顔。

「そうかなあー？優ちゃん可愛いと思うよー」

『いやいや、だってさ。奏太の事でそんな嬉しそうな自分って結構・・・なんだろ。・・・新鮮？』

ちよつと日本語を間違えたようだ。千秋に冷たい目で見られた。

「別にいいじゃんかよ。今年で高校生活最後なんだし。青春を楽しめ」

千秋の言葉で改めて実感する。

『高校生活最後か・・・』

そう呟くとなんだかしんみりした空気になってしまった。いかんいかん。

「優弥」

噂をすれば。ご飯から帰ってきたらしき奏太が廊下に立っている。

『な、何?』

優弥は奏太の元へ行った。

静香と2人になってしまった千秋が、ぽそりと呟く。

「最後・・・か」

「・・・ちーちゃん?」

9 6 私 の 自 慢 の。

修学旅行の日は、だんだんと迫ってきていた

『あ！ねえ！！このタオル可愛くない？！』

学校の帰り、優弥は千秋、静香と一緒に修学旅行の持ち物で足りないものを買いに来ていた

「いや、それよりこっちの方が」

「先輩？！」

千秋の言葉を遮って遠くから叫び声が聞こえた

見てみるとそこにいたのはけんけんだった

けんけんが近寄ってきたと思うと千秋はいきなりけんけんの前に立った

「おいコラてめえ。今喋ってたのがわかんねえのかよ」

いきなり怒り出したので静香が必死に止めていた

けんけんは必死に謝っている

「えええ？！すみません、・・・あ！そうだ。優弥先輩！」

『・・・何？』

けんけんは急に寂しそうな顔になった

「修学旅行・・・行くんですね？・・・3日間もいないんです・・・よね？」

『そうだけど・・・。どうしたの？！私の夫のように』

するとけんけんはいきなり優弥の肩をがしつとつかんだ

「いいですか？！先輩！決して奏太先輩とラブラブしちゃ駄目ですよ！半径1m以内には近づかないでください！！」

『えええ？！何そ・・・ぐえっ』

急に優弥の首に何者かの腕がきて、けんけん引き離された

『く・・・苦し・・・誰？！』

優弥が必死に振り向くと、そこにいたのは奏太だった。その後ろに

竜と叶もいる。

「けんけん、お前はコイツの保護者か」

優弥の首を絞める腕の力が更に強くなっていた

『く、苦しい苦しい!! 離しっ・・・だから苦しっ・・・離せっ! もしもーし? ちよつと、聞いてる?!』

優弥が抵抗するが、奏太は聞こえないフリをしていた

「やっ、やめてください!! 優弥先輩が苦しそうですよ!!」

けんけんが優弥と奏太を無理矢理引き離れた

『ふいっ・・・死ぬかと思った』

「もう! これだから心配なんですよ! やっぱ半径1m以内には・

・」

けんけんの話の途中で止まった

奏太が急に優弥の方を向いたからだ

「へーえ。じゃあ、けんけんの言う通り、半径1m以内には近づかないようにするか」

『えええええ? ! そんなの嫌!! ・・・あ』

つい優弥の口から本音がでてしまった

奏太はそのまま無表情で店から出て行った

けんけんが、急に俯く。

「やっぱり・・・奏太先輩には敵いません」

優弥はそんなけんけんにデコピンを一発。

「痛っ!」

『当たり前じゃん! 奏太は私の自慢の彼氏だもん!』

けんけんは珍しそうに優弥を見た

「・・・先輩、変わりましたね。内面的に」

『ええええ? ! やっぱそう思う?!』

97 しりとり。

『つ・・・釣り?』

ついにやってきた修学旅行当日。

沖縄へ向かう電車の中が暇すぎるので優弥達6人は何故かしりとりをしていた。

『ほら!奏太、次「り」だよ!』

優弥は眠そうな奏太の肩を揺ると奏太は面倒臭そうに呟いた
「・・・粒子」

「よくそんな言葉思いついたな」。次「し」かぁ・・・」

千秋が考え込み、すぐに思いついたかのように人差し指を立てる。

「静かにしなさい。静香とカナが寝てる」

千秋はすっかり眠ってしまっていた静香と叶を見ている。

『それはしりとり? シャレ?』

「どっちもだ」

優弥の問いに千秋は自信満々に答える。

刹那、ゆつくりと電車が止まった

「沖縄到着」ささ、降りよう」

竜の一言で優弥達は電車を降りた。

1日目は沖縄の戦争について学ぶだけ。

目的地に向かう長い列の後ろの方に優弥達は歩いていた

『あぁ・・・眠い・・・』

優弥は背伸びをしながら呟く。

千秋を見てみると何やら考えこんだ表情をしていた

『・・・千秋?』

優弥が話しかけると、千秋は驚いた表情で優弥を見た

「え?!・・・何?」

『どうしたの?』

「べ・・・別につ」

優弥が聞くと、千秋に目を逸らされた。

千秋のことだからくだらない事だろうと思い、優弥はそれ以上は何も言わないことにした

「ルビー！」

「えと・・・び・・・琵琶湖！」

その後ろで竜と叶がしりとりを続行していた。

98 何で私が？

1日目の夜、優弥はホテルにいた。

部屋は千秋、静香との3人部屋。

優弥はお風呂から出てタオルを探そうとした時、ベッドに寝転がっていた千秋が叫んだ

「あー!!」

『どうしたの?』

優弥が聞くと千秋は静香の持っていたお菓子を食べながら答えた。

「班長会議の内容奏太に聞くの忘れてた」

『何してんの、副班長のくせに』

「めんどくせーもん」

『んで、どうすんの?』

千秋は優弥の口にお菓子を無理矢理突っ込んだ。

「優弥聞きに行つて来い」

タオルを取ろうとしていた優弥の手が止まる。

『はい?! ちよ、タオル・・・』

「ほらほら! 早くしないと先生見回りにくるだろ?!」

千秋は優弥の背中をぐいぐい押した。

『いや、自分で行つてきてよ!』

「めんどくさい!」

とうとう部屋から無理矢理追い出されてしまった。

『めんどくさいって・・・ていうかタオル・・・』

優弥は奏太と竜と叶のいる部屋をノックした

「はいはい!」

中からスウェット姿の竜の声が聞こえてきて、ドアが開く。

「あ、ゆーやん! どしたの? 入ってはいってー!」

『あ、ちよ・・・』

竜に無理矢理部屋に入れさせられた

中に入ると、1番壁際のベッドの上でジャージに身を包んだ叶が荷物整理をしている。

「どつたのーん？」

竜は3つあるうちの真ん中のベッドでくつろぎながら優弥に聞いてきた

「あ、奏太は？」

「奏太は今入浴中よー」

「じゃあ、今日の班長会議の・・・」

刹那、お風呂場のドアの開く音が聞こえた。

#99 朝早くのメール。

お風呂場のドアの開く音が聞こえたので優弥はとっさに振り向いた。そこにいたのは、下はスウェットで上は何も着ずにいつもつけているネックスだけの、上半身裸の奏太が現れた。

『ちょ、何て格好してんの!!!』

「勝手に来るお前が悪いんだろ」

そういつて奏太は一番窓際のベッドの上にあつたＴシャツを着て、タオルを鞆から取り出した。

『あ、そうだ。今日の班長会議のさ、内容千秋に聞いてきてって頼まれたんだけど』

「明日の集合時間の訂正」

『何時?』

優弥はその辺にあつたメモ帳を一枚取つてメモ帳の隣に置いてあつたペンを取り、メモろうとした途端、頭の上にタオルが乗せられた

『ふわぁ!!何?!』

見上げるとどうやら奏太のタオルのようだ

「お前まだ髪濡れてんじゃない」

『ああ、今お風呂から上がったとっ・・・』

突然、奏太にタオルをくしゃくしゃとされた。

髪の毛を拭いてるつもりなのだろうか?

『ちよつと!髪の毛ボサボサになつたじゃない!』

奏太はタオルを自分の肩にかけて優弥の持っていたペンとメモ帳を奪った

「おい、カナ。何時になつたんだっけ?」

優弥が必死にボサボサになつた髪の毛を戻している間、奏太は班長会議の内容をメモしていた

「・・・はい」

奏太がメモした紙は突然優弥の顔に押し付けられた

『痛っ！！』

奏太は自分の、一番窓際のベッドに戻り、服を着てケータイをいじり始めた

用がないならもう帰れってか？

その後、メモに書かれていた明日の朝の集合時間が予定より1時間も遅くなっていた

時刻の下には「先生が、朝食を食う場所の開店時刻を間違えた。」と、奏太の字で書かれていた

『んなあほな』

優弥は廊下で一人で眩きながら部屋へと戻った。

♪♪♪

翌朝、優弥は突然鳴り出したケータイの音楽で目が覚めた。

『んんん・・・』

ケータイで時刻を見てみると集合時刻の2時間前だった。集合時間が変更になった後、めざましの時間を変えるのを忘れてしまっていたのだ。

今の音楽で千秋と静香も目が覚めた様子だった。

千秋は不機嫌な顔をしている。

『ごめん、ごめん。時間変えるの忘れてた』

『おはよう・・・』

静香も眠そうにしている。申し訳ない。

と、突然携帯の音楽が鳴り始めた。メールだ。

『こんな時間に・・・？』

見てみると奏太からだった

内容は「今起きてる？」という一言だけだった
『・・・？』

#100 暑い。そしてジューズ。

修学旅行2日目早朝。優弥は奏太に呼び出されて奏太達の部屋の前にいた

『どうしたの？こんな早朝に』

「お前のことだから目覚ましの時間を直し忘れて起きてるかと思つて」

『う・・・』

見事に正解だった。優弥はすぐに話題を変える。

『そ・・・奏太こそなんでこんな朝早くに起きてんの？！』

「ここのベッド寝心地悪いんだよ」

立っているのが疲れたのか奏太は壁に寄りかかって座り込んだ

『んで、何？』

優弥は座っている奏太に本題を尋ねた。

奏太は少し間を空けてから口を開く。

「・・・今日の班別自由行動の時、こっそり抜け出せるか？」

『何で？』

優弥が聞くと奏太は立っていた優弥の腕をひっぱって、自分の顔の目の前に近付けた

「・・・わかんないの？」

『な・・・何？！ていうか近い！』

「お前はあほか」

『だから何・・・』

奏太は急に不機嫌そうな、少し照れたような表情になっていった
『・・・あ』

2人で抜け出す、ということなのだろうか

優弥が気付いたのと同時に奏太が立ち上がった

『えっと・・・もしかして』

優弥の言葉を遮るようにして奏太が優弥の頭を少し撫でて部屋へと

戻っていつてしまった

『・・・・・・／／／』

班別自由行動は特に先生に何も指示はされていない。

班のメンバーで沖縄を適当に巡れば良いのだ。

「沖縄暑っ・・・・」

沖縄を適当に巡っていると千秋が突然騒ぎ出した

『ねー。しかもすっごい晴れてるじゃん』

優弥は空を眺めた。・・・暑く、眩しい。

ふと、後ろにいる奏太をみると一人でジュースを飲んでいた

『ちよつと！！何一人でジュース飲んでるの！？ずるい！』

「は？ジュースくらい自分で買えよ」

ふと、そこに数人の女の人達が奏太達を見てひそひそを話しているのが聞こえた。

何を言っているのかわからない。沖縄の方言だろうか？

そんな優弥の隣に静香がやって来て、小さな声で話し始めた

「あの男の人達かっこいいねーって言ってるんだよ」

再び女の子達の会話を聞いてみる。

静香によると、どうやら優弥は奏太の彼女に見えてないらしい

『む・・・・』

不機嫌な顔で女の子達を見ていると奏太がジュースを押し付けてきた

「このぐらい自分で買えよ」

『いや、そのことで怒ってたわけじゃ・・・・』

でもそのおかげで女の子達は優弥が彼女だと思ってくれたらしい

『・・・・もっとキモイ人と付き合えばよかった』

「は？」

優弥達はとりあえず静香と叶が行きたがっている水族館を目指した。

#101 海

「あ！ねえねえ、あれみて！」

水族館を適当に歩き回っていると叶が急に人集りの方を指で指した何かと思い、近付いてみるとテレビの撮影をしているようだ。

優弥は人集りの後ろの方で撮影を見ていると急に誰かに服の裾を引っ張られた

「……？」

振り向くと奏太が何処かに向かつて歩き出していた

優弥は朝の会話を思い出す。

「あ……！」

優弥は千秋たちにはれないようにこっそり奏太に付いていった

「ねえ、何処行くの?!」

奏太について来て水族館を出たのはいいが何処へ向かってるのがわからない

「……さあ」

「ちょ、適当に歩いてたわけ?!」

「じゃあ何処行きたいんだよ」

優弥の前を歩いていた奏太が急に振り向いた。

「え……と……」

「……ほらな」

奏太が勝ち誇った表情で言って、再び歩き出す

「ぬぬぬ……う……海！」

「海？」

奏太が再び振り向いた

「だ……だめ？遠い？」

奏太はその辺にあった道案内の地図で場所を確かめていた

「……」

すると奏太は制服のポケットに入れていた手を出して、手を差し伸べてきた

『い……いいの？』

「……行きたくないなら別にいいけど」

『い……行く！』

優弥は差し伸べられた手をしっかりと握った。

『おおー！沖縄の海♪♪』

さっきの場所から海までは結構近かったらしく、15分ほど歩くとすぐに着いた

「海なんか何処も変わんねえだろ」

『何言ってるの。沖縄だよ、沖縄♪♪』

周りには一般客も数人いた。

『あ！そうだ！今年も海皆で来ようよ！！去年みたいに！！』

「は？……めんどくせ」

『何か言った？』

「いや、何も。ほら、行くぞ」

奏太は優弥の手を強引に引っ張って歩き出した

#102 逃げる。

「ねえ、この服とこの服どっちがいいと思う？」

結局海以外に特に行きたい場所は無かったので沖縄のショッピングセンター内をうろろしていた。

現在、優弥と奏太は洋服屋に居る。

優弥の手には2着の服。奏太はめんどくさそうにため息をつく。

「そんなのどっちでもいいだろ」

「は?!よくないよ!」

「そんなもん沖縄じゃなくても・・・」

急に奏太の話が止まった。

「・・・?どうしたの?」

「・・・竜達・・・」

「は?」

刹那、急に奏太は優弥の手を握って走り出した。

「わあ!ど・・・どうしたの?!」

「竜達いた。いいから黙って走れ」

「ええ?!」

「優弥と奏太は何処いったんだよ」

「奏ちゃーん、ゆーやーん」

千秋と竜はショッピングセンター内で奏太と優弥を探していた。

因みに静香と叶はショッピングセンターまで一緒に来たのはいいが、結局2人でデートへ行ってしまった。

クラスメイトから優弥と奏太がこのショッピングセンターに入っていたとの情報が入って来たのでさっきから探しているのだが何処にもいない。

千秋はだんだんと歩く速さが早くなってきている。

「ちあきー?どったのー?!早いよ!」

竜が後ろから追いかけると、千秋は急に立ち止まった。

「・・・その辺歩いてたらそのうち見つかるだろ」

千秋が顔を赤くして言った直後、竜は千秋に強引に手をつながれた
「なーんだ♪デートしたいならそう言えばいいのにー」

「別にそんなんじゃない!」

『はぁー・・・はぁー・・・』

結局優弥と奏太がたどり着いたのはゲームセンターだった。

『奏太・・・走るの速いつて・・・はぁー・・・』

息を切らしながら優弥はゲームセンターの入り口付近で座り込んでいた

「は?・・・お前が遅いだけだろ」

『だから私は普通なの!』

やつとのことで立ち上がり、ゲームセンター内をめぐり始める。

『ねえ!奏太!!沖縄記念にプリクラとろうよ!』

「はぁ?!んなもん誰が・・・」

優弥はその辺に見つけたプリクラ機まで無理矢理奏太を連れて行った。

「・・・めんどくせえ」

『何か言った?』

「別に」

#103 お説教。

「あ、カナちゃん、そういえばねー、昨日ね、」

静香とカナはショッピングセンター内で2人で喋りながら歩き回っていた

「何かあったの？」

「それがね・・・あれ？」

「・・・しーちゃん？どうしたの？急に立ち止まって」

「あれって・・・」

静香の視線の先には、ゲームセンターの出入り口で言い争いをして
いる2人の男女の姿があった。

『もうちょつと楽しそうにしてよ』

撮ったプリクラを見ても奏太は相変わらずの無表情だらけだった

「楽しくねえもん」

『楽しんでよ！』

「は？意味分か・・・」

「ゆーちゃん！奏太君！」

奏太の言葉は突然のどこからの叫び声に遮られた。

声のした方を向くと、静香と叶がいた。

『・・・申し訳ない』

優弥と奏太は現在ゲーセン前で千秋にしかられていた。

いや、正確に言えばこの状況は怒られているのは明らかに優弥だけ
だろう。

奏太は全く聞いていないようだ。じつと人間観察をしている。

「だいたいっ！2人でデート行きたいなら最初からそう言えて・・・

・おいコラ奏太！聞いてんのか！」

千秋が怒っても奏太は完全無視なので優弥は変わりに答えた。

『そんなこと言われても・・・千秋もちやつかり竜とデートしてたじゃんかぁー』

「お前等がいなくなるからだー!!」

『ぶー・・・』

2日目の宿は結構・・・いや、かなり安そうなホテル、いや旅館いや、宿泊施設かもしれない。

各部屋にお風呂、トイレは付いていない。一つの階に1つずつ。

『1日目のホテルで金使っちゃったんかいねえ』

千秋、静香と共に自分達の部屋を見た優弥は改めて呆れる。

「あーあ。誰かさんのせいで疲れたつかれた」

千秋がわかりやすく優弥を睨んだ

『だからごめんって』

#104 何も無い！

「んで。結局デート中には何があったんだよ」

大浴場。結構古そうだった。その中で優弥達3人は肩までしっかりお湯に浸かっていると、千秋が突然口を開いた。

『は？？！！！別に何も無いよ！！』

「いや、その顔は何かある」

「ゆーちゃん顔赤いよ？」

千秋と静香に攻められる。

顔がだんだん熱くなってきたのが自分でもわかった。

『な・・・何にも無いってば！！』

その頃、奏太達3人は同じく大浴場の湯船に浸かっていた。

奏太も優弥と同じような状況だった。

「ねえ？そーた、何かあった？ねえあった？」

竜が奏太の隣でこのセリフを繰り返している。

その更に隣では誰も聞いていないとも気付かず今日のデートの感想を話し続けている叶がいた。

「だから別に何もねえよ」

奏太がこう言っても竜はすぐに言い返してくる。それなら聞くな。

「ええー？！あったでしょ？ぎゅーとかちゅーとか・・・」

「ぎゅーもちゅーもねえよ」

「えー、つまんない！」

「つまんないならカナの話でも聞いてろ」

「奏ちゃんひどーい」

「しるか」

夕食後、優弥は皆より早く食べ終わってしまったので一足先に歯磨きをするために洗面所へ向かっていた。

洗面所も各部屋には無い為、各階に一つずつだけある洗面所へ歯磨きセットを持ちながら歩いている。

『あれ？』

洗面所では、前髪を噴水のようにした奏太が歯ブラシを口に銜えて立っていた。

『奏太もう終わったんだ？夕食』

「・・・別に」

『ていうかさ、みんなから何か無かったかー？って聞かれるんだよねー。何もないっての』

「・・・それならこっちも・・・」

奏太が歯磨きを終えて喋りだした。ところが急に後ろから叫び声が聞こえてくる。

「きゃーあ！！奏太君、何その前髪ー！」

「可愛いー！！」

「ねえ、竜君と叶ちゃんは一？」

数人の女子がやってきて、奏太の姿が見えなくなってしまった

『ちよっ、・・・ま、いつか』

奏太との会話はあきらめて、優弥は歯磨きを終えて部屋へ戻った。

#105 帰りの貸切電車。

修学旅行3日目は体験学習。

大して楽しいこともなく、あつという間に修学旅行の3日間が終わろうとしていた。

帰りの電車は皆疲れて眠っている。

貸切の電車の中、一番後ろに座っている優弥達からは起きている人が確認できないが騒いでいる人は誰一人としていなかった。

『皆寝ちゃったね』

優弥は小声で通路を挟んで左隣にいる千秋に話しかけた。

「・・・・・・・・」

返事がない。千秋は竜と仲良く眠っていた。因みに静香と叶はとつくの昔に眠ってしまったている。

優弥は右隣に座っている奏太をみた。

顔を伏せている。優弥は奏太を揺さぶった。

『ちよつと、どうせ起きてるんでしょ。皆寝ちゃったよ。暇なんだけど』

案の定、おきていた奏太が不機嫌そうに体を起こした。

「は？知るかよ。・・・お前も寝りゃいいじゃん」

『ねえ、やっぱりしりとりしようよ！』

「嫌」

その言葉に、優弥は頬を膨らませて、小声で奏太に言い放った。

『何よ何よ何よ。結局修学旅行中そんなにラブラブできなかったじゃん！あつたとしても手繋いだくらいじゃん！つまんない！』

「あー、はいはい（棒読み）」

その言葉を最後に、優弥は何も言わなくなった。言い争いに飽きてきたのだろつ。

沈黙の中、奏太はしばらく窓を見つめ続けた。

『・・・・・・・・』

ふと、奏太の肩に重みを感じた。

「・・・・・・・・？」

見てみると、優弥がすやすや眠ってしまっている。ちゃっかり奏太の肩を枕代わりにして。

「・・・・・・・・結局寝てるじゃん」

『ん・・・・・・・・そうた・・・・・・・・』

優弥が起きたのかと思ったが、ただの寝言だった。何の夢を見てるんだ？

「・・・・・・・・」

奏太は一度、ため息をついて周りを見渡した。皆寝ている。

そして、再び優弥を見つめる。

こんなことしてもいいのか、と思いつつも奏太は優弥に少しずつ顔を近づけた。

「・・・・・・・・何がラブラブだよ、ばーか」

そっと、唇を重ねた。

その後、『結局ラブラブしてない！』と優弥がしばらく頬を膨らませていた。

本当のことは、奏太にはとてもいえなかった。

#106 転んだ少女。

修学旅行もひと段落。

6限目の授業が体育から急に保健に変わったとので奏太と竜と叶はサボるために、屋上へ向かっていた。

「僕何か飲み物買って来ようか？」

廊下を歩いていると、叶が財布を取り出してそう言った。

「んー、じゃあオレンジ！」

竜が手を挙げて叶に何度も「オレンジだよ？」と言っている

「・・・コーヒーでいい」

奏太が呆れて少し早足で廊下を進んだ。

後ろから竜が付いてこない。叶について行ったのだろう。

突き当たりを曲がろうとしたその時、

「ひゃあー!!」

突然聞こえたその弱弱しい声で奏太はふと気付く。誰かとぶつかった。

「・・・？」

見下ろすと廊下に座り込んでいる女の子が居た。今ぶつかって転んだのだろう。

「いたたたたた」

その子が顔を上げた瞬間、目が合った。

その子は目が合ったまま、動かなかった。

口がぱかーんと開いている。こういうときは口に何か入れたくなってしまう。

「・・・何見てんの？」

あまりにも動かなかったので、奏太はその子に話かけた。

「え?!」

我に返ったようだ。あわてて目を逸らされた。

「奏太あー♪ジュース買って来たよー」

その時間こえた間抜けな声。竜と叶が戻ってきた。

「ああー！！奏ちゃん何したの？！この子すりむいてるじゃん！！」
ジューズを両手に持っていた竜はいきなり叫びだす。

奏太はその子の膝を見てみると少しだけすりむいていた。

「ちゃんと保健室連れていきなよ！屋上でまってるから！」

そう言つて竜は叶と一緒に屋上の方へ歩き出した。

「・・・来て」

そう言つて奏太は歩き出す。

「痛つ・・・」

後ろから聞こえた声で奏太は振り向く。女の子が膝をさすっていた。

「そんなに痛い？」

「膝打つたみたいで・・・」

奏太は仕方なく、女の子の方へ戻っておんぶの体制でしゃがみ込む。

「・・・？え？」

「・・・足。痛いんですよ」

不思議そうな表情をしていた女の子も、奏太の言葉で背中にしがみついた。

「・・・こんな現場誰かさんに見られたら怒るだろーね」

奏太には早く保健室に連れて行つて屋上へ行こう、という思いだけだったのだが、女の子は頬を赤くして、奏太を見つめていた。

#107 黒髪セミロング少女と絆創膏。

先生のいない保健室は、あまりにも静かすぎた。

黒髪セミロングのその少女はさつきから俯いたまま。

「・・・」

奏太は気にせずに手当てを始める。

おそらくこの子は一年生だろう。制服がまだ新しい。

「・・・はい、出来たよ」

「あつ・・・ありがとうございます！」

その少女はその場から動く様子が無かったので奏太は少女を放置して、保健室を出た。

その日の放課後。優弥は一人、雨の中を傘も差さずに歩いていた。

天気予報では晴れと言っていたくせに急に雨が降ってきたのだ

『最悪・・・。てか奏太一緒に帰ろうって言ったのに何処いったの？！』

一緒に帰ろうと約束した奏太がいつの間にか帰っていたのだ。

「ねえ！！傘、一緒に入らない？」

急に後ろから叫び声が聞こえた。

振り向いてみると後ろで傘を差してこちらをずっと見ている少女がいた。

膝に絆創膏を貼った、黒髪セミロングの少女。

見るからに1年生だ。まさか優弥を同級生だと思っているのか？

そう考えると優弥は思わず笑ってしまった。

『君、1年生でしょ？』

「え？」

自分が3年生だというとその子は驚いていた。

やっぱり優弥を同級生だと思っていたらしい。

少女は、三波小雪だと名乗った。

「あの・・・」

駅へ向かいながら他愛無い話した後、小雪は恥ずかしそうに優弥に聞いた。

「かつ・・・彼氏って、いますか？」

『何それ。告白？』

思わず笑ってしまう。本当に可愛らしい子だ。

『・・・いるよ』

「ほっ・・・本当ですか?!」

小雪はいきなり顔を上げた。

『でも！彼氏いるっていつても向こうは何で私選んだのか知らないし、ほんとに好きかもよくわかんないしっ!』

優弥がそういうと小雪は何か考えるように俯いた。

『何？好きな人でもいるの？』

「ええ?!そ・・・んなっ／＼／」

おそらく図星だろう。小雪の顔が真っ赤だった。

そんなこんなしているうちに、駅に着いてしまったので優弥は小雪と分かれた。

(・・・思えば、奏太が私の何処が好きかなんて・・・聞いたことないなあ・・・)

不意に、そんな疑問が頭に浮かんだ。

優弥は定期を駅員さんに見せてホームへ行くと、そこには見慣れた人物がいた。

奏太だ。髪の毛がぬれている。

『あれー？奏太先に来てたのー?!探したのに何処にもいないんだもん!』

「・・・雨降らないうちに帰ってたんだよ」

『結局ぬれてるじゃん』

優弥は鞆からタオルを取り出して奏太の髪の毛を拭いた

『・・・』

ふと、その手を止める。

「・・・？なんだよ」

『奏太は私の何処が好きなの？』

「は？・・・何処でもいいだろ」

そういつて奏太は視線を逸らしてしまった。

#108 職員室。

翌日の放課後、日直だったので当番報告をしようと優弥は職員室前に居た。

もちろん、もう一人の日直、奏太にはサボられた。

「如月先輩！」

職員室から小雪が出てきた。元気そうに手を振ってこちらに向かっている。

『あ！小雪ちゃん！』

「如月先輩、どうしたんですか？こんな場所で」

小雪にそう聞かれると優弥は学級日誌を見せた。

『日直。本当はもう一人いるんだけど、逃げられちゃって。・・・』

まあ、それが昨日言っていた彼氏なんだけど』

「かつ・・・彼氏さんなのにサボっちゃったんですか？！酷いですね！」

『だから言っただじゃん、何で私のこと好きなのかもわからないって。』

「あ・・・」

小雪が申し訳なさそうに俯いた。

『まあ、優しい時は優しいんだけどね』

優弥がそう言くと小雪は笑顔になった。

「あ！それ、私の好きな方に似てます！いじわるそうに見えて、優しい方でした！」

小雪が叫ぶと職員室から先生の声が聞こえた。

「おい、如月ー！いるなら早く日誌もってこーい！」

優弥は職員室に向かってめんどくさそうに叫ぶ。

『はいはい！ちょっと待ってよ！今行くつてばー！』

「あ！ごめんなさい！ひきとめちゃって・・・」

本当に良い子だと、優弥は思ってみたりした。

『うつんっ！じゃあ、またねっ！』
「はいっ！」

一方その頃奏太は一人で玄関の傘たてに座りこんでいた。
「あっ……」

急に聞こえたその声に、奏太は周りを見回す。
昨日会った少女が、玄関に居た。

「……昨日の」

「あっ……三波小雪です！」

「……冬生まれ？」

「あ、はい」

「やっぱり」

「ああ！電車が間に合いません！そろそろ失礼します……！」

小雪は時計を見てあわててその場を飛び出した。

『あれー？奏太何してんの？』

小雪が去るのと同時に優弥がやってきた。

奏太に近づくと、奏太は優弥の頬をつねる。

「お前を待ってたんだよ」

『いたたたた……待ってるくらいなら直やりなさいよ！』
「嫌」

#109 廊下と指輪。

「あゝ」

その翌日。小雪は体育の為に体育館へ向かう途中、廊下で優弥とすれ違った。

優弥は小雪に気付いて手を振ってきたので思わず小雪も振り返した。

「小雪、如月先輩と知り合い？」

隣にいた中学からの同級生が珍しそうに小雪の顔を覗きこんだ。

「まあね・・・あ」

優弥の方を振り向くと、廊下に何かが落ちていた。

「・・・？」

近づいてみると、指輪が落ちている。

「如月先輩の・・・？かな？」

そう思い、廊下を見渡してもすでに優弥の姿は無かった。

「・・・後で渡そう」

小雪は指輪をそっとポケットにしまった。

お昼休み、優弥は指輪を落とした事にも気付かずに奏太が優弥の何処が好きなかを問い詰めていた

『ちよつと奏太？やっぱり教えてよ。私の何処が好きなの？』

「・・・は？」

壁に寄りかかっていた奏太はパックのジュースを飲みながら呆れた顔で優弥を見た。

『やっぱ気になるじゃん』

「教えない」

『なんでよ！・・・それくらい教えてくれたっていいじゃん！けち！！』

周りの生徒が「また始まった」と、楽しそうに騒ぎ始めた。

「そんな事どうだっていいーだろ」

優弥は奏太の飲んでいたいちごみるくを取り上げた。

『だいたい！昨日の日直も私が全部やってさ！愛情が感じられなさすぎる！』

「はいはい、そーですか（棒読み）」

『もう知らないっ！』

そのまま優弥は走り去り、廊下へ出た。

放課後、優弥は千秋と静香と一緒に校門を出たところでふと立ち止まった。

『あれ？』

チエーンにつけて首からさげていた指輪がなかった。

誕生日に、奏太から貰った指輪。

立ち止まった優弥を千秋と静香が心配そうに見つめていた。

『ごめんっ！先帰ってて！』

優弥は学校の玄関へと戻り、急いで靴を履き替える。

『もーう！！何処？！教室かな・・・？』

小走りで教室に向かう。思いっきりドアを開けると中にいたのは3人の男子生徒。

——奏太と竜と叶。

「あれ？ゆーやんどしたの？」

竜が不思議そうな顔で優弥を見た。

「・・・お前等先帰ってろ」

寂しげな表情の優弥を見て奏太は竜と叶に先に帰るよう、指示した。

竜と叶は不思議そうに教室を出て行った。奏太と2人きり。

『奏太あ・・・』

「・・・何」

奏太はいきなり泣きそうになっている優弥に呆れながら近付いた。

『指輪がない・・・』

優弥は泣きそうになるのを必死にこらえながら奏太に助けを求めた。

「ああ・・・俺があげた”奏太からの初めてのプレゼント”とかいうやつ？」

そういえばそんなことも昔言ったような気がする。優弥はだんだん恥ずかしくなってきた

『べっ・・・別にいいもん！あんな指輪っ・・・無くたって・・・』

」

泣きそうになり、俯くと奏太にデコピンをされてしまった

『痛っ！なにすんの！』

「ばーか。泣きそうになってるくせに意地張ってんな」

優弥は思わず泣きながら奏太に抱きついた。

『だって・・・あの指輪があったから、奏太が本当に私の事好きだ
って思えたんだもん』

「は？」

『好きってちゃんと言ってくれたのも1回くらいしかないしさ！』
奏太から再びデコピンをくらった。

「・・・あんなもの無くても、ちゃんと好きだったの。何回言わ
せんだよ」

『そんなこと言えるほど言ってもらってないよ！ねえ！じゃあ私の
何処がすきな？！』

「んなこと言えるかよ」

優弥が奏太を見ると、奏太は顔を少し赤くして横を向いていた。

『ほらー！！そんなのだから信じられないんじゃないんじゃん！！』

「・・・じゃあこうしたら信じるの？」

『・・・え？』

奏太の手が優弥の頬に添えられ、そつと、2人の唇は重なる。

『・・・ごめん。・・・しんじた。』

優弥は思わず謝る。

「目えくらい閉じろよ」

『だって突然だったんだもん』

「鈍過ぎるだろ・・・」

『じゃあ、目閉じるからもう一回！』

「あほか、もうしねえよ」

奏太は自分の席まで行って鞆を手に取った。

「ほら、さっさと帰るぞ」

奏太に鞆を思いっきり頭にぶつけられた。・・・痛かった。

#111 知ってしまった。

「そんなっ・・・」

優弥たちが帰った後、小雪は廊下で一人、指輪を握り締めながら震えていた。

「如月先輩の彼氏って・・・藤波先輩だったの?!」

指輪を返そうと優弥のクラスの近くまで来てみると、優弥と奏太がいたので思わず話を全部聞いてしまったのだ。

思わず目からは涙がこぼれ落ちた。小雪の好きな人、それが奏太で優弥の言っていた彼氏も奏太。

小雪は指輪を更に強く握り締める。

「・・・こんな指輪っ・・・」

ゴミ箱に捨ててやろうと思った。窓から投げ捨ててやろうとも思った。

だが、そんなことは出来なかった。

今まで優弥は、あんなにも優しくしてくれたのだから。

「・・・どうすればいいのっ?」

「如月先輩・・・」

朝、優弥は久しぶりに奏太と一緒に学校へ行くと玄関で寂しそうな表情の小雪に話かけられた。

『あれ?小雪ちゃん。どうしたの?』

小雪から差し出されたのは、無くした指輪だった。

『うそー?!小雪ちゃんが拾ってくれたの?!ありがとう!!!』

「・・・はい」

小雪が寂しそうにして、ずっと俯いていた。

『・・・どうしたの?』

優弥がそう聞くと、靴を履き替えた奏太がやってきた。

「あれ・・・あんた」

奏太がそう言うと、小雪はビクツと体を震わせて顔を上げた。少し寂しそうな、おびえているような目をしている。

「あ・・・そ、それ渡したかっただけです!!」

そう言い残して小雪は走り去った。

『何？奏太小雪ちゃんのこと知ってたの？』

「1週間前くらいにアイツが転んだから保健室連れてった」

『・・・もしかして小雪ちゃんって、奏太のこと好きなの？』

奏太は教室へと歩き始めた。

「知らねえよ。そんな事」

『そっだよ!!だからあんなに落ち込んでるんじゃない!!昨日の放課後にでも知ったんじゃないの?』

「へーえ。そうなの」

『何他人事のように言ってるの!!』

「放つとけよ。そんなこと」

『放つとけないでしょ?!』

#112 貧血？

『さて・・・小雪ちゃんをどうするか・・・』

1限目もおわり、10分休憩。優弥は教科書もしまわずに悩んでいた。

千秋が不思議そうにお菓子を銜えて近寄ってくる。

「小雪・・・？誰だそれ。何かあったのか？」

『あのさ・・・』

「だから放つとけよ」

優弥の言葉を遮るように奏太がやって来てそう言った

『放つとけないからいつてんじゃん！』

そう言つて優弥が自分の席から立ち上がった瞬間、優弥は急に立っていらなくなり、そのまま奏太の元へ倒れ込んだ。

奏太が優弥を支えて、驚いた表情で優弥を見ている。千秋も心配そうに優弥の顔を覗き込んで呟く。

「優弥？貧血か？」

『ん・・・そうみたい』

「保健室行くか？」

『そうす・・・る？！』

優弥が千秋に返事をしている途中、優弥は奏太に姫抱っこされた。奏太はそのまま保健室へと向かった。

『ちよ、降ろしてよ！パンツ見えちゃうの！！自分で歩くから！！』

「暴れたら落ちるぞ」

『いや、むしろ落としてください！！』

「・・・へーえ」

『いや、やっぱりやめて！』

奏太ならこのまま手を離してしまうかもしれない。

そんなことをされては貧血どころか怪我までしてしまう。

そんなこんなしているうちに結局保健室まで来てしまった。

奏太は足でドアを開くと、そこにいたのは小雪だった。
絆創膏を手にとってうろうろしている。

「せつ……んぱい……」

『あ……小雪ちゃん、先生は?』

優弥が聞いても、小雪は目を逸らして答えた。

「い、いないみたいです」

「あんたは此処で何してんの」

奏太が優弥をベッドに降ろしながら聞いた。

「ま……また転んじやつて」

小雪は気まずそうに保健室を出て行こうとしたが、開いていたドアは奏太によって思いっきり閉められた。

「ふえ?!」

「……逃げんな。話がある」

#113 両思いの人？

優弥はベッドに寝ながら奏太と小雪ちゃんのやり取りを見ていた。ドアを閉められた小雪は静かにその辺にあった椅子に座った。

「な．．．なんですか？」

小雪は気まずそうに奏太を見上げた。

「．．．何がしたい」

「．．．？」

「お前は俺のことが好き、それでお前は どうしたい」

「?!?! 何でそれを!!」

小雪の顔は一気に真っ赤になった。やっぱり奏太が好きだったのか。小雪は俯いてしばらく黙り込んだあと、答えた。

「出来れば．．．両思いになって、一緒にデートしたり．．．したいですけど．．．もういいです」

「は？」

「藤波先輩には如月先輩がいますし」

もうすでに諦めたかのような口調で、ずっとうつむいている。

『何で．．．？』

優弥は必死にベッドから起き上がって小さくそう呟いた。

『そんな簡単に諦めちゃうの？』

「如月先輩には私の気持ちなんかわかりませんよ!!」

小雪に怒鳴られた。その場に静寂が訪れた。その静寂を破るかのようにな小雪は話を続けた。

「両思いの人に、私の気持ちなんかっ．．．」

小雪は今にも泣きそうな表情をしていた。

「私が如月先輩に敵うわけじゃないですよ」

『わっ．．．私だって片思いの時期はあったさ!!』

優弥は小雪に怒鳴り返した。小雪は驚いた表情でじっと優弥を見つめた。

『しかも奏太は意地悪な事しかいわないしさ！でも、諦めたくなかつたんだもん！！』

「・・・・・・」

『あ！！でもそう簡単に奏太はあげないよ？！って、わあ？！』

優弥がそう言くと奏太に無理矢理ベッドに寝かされた。

『ちよ、何すんの！！』

奏太は自分のケータイを優弥に投げてきた。

「お前は兄貴にでも連絡してさっさと病院行つて来い」

優弥のケータイは教室にある為、優弥は仕方なく兄に電話をかけ始めた。

#114 ともだち。

優弥が電話を終えると、小雪はいきなり立ち上がった。

「じゃあ、私諦めません！先輩、覚悟しておいてくださいね！」
そういつて小雪は静かに微笑んだ。

『小雪ちゃ・・・』

優弥が再びベッドから起き上がり、感動に浸る暇もなく、いきなり保健室のドアが開いた。

やってきたのは千秋、竜、静香、叶だった。

「ゆうやーん？やつほー♪元気ー？」

竜がいきなりそう言つて奏太に抱きつく。

「元気じゃないから保健室に来てんだろ」

千秋が冷静にツツコむ。静香と叶は心配そうに優弥の元へやってきた。

「ゆーちゃん大丈夫？」

「体育がいきなり保健になっちゃったからサボって来ちゃった♪」

叶が可愛らしく笑顔で言つた。

ふと、優弥は小雪がずっとこちらを見ていることに気付いた。

『小雪ちゃん・・・？』

「ふえ？！ななな・・・何でもないです！！別にお友達が多くて羨ましいだなんて思つてないです！！」

『と・・・友達欲しかったの？』

「えええ？！なんでそれを知ってるんですか？！エ、エスパー？！」

「今自分で言つたんじゃーん！おばかさん♪」

竜がいきなり話に割り込んで小雪の頬をつついた。

「部活でも入ればいいじゃん」

千秋が当然だとも言うような表情でそう言つた。

「で、でも私運動オンチだし・・・」

小雪はがっかりするかのように俯いてようやく転んだ膝に絆創膏を

貼り始めた。

「マネージャーとかでもいいんじゃない？」

叶が首を傾げて子犬のような目で小雪に目をやった。

「陸上部の人たちがフレンドリーだってよく聞くよ？」

その隣に静香がやってきた笑顔で言った。

「陸上部・・・はいっ！ありがとうございます！」

そう言つて小雪は笑顔で去っていった。

『しかし。奏太のファンには面倒なのが多いよ。品浜さんといい小雪ちゃんといい・・・』

優弥がそう呟くと奏太は優弥に渡していた自分のケータイを奪った。

「お前も十分面倒だろ」

『はい?!私の何処が!!』

#115 進路。

結局あれから小雪ちゃんに奏太を奪われることは無かった。

勇気がないだけか、小雪ちゃんなりの優しさなのか、よくわからないがいつの間にか時は過ぎていった。

気付けば7月……。。

『暑い!!』

お昼休み。優弥、千秋、静香の3人はご飯も食べ終えて教室に戻ってきたところだった。

「もうすぐ夏休みだなー」

千秋自分の席に座りながら急に呟いた。

「今年も皆で海行こうねっ！」

静香が可愛らしく笑顔で言った。

優弥はふと、教室で女子たちがきやあきやあ言いながら集まっている方に目をやった。

あの女子達の中にいるのは顔は全く見えないが奏太たち3人だ。

さつきから3人で机をあわせてババヌキをしていたのでそこに女子が集まったのだろう。

『なんでババヌキなんか。小学校の頃よくやったよー。』

優弥は少し呆れながら女子達の大群に向かう。優弥たち3人が来ると女子達は道をあけてくれた。

叶が奏太の手にある二枚のランプをどちらを取るかで悩んでいるところだった。

竜はすでに勝つたらしく、のん気にお菓子を広げて耳にイヤホンを差込みながらどちらが勝つかを見守っている。

呆れながら優弥が見ていると、奏太の机の上にあった資料が目に入った。

大学の資料。因みに優弥は短大へ行く予定だ。勉強は面倒なので現在の実力で十分入れる所を選んだ。

『奏太、大学行くの？』

「別に。先生に進められただけ」

奏太が答えた瞬間、叶が奏太の手にあったトランプを1枚引いた。

「やったあー！あがりいー」

どうやら勝ったのは叶らしい。両手を挙げて喜びだした。

竜がイヤホンを耳から外して奏太を指で指す。

「奏ちゃんの負けー！奏太のおごりで飲み物買って来てー」俺こー
ヒー」カナは？」

「えっと、お茶！」

カナがそう言うのと奏太は面倒くさそうに立ち上がった。

『私オレンジがいいー！』

優弥が咄嗟に手を挙げた。

「お前は自分で買え」

奏太が教室から出ようとすると先生に呼ばれていたとやらで千秋も
その後ろに付いていった。

優弥は再び大学の資料を見つめた。

『ふうーん・・・大学行っちゃうんだ』

#116 離れる？

奏太は頼まれた飲み物を買いに食堂の自動販売機へ向かっていた。隣には千秋がいる。

「千秋は何でそんなに先生に呼ばれんだよ」

奏太は呆れながら千秋の方を見た。

「知らねえよ。先生の話をしつかり聞けとか、意味わかんねえこと言われんだもん」

千秋が愚痴を言い始めた。奏太が返事をする暇もなく、千秋はそのまま話を続けた。

「そんなこと言ったらお前らも一緒だろうが！静香だけは別だけど。ったく、なんで私だけ！」

「俺等はお前と違って勉強できるから、じゃないの」

奏太は千秋の話を無理矢理遮った。

「じゃあ竜は何なんだよ」

「あれは社長さんの息子だからだろ。一応」

「なんだよそれ。・・・というか奏太」

千秋がいきなり話題を変えた。廊下の突き当たりまでやってきて立ち止まった。

職員室まで行く千秋はここで奏太と別れるのだ。

「お前、さっきの資料の大学。ここら辺から通うには少し遠いんじゃないか？」

「別に。電車で1、2時間くらいだし」

「今の家出ていく気なら、優弥のことも少しは考えてやれよ」

そいつって千秋は廊下を曲がって歩きだし、奏太は返事も返さずに階段を降りて千秋と別れた。

人数分の飲み物を買って、奏太は教室へ戻った。

優弥、静香、竜、叶の4人でババ又キをやっているようだ。

「あ！奏ちゃんおかえり♪」

竜が奏太に気付き、ぶんぶんと手を振ってきた。

奏太は竜にコーヒーを投げて渡した。それを受け取った竜は早速飲み始める。

奏太は叶と静香にお茶を渡し、優弥の前にあった机にオレンジジュースを置いた。

「え？私の分も？ありがとう♪」

静香が少し驚いた様子で言った。

優弥は喜んでオレンジジュースを飲み始める。

「おお♪やつぱ買って来てくれたじゃん」

「・・・別に」

「・・・？奏太どうしたの？」

#117 寂しい。

『あー眠い・・・』

5限目。古文の授業がつまらないので優弥は近くにいた千秋と喋っていた。

さつきから先生が何度かこちらを睨みつけている

因みに奏太はおそらく屋上で寝ているだろう。古文になるといつもさぼるのだ。

『奏太が大学ねえー・・・』

優弥が呟くと千秋は眠そうに机に伏せていた顔を起こした。

『奏太がさつき持ってた資料。あの大学結構遠いぞ?』

『やっぱあの家出てっちゃうのかなー・・・』

「・・・寂しいのか?」

千秋がにやりと笑って優弥をからかい始めた。

『そんなんじゃないって!!そーいう千秋こそ!どうせ高校でたら竜と会う機会も少なくなるんでしょ?!竜は忙しくなるだろうし』

「今私の話はしてないだろ!!」

千秋がそう叫んだ瞬間、チヨークが飛んできた。

「そこ!!さつきからうるさい!!」

先生がついに怒ったが、優弥と千秋は揃って先生を睨みつける。

「先生、うるさいっ!!」

先生は呆れて授業を再開する。

『・・・確かに、寂しいよ』

「・・・」

千秋がしばらく黙った後、呟いた。

「・・・今みたいに6人で仲良くってというのは少なくなるんだろうな」

放課後、廊下を走ってる優弥は現在教室に向かっていた。

先生に呼び出され、職員室に行つて来たところで、教室に奏太を待たせているのだ。

『奏太っ！ごめん！！さっ、帰・・・』

奏太からの返事はない。教室にたった一人で居た奏太は、ぐっすりと眠ってしまった。

優弥はその隣の席に座った。奏太は静かに寝息をたてている。

『爆睡してるなあ・・・』

そのうち、だんだんと瞼が重くなってきた優弥はいつの間にか眠りについていた。

「・・・？」

奏太が目が覚めるとそこは教室。隣にはぐっすり眠っている優弥が居た。

「・・・何やってんだ、こいつ」

奏太は静かに教室を出て、自動販売機へと向かった。喉が渴いた。階段を下りて自販機のある一階へ向かい、パックのジュースを買い、奏太はふと窓の外を見た。

嫌な予感がしたその瞬間、空が急に光って、雷が鳴り出した。

奏太は別に平気なのだが、優弥は昔から雷が大の苦手だった。教室においてきてしまった。

奏太は優弥のいる教室へと足を急がせる。

そつと、教室の戸をあけると奏太が優弥を確認する暇もなく、すぐに優弥が抱きついてきた。

「優弥・・・？」

優弥の肩が小刻みに揺れている。泣いているのだろう。

奏太は優弥の背中にそつと、手をまわした。

『ううつ・・・』

しかし、優弥はなかなか泣き止まない。

「おい、いい加減泣き止めよ。雷くらいでそんな・・・」

『・・・わかんない』

優弥からは意味不明な返事が返ってくる。わかんないはこつちの台詞だ。

「は？」

『私も何でこんなに泣いてるのかわかんない・・・』

「意味わかんねえよ」

『今までは隣に奏太がいるのが当たり前だったのに・・・』

「・・・」

奏太は優弥を引き離し、飲んでいたジュースを無理矢理優弥に銜えさせた。

『むぐっ……』

そして奏太は自分の鞆を手に取り、教室から出て、廊下を歩き出した。

『奏太？帰るの？ちよつと待って、私も……』

「……ばーか。寂しいのはお前だけじゃねえよ」

『そうだよ！千秋も静香も竜もカナもみーんな寂しいよ！！きつと、いや絶対！』

「……そうじゃねえよ」

奏太は呆れてため息をつきながら廊下に出て行った。

#119 遊びまくる？

『あーっーいー・・・』

教室をどんと暑くさせる太陽はそれをやめようとはしない。

優弥は下敷きを団扇代わりにして仰いでいた。

「こんな暑いと授業にも集中できないよっ！！」

竜が奏太の肩に倒れこみながら叫んだ。奏太は暑そうにして竜を引き離れた。

「くつつくな。余計に暑い。お前は暑くても寒くても勉強しねえだろ」

刹那、千秋が急に立ち上がる。

「おい静香！3日後は何があるか知ってるか！！」

千秋は静香にアイスをマイクのようにして向けた。静香は急にあてられたのであわてながら答えた。

「ええっと・・・終業式！」

「そうだ。終業式が終われば翌日からは何だ！」

今度は叶の方を向いていった。叶は少し首をかしげる。

「えっと、夏休み？」

「そうだ。夏休みだ！今年の夏休みは遊びまくるぞ！！」

千秋はこう叫んでいるがここまで元気がいいのは千秋ただだ。皆暑そうに下敷きを団扇代わりにばたばたさせている。

『千秋は元気だねー』

優弥はさりげなくそう呟くと勢いよく千秋に睨まれる

「いいから遊ぶ！」

「ちーちゃんは思い出を作っておきたいんだよ」

静香は笑顔でそう言った。

「・・・かーわいいー」

叶と竜と優弥で声をそろえて言った。千秋は顔を赤くして叫びだす。
「バカにしてんのかお前等！！！！」

さつきからやけに騒がしい千秋をクラス中の人が呆れながら見ている。

『でも、いいかもね。海とか行こうよ』

優弥の言葉で千秋の目の色は一気に変わる。

「よっしゃ、ほら来た！！海！花火！お祭り！その他諸々！！」

『私海しか言つてないし。色々増えるよ？』

とか言いつつも。高校生活最後の夏休みだ。思いっきり遊びまくろう。

周りの女子達はうらやましそうに見ていた。

おそらく、自分も奏太たちと遊びたいとでも思っているのだろう。

だが、そんなのは見てみぬフリをして、優弥達はさっそく計画を立て始めた。

#120 忘れられない夏？

『海だぁー！！！！』

面倒な終業式も終わり、夏休みに突入した優弥たちは海にやってきていた。

この後は竜が予約してくれたホテルで一泊、明日はお祭りへ行く予定だ。

優弥たちは早速海に入る。

千秋はどこからかビーチボールを取り出して竜に当て始めた。

「痛〜！！！！こんなにやろう！」

竜は思いつきり奏太にボールをぶつける。

「いつて・・・」

奏太は竜を睨みながら静香に向かってボールを投げた。

『ふぁー・・・つかれた』

優弥は砂浜に立てたビーチパラソルの下へ移動した。

千秋たちはまだ遊んでいる。

『皆元気だねえー・・・』

優弥が一人で仰向けで寝転がってうとうとしていると、急に隣に奏太が座ってきた

『私さー、多分去年ここの海来た時から奏太のこと好きなんだよねー』

優弥が、少し遠い目で呟いた。

「何だよ急に。よくそんな事覚えてるな」

奏太が飲み物を飲みながら不思議そうな顔をしている。

『そりゃ忘れらんないよ。あんなに奏太が嫌いだったのにいきなり奏太を好きになっちゃうんだもん』

「ふーん」

興味がなさそうにしている。優弥は奏太を見て、また呟いた。

『今年はもつと忘れられないんだろなーって、勝手に思ってるんだけど?』

「……」

奏太は相変わらずの無表情で飲んでいたジュースを優弥に差し出した。

「もういらなから飲んでいて」

そういつて再び千秋たちの元へいつてしまった。

『……高校最後の夏だつていうのに……』

優弥は奏太のジュースを飲みながら呟いた。

ふと、千秋達の方に向かって歩いていった奏太が急に立ち止まって振り返った。

「水着、そこそこ似合つてんじゃない?」

そう言つて、再び歩き出した。

『そこそこつて……』

#121 2人部屋？

竜が予約してくれたホテルは結構いい所だった。

『おおー。さつすが竜♪』

優弥が言つと竜は困つた顔で優弥を見た。

「んー。でもね。3人部屋が空いてなくてね」

『・・・？じゃあ何処に泊まるの？ここじゃないの？』

「ううん、ここだよ。2人部屋を3つ予約しておいた♪」

その場が一気に静まりかえる。おそらく皆状況を整理しているのだろつ。

「じゃあ、ゆーちゃんと奏ちゃん、ちーちゃんと竜ちゃん、しーちゃん僕つてこと？」

沈黙の中、そう呟いたのは叶だった。

「そういうことだね♪」

竜が笑顔で言つた。

『・・・ええええええ？！何それ！！』

優弥は思わず叫んでしまった。いそいで口を押さえる。

「あ、でもベツトは別なんだから。変なこと考えないでね♪」

そう言つて竜は奏太と静香にそれぞれ部屋の鍵を渡した。

「へっ・・・変なことつて！！んな事考えてねえよ！」

そう叫んだ千秋は竜に引つ張られ、去つてしまった。

「と・・・とりあえず部屋に行こうか」

静香のその言葉で、とりあえず部屋に向かった。

部屋で奏太と2人きりになると急に緊張して話題が何も出てこない。部屋には時計の音だけが響いていた。

『・・・』

優弥はそつと荷物を降ろした。

「おい」

『わひゃあ?!』

急に話しかけられ、優弥は驚いて奏太を見る。

「何でそんな驚いてんだよ」

『なんでもいいじゃん!・・・で、何?』

「風呂、お前先に入ってこいよ」

『は・・・はい』

優弥は言われるがまま、浴室へ向かった。

#122 変なこと。

「そ・・・奏太？次、どうぞ・・・」

お風呂に入った後、優弥はベッドの上にいる奏太に恐る恐る話しかけた。

約17年間一緒にいるので2人きりになったことは数え切れないほどある。

だがこれまでとは話が違う。同じ部屋ならそうと最初から言っておいてほしい。

（竜のばかぁ・・・）

心の中でそう呟く。奏太は立ち上がって浴室へと入っていった。

「別に変なことはないだろうし！大丈夫だよ！うん！」

一人でそう呟きながら優弥はドライヤーを手に取った。

奏太がお風呂から上がると優弥はベッドの隅で小さくなって眠っていた。

「・・・」

それはそうと、優弥はさつきから緊張しまくっているのがバレバレだ。

だが奏太には竜が言う”変なこと”をするつもりは全くない。

奏太は優弥の髪をそつと、撫でた。

刹那、部屋をノックする音が聞こえた。

奏太がドアへ向かおうとすると何度も何度も、ノックする音が聞こえてくる。

これはおそらく扉の向こうにいるのは一人ではない音。

誰がいるかはだいたいの見当がつく。

呆れながら奏太がドアを開けるとそこにいたのは案の定、千秋と竜と叶と静香。

「うるせえよお前等」

奏太が呆れてそう言うのと千秋が元気そうに手を挙げた。

「よーっす！おじゃましーす！！」

「だからうるせえって言うてんだろ。優弥が寝て……」

「ん……？ちあき……？」

優弥の声が聞こえる。やつぱり起きてしまった。

「おう！優弥！夏だしちよつとホラー映画をと思つてな！」

そういうと千秋はどこからかポータブルDVDプレイヤーを取り出してセットし始めた。

『何処で拾ってきたの、それ』

優弥は起き上がりながら楽しそうに準備する千秋を見つめた。

「竜が持ってきたんだよ」

竜を見ると笑顔でブイサインをしていた。

#123 隣。

『ひゃあ!!』

優弥は思わず叫んで布団にもぐりこむ。

千秋たちの持つてきたDVDが予想以上に恐ろしい映画だった。

静香と叶はすでに部屋の隅へ行ってしまうている。

奏太は相変わらずの無表情で見ている。

千秋と竜は楽しそうに画面をじっとみている。

自慢ではないが優弥はホラーと雷は大の苦手だ。

そつと布団の隙間から画面を見るとどうやら映画が終わったようだ。

『終わった？終わった？』

「終わった♪」

優弥の問いに千秋はいきいきしながら答えた。

静香と叶が互いに「怖かったねえ」と言い合いながら部屋を出て行った。

『そんなの見せないでよお・・・』

千秋と竜楽しそうにDVDを片付けて部屋を出て行った。

「・・・くだらね」

そう言つて奏太はさつさと寝てしまった。

『ええ?!もう寝るの?!待ってよ!!』

「なんだよ」

でも気付くとすでに夜中。これ以上起きているのもおかしい。

『・・・一緒に、寝てもいい?』

あんな映画を見せられた後では怖すぎて眠れないに決まっていた。せめて近くに奏太がいて欲しい。

優弥は枕を握り締めて奏太が使っているベッドを見つめた。

「・・・」

奏太は少し黙った後、ため息をついて少し場所をずれて、ここに来ていとも言うつように空いた場所をぽんぽんと叩いた。

『・・・』

優弥は奏太が叩いた場所へ行った。

『失礼します』

優弥はそつとベッドにもぐりこむ。

同じベッドで寝るのは幼稚園以来じゃなかろうか？

しかも本来は1人用のベッドなので結構狭い。優弥は今更緊張してきた。

（何やってんだろ?! 私!!）

#124 幼稚園以来の。

千秋たちもいなくなつて部屋に響くのは再び時計の音のみとなった。沈黙の中、奏太はずっと天井を見ている。

『・・・・・・・・』

早く寝てしまいたいのだが胸の鼓動がだんだん早くなっている。

これは、怖いからなのか、奏太と同じベッドだからなのか。

優弥にもよくわからなかった。

刹那、ゴトツという物音がした。

『ひゃあ！！』

ホラー映画を見たばかりの優弥は怖くて仕方が無い。

思わず奏太にしがみつく。

「隣の部屋の奴が壁にぶつかったただけだろ」

奏太は面倒くさそうに呟いた。

『ふえええ・・・・・・・・』

優弥は奏太にしがみついている手の力を強くした。

「おい、いい加減放せ」

『やだ！怖いもん・・・・・・・・』

「離せ」

『嫌』

優弥がなかなか離れようとしないので奏太は無理矢理優弥を離れた。かと思つと、突然手がつなされた。

「こうしてればいいじゃん」

『・・・・・・・・うん』

その手を見て、安心しきつた優弥はそのままいつの間にか眠っていた。

『ん・・・・・・・・？』

翌朝。優弥が目を覚ますと隣に奏太の姿が無かった。

『あれー？奏太ー？』

ベッドから降りて奏太を探すと突然洗面所から奏太が出てきた。

「なんだよ」

前髪が噴水のように結ばれている。顔を洗っていたのだろう。

『いや・・・別に』

あつさり奏太を発見してしまった。優弥はそのまま洗面所へ入る。

顔を洗いながら昨夜の出来事を思い出してみた。

（そつか・・・一緒のベッドで寝ちゃったのか・・・手、繋ぎながら・・・／／／）

馬鹿らしくなってきた。出しっぱなしにしていた水を止めて洗面所を出る。

『?!?!何してんの!?!!』

洗面所を出るとそこには上半身裸の奏太。

「は？着替えてんだよ」

『っ・・・／／もういいっ！着替えるからむこう向いてて!?!』

優弥は、顔がだんだん熱くなるのを感じた。

#125 射的勝負。

海へ行つて一夜明けた日もとくに午後になっていた。
空はまだ少しだけ明るいがもうすぐ日が沈むだろう。

優弥達6人は現在、お祭りを満喫していた。

「浴衣とか持つて来ればよかったね」

静香が回りを見渡してそうつぶやく。

千秋は腕を組みながらため息をついた。

「荷物が増えるから嫌」

「ちよつと！奏ちゃん！！」

突然、後ろから大声が聞こえた。

声の主は竜。射的屋の前ではしゃいでいた。

「射的やろうよ！射的！！いっぱい物とったひとが勝ちだよ！！」

竜は奏太の服の袖をぐいぐいひっぱった。

「は？めんどくせ・・・」

「あつれえ？？自信がないのお？？」

自信に満ち溢れた表情で竜がそう言うのと奏太は銃を手に取って銃口を竜に突きつけた。

「んなわけあるか。お前より商品とつてやる」

「さすが奏太♪」

その隣で叶もやる気満々な表情で銃を手に取っていた。

『・・・あほらし』

その様子を他人のフリでみていた優弥と千秋と静香は呆れながら勝負の行方を見守った。

いつの間にか周りには少し見物人が現れ始めていた。

「俺あのゲーム落としてやるもんねえー♪」

竜は楽しそうにゲームの箱へ銃を向けた。

だんだんと何故か見物人が増える中、決着が付いたのは数分後。

竜も奏太も結構な量をとっていたのだが、それよりも叶がたくさん

のお菓子を抱えていた。

「か、カナ?!俺ゲームとか頑張ったのに!!」

竜が驚いた表情で大量のお菓子を羨ましそうに見つめた。

「だってこれ、価値じゃなくて量で勝負でしょ?竜ちゃんそう言うてたよ?」

叶は満面の笑みでそう言った。

優弥は竜と叶の隣で呆れた顔でいる奏太の元へ近寄る。

『ねえ、それちょうだいよ』

優弥が指さしたのは奏太がたった今射的で落としたうさぎのぬいぐるみ。

「・・・はい」

奏太は理由でも聞きたがるかのように間をあけて、優弥にぬいぐるみを渡した。

それを見た優弥はぬいぐるみを抱えて、静かに呟く。

『高校最後の夏だもん。思い出にね。ただそれだけ』

「・・・」

射的で取った商品を竜に預けた奏太は突然、ケータイを取り出して時間を確認した。

「おい、優弥」

『・・・何?』

優弥が返事をするのと同時に、奏太は優弥の腕を引っ張って走り始めた。

#126 忘れられない夏

まだ少し明るい空の下、奏太に連れられてやって来たのは昨日来た海だった。

人々は祭りへ行っていて、しかもやってきたのは隅の方だったのでそこには誰一人いない。

波の音が静かに響く中、奏太は何も言わずにその場に座り込んでしまった。

「・・・？奏太？」

奏太が何をしたいのか、優弥にはあまり理解が出来なかったがそつと奏太の隣に座り込んだ。

それから数分間、奏太との会話はなかったが優弥には妙に心地良く感じられた。

黙っている奏太は別に怒っているわけではないとなんとなく感じる事が出来たからだ。

「これは優しさだ」

「？」

思わず呟いた優弥を奏太は不思議そうに見た。

「いや、何でもな・・・あっ！！」

優弥がそう呟くのと同時に、西の空にあった太陽は水平線へと沈もうとしていた。

いつの間にか海は、オレンジ色に染まっている。

「ねえ、奏太。もしかしてこれのため？」

「・・・別に」

優弥は立ち上がり、服に付いた砂を掃った。

「まあ、”忘れられない夏”にはほど遠いかもしれないけど」

優弥はにやりと笑いながら、同じく立ち上がった奏太を見ると、奏太の頬が少し赤く染まった。

「あはは。照れてるー！！」

散々笑ってやった優弥は、静かに微笑んだ。

何か言いた気な表情で、じっと奏太を見つめている。

「・・・」

奏太は少しためらいながら、優弥の頬に手をそえ、2人の唇をそっと重ねる。

静かに絡まった舌から熱が伝わる度に、優弥の鼓動はだんだん速くなっていく。

優弥が奏太の背中に手を回すと、奏太の腕が優弥を優しく包み込んだ。

ゆっくりと唇を離れた奏太は、優弥の顔を見るなり、いきなり頬をつねった。

「・・・顔赤いよ？」

優弥の表情はさっきとは一変し、真っ赤になっていた。

『こ、これは夕日のせい!!』

優弥がそう叫ぶと、奏太は来た道を戻るように歩き始めていた。

『ちよつと待つてよ!!』

優弥はその背中を小走りで追いかけた。

祭りで盛り上がっている一方、優弥達の学校のグラウンドでは静かに走る足音だけが響いていた。

「つ・・・はあ、はあ」

走り終えて座りこんだ少年の下へ、一人の少女が近寄る。

「あの・・・無理はしないでくださいね？」

「わかつてる。心配してくれてありがとう」

少女はその少年の隣にしゃがんだ。

「最近頑張ってますよね、先輩」

「・・・今年は負けるわけにはいかないからね」

そう言って少年は微笑んだ。

「・・・？」

#127 もうすぐ・・・？

まだ暑さの残る9月。

未だに夏休み気分の生徒もいる教室。

『あーもう！あつい！！』

始業式を終えた優弥はいきなりそう叫んだ。

「よし、じゃあ誰かアイス買ってこい！」

千秋がいきなり提案してじゃんけんしようとしても言うように手を出してきた。

周りにいた静香、竜、叶、奏太もそれに賛成した。

「さんせーい！はい、じゃーんけえーん・・・」

竜の声でじゃんけんが始まるうとした瞬間、教室のドアが思いきり開く。

「せんぱい！！！！！！！！！！」

そこにいたのはけんけんだった。

けんけんは戸をあけたまま、奏太の元へ近寄ってきて人差し指を立てながらその手を奏太に向けた。

「今年こそは負けませんからね！！」

「・・・何が」

興味なさそうに奏太が呟いた。

「リレーです！！もうすぐ体育大会なんですよ！！」

「・・・そうだったけ」

「そうなんです！今年もリレーに出て、アンカーやってくださいね！！」

そう叫んだけんけんは奏太の返事も聞かずに教室を飛び出した。

「あ、そういえば誰かから聞いたけどさ」

けんけんが去った後、アイスのことはすっかり忘れた様子の千秋は話を始めた。

「けんけん陸上部入ったんだっけ？あの祭りの日にさ、学校でけん

けんとマネージャーで走ってたらしいけど」

『マネージャーって、もしかして小雪ちゃん？』

優弥がちらりと千秋に目をやると千秋は頷いていた。

「へえ、結構仲良くやってるんだね」

叶は嬉しそうだった。

けんけんと小雪がらぶらぶになってしまえば失恋した2人も幸せになれる。

そう考えると嬉しかったのだろう。

隣にいる静香も幸せそうだった。

「だから奏ちゃんはりレー頑張って「ゆーやは俺んだ！」っていつてけんけんに諦めてもらわなきゃねー？」

竜が奏太の頬をつんつんとつついた。

「何でそうなるんだよ」

竜の手を払いながらも、奏太は少し考え込んでいる様子だった。

#128 好きじゃない。

『3年全員リレーでしょ、学年種目・・・綱引きだっけ？それに騎馬戦、団対抗の選抜リレー』

体育大会は来週。お昼休みに優弥は奏太と一緒に廊下を歩きながら指を折る。

『4！4つの競技に出なきゃね。奏太』

「そんなにあんの？めんどくさ・・・」

奏太は自動販売機の前で立ち止まり、ココアを2つ購入した。

一つを優弥に手渡し、再び歩き始める。

『リレー、アンカーやるんでしょ？』

「・・・まあそうなるだろうね」

奏太がそう呟くと同時に、優弥は玄関の方にいる小雪の姿を発見した。

『あ！小雪ちゃん！！』

優弥がそう叫んで手を振ると、小雪は周りをきよろきよろと見渡す。その姿に思わずくすくすと笑って近づくと、小雪は優弥と奏太の姿を発見し、少しだけ手を振った。

『けんけんと仲良いみたいじゃん？』

優弥はにやりと小雪をみつめる。

「あ、はい！とっても優しくて、フラれたばかりの私も・・・慰めてくれました」

小雪は少し頬を赤らめて思い出すように呟いた。

『うつ・・・ごめん』

小雪がフラれたのは優弥のせいだ。思わず優弥は頭を下げた。

「あつ、いえ！もう藤波先輩のことはなんとも思っていないですし！

」

『けんけんが好きになっちゃったから？』

頭をあげて、優弥は再びにやりと笑った。

「え?! そ、そんなんじゃないですつ!!!」
顔を赤らめた小雪はそのまま走りさった。

好きじゃない、好きじゃない、好きじゃない……!!

小雪は廊下を走りながら、何度もそう自分に言い聞かせた。

藍澤先輩が好きなのは、如月先輩。

藍澤先輩を好きになったって、また悲しい思いをするのは、自分。

「あれ? 小雪ちゃん?」

噂をすれば、というやつなのか、目の前にはけんけんが現れた。
今、最も会いたくなかった人物。

小雪は立ち止まって、けんけんの前に立った。

「あ……えつと」

「どうしたの? 思いつめたような顔して」

けんけんは心配そうに小雪の顔を覗き込む。

「いえっ! 別に何も……」

「そ? 何かあったらいつでも言って?」

そう言っただけけんけんは小雪の頭をぽんぽんと叩いた。

好きになっただけいけないのに。

どうしてこの人は、こんなにも優しいのか。

好きになっただけ後悔するのは、自分。

「……ほんとさ、如月先輩の事、諦めちゃってるんだよね」

どんどん思いつめた顔になって行く小雪に、何か話題を探していたのかけんけんは突然そう言った。

「……え?」

小雪は、耳を疑った。

#129 幸せを願う。

「あの、先輩、今何て？」

小雪は恐る恐る聞き返す。

今けんけんの言った言葉が、信じられなかった。

もしそれが本当なら、今まで自分が悩んでいたのはなんだったのか。

「如月先輩はもうとつくに諦めてんの」

けんけんは、笑顔だった。

「そんな簡単に諦めちゃっ・・・」

小雪が、優弥から言われた言葉だったのだが、小雪はけんけんが必死に笑っているのが、わかった。

「1年経つても、優弥先輩が好きなのは奏太先輩。そろそろ好きな人の幸せくらい、願ってあげなきゃ」

けんけんは、悲しそうに笑った。

「だから、体育大会に奏太先輩とリレーで勝負する」

けんけんはガッツポーズをした。

「奏太先輩にかなうわけないって、わかってるけどさ。けじめをつけたくて」

「・・・・・・」

小雪が何も言わなくなったので、けんけんは「じゃあね」と手を振って去っていった。

午後の授業は体育大会の全員リレーの練習。

優弥はスタート位置に立つ奏太を見つめた。

「私的なストーリーでいくとね！」

隣にいる千秋に向かっていきなり叫ぶ。

「けんけんは奏太との勝負に負ける！そして小雪ちゃんが慰める！そこでけんけんドキッ！俺は、小雪ちゃんが好きなんだあー！的な展開になつてくれないかなーと」

優弥がいきなり語り始めたので、千秋はすっかり呆れている様子だった。

「そんな上手くいくかね？」

『いくと願う！だからこそ、奏太は勝ってほしい！』

「いくら奏太でも、相手は陸上部だぞ」

千秋がそう言った途端、バトンは奏太へと渡った。

奏太は相変わらずの速さで、どんどん他の人と差をつけていく。

『けんけんにも、幸せになってほしいからさ』

「・・・まあ、ね」

『ほら千秋、そろそろ私達の走る番だよ』

優弥が歩きだすと、千秋もその後ろを歩き始めた。

#130 ランチタイム。

雲が少し漂う空の下、体育大会は始まった。

面倒な開会式が終わり、赤のハチマキを巻いている優弥は団席へと戻った。

『あつつい・・・』

優弥はお茶を取り出し、飲み始めると静香は心配そうに空を眺めた。

「今日午後から雨降るって聞いたよ？」

『え、そうなの？』

その途端、優弥の手からお茶が無くなった。

「おまえ天気予報もみてねえのかよ」

振り向くと、優弥のお茶を飲んでいる奏太がいた。

『ちよつと！お茶くらい自分の飲んでよね！』

「荷物になるから持ってきてない」

『はい?!』

「次、2年の全員リレーだろ」

『ああ、けんけんも出るの？』

「・・・」

奏太は、無言でお茶のふたを閉めた。

「あいつ、何考えてんだよ」

『・・・?何か言った?』

「べつに」

『千秋!静香!!』

午前中の競技が終了し、ランチタイム。

優弥はお弁当を手に、千秋と静香の元へ向かった。

「教室？」

千秋もお弁当を取り出し、呟く。

「そうしょつかー」

静香は相変わらずの笑顔。
優弥達は校内へと歩き出した。

その頃、小雪はお弁当を手にながらけんけんの元へとむかっていた。

「せんぱいつ！」

「小雪ちゃん？」

けんけんが小雪に気付くと、小雪は俯きながら呟く。

「あの・・・お昼、一緒に食べませんか？」

けんけんはしばらく無言だったが、すぐに笑顔になった。

「うん、いいけど？」

131 応援のために？

小雪とけんけんはグラウンドの木陰でお昼ご飯を食べていた。

小雪は笑顔でご飯を食べ続けるけんけんをちらちらと横目で何度も見つめる。

「あの・・・先輩」

「ん？」

けんけんは、ぱくぱくとご飯を食べ続けながら小雪の方を向いた。

「本当に・・・諦めちゃったんですか？如月先輩」

「諦めたよ・・・ただね」

けんけんは相変わらずの笑顔で話しを続ける。

「ちょーつといじわるしたくなっちゃうんだよね。奏太先輩に♪」
「・・・？」

昼食を終えた優弥は、お弁当のふたを閉じた。

「あー・・・午後つて最初なんだっけ・・・」

「そんなもん知るか・・・それより優弥」

千秋が手でおいでおいでとでも言うように手招きしている。

「ちよつとこつち来て♪」

静香が無理矢理優弥を立たせ、歩き始めた。

「え？ちよ、何処行くの？！」

千秋は「いいからいいから」といいながら優弥の背中を押している。

無理矢理連れて来られたのは誰もいない視聴覚室。

静香は笑顔急に笑顔になった。

「あのね、ゆーちゃん？」

「は・・・はい」

「奏太君とけんけん、勝負するでしょ？」

「はい・・・」

静香の笑顔がだんだん恐ろしいように見えてきた。

何を企んでいるのか

「やっぱりね、奏太君の勝利のためには応援も重要だと思うの」

『え・・・そうなの？』

「そこでだ。優弥」

静香の隣にいた千秋が静香に続いて急に喋りだした。

「これを着て、応援してあげなさい」

何処から出したのか、千秋の手にはチアガールの服。

『は・・・はい?!』

「つべこべ言わず!」

千秋は無理矢理優弥に服を押し付けた。

『ぬ・・・布が少な・・・』

「いいから、黙って着るよ」

静香は笑顔でそう言った。

『は・・・はい』

優弥が頷くと、千秋と静香は視聴覚室から出て行った。

#132 階段。

『あ・・・あの』

優弥が着替えて視聴覚室からだと、千秋と静香が待っていた。

「ゆーちゃん可愛いー!!」

静香がぴよんぴよんと跳び始める。

千秋は腕を組んで何度も頷いていた。

「ほら、噂をすれば奏太だ」

千秋は廊下の水道水で水を飲んでゐる奏太を指さした。

『別に噂なんかしてないんだけど・・・』

優弥が一旦、奏太を見て再び千秋と静香のところを振り向くと、2人はいなかった。

『あれ?! ちよつと、千秋? 静香?!!』

優弥が一人で叫びながらきよきよしていると、いつの間にか後ろに奏太が立っていた。

「・・・何一人で叫んでんの」

『ほわあ!!』

驚いて振り返ると、奏太は呆れた顔。

「というか、何その格好」

奏太はチアガールの優弥をみて更に呆れた様子だ。

『ああ・・・えつと、応援?』

「・・・」

奏太は無言だった。

（か・・・完全に呆れてるよ・・・他の話題!）

優弥は心の中で勝手に落ち込んでいる。必死に話題を探した。

『あ、そうだ!! リレー、絶対勝つてね!!』

優弥は歩き出した奏太の隣に並び、リレーの話始めた。

階段の手前に来たところで、2人は立ち止まる。

優弥はチェーンにつけて首から提げていた指輪を奏太に見せた。

『期待してるから』

その瞬間、どうして神様はこうも意地悪なのか、指輪をしまおうとした途端にチェーンが切れ、指輪は呆気なく階段の下に落ちていく。
『あっ……』

届くはずの無い指輪に思わず手を伸ばした優弥は、そのままバランスを崩した。

『ひゃっ……』

何が起きたのか、わからなかった。

気付いた時には優弥がいたのは階段の下。

階段から、落ちてしまったのだ。

『っ……』

優弥は恐る恐る目を開ける。そんなに痛くない。運がよかったのか？

『……え？』

運がよかったわけではない。目を開けた先にいたのは、奏太。

『奏太?! ちょ……大丈夫?!』

奏太が、優弥の下敷きとなってくれたのだ。

『お前こそ、怪我は?』

奏太は優弥の頭を軽く叩いた。

『私は……大丈夫』

その言葉を聞いた奏太は呆れながら立ち上がる。

『……あ』

『……何? どうかした?』

『……別に』

『えー、気になるじゃん!』

優弥が歩きだした奏太の腕を掴む。

だが、奏太はすぐにそれを振り払った。

『……え?』

『……なんでもない』

奏太はそのまま階段を下りていく。

優弥はチェーンの切れた指輪を、仕方なく指にはめた。

#133 キス？

騎馬戦が行われているグラウンドの隅の木陰に、優弥は座り込んでいた。

この場所は少しだけ涼しいのだ。

『リレーってこれの次だっけ・・・』

因みに格好は体操着に戻っている。

あんな服を着ていたら午後の競技に出られない。

騎馬戦が終わったようだ。男子達が戻ってくる。

「せんぱいつ！」

ふと、けんけんの声がきこえた。

『・・・？』

案の定、けんけんが走りながら優弥の元へ向かって来ている。

けんけんは笑顔で手を振ってきた。

『けんけん？！次リレーだよ？！こんなとこにいていいの？！』

優弥は、選抜リレーに出る人たちが並んでいる行列を見るが、けん

けんは寂しそうに優弥を見つめた。

「せんぱい・・・」

『何・・・？』

「今まで、ご迷惑おかけしました」

けんけんは、ぺこりと頭を下げる。

意味がわからなかった。

『はい？・・・あの・・・』

優弥がおどしていると、けんけんは急に笑った。

「先輩っ」

突然、けんけんは優弥にキスをしてきた。

優弥はぼーっとけんけんを見つめる。

何が起こったのか状況が整理出来ない。

「それじゃっ、リレー頑張ってくださいねっ！」

そう言い残してけんけんはそのまま走り去って行った。

『・・・・・・・・・・・・・・・・え？』

ようやく我に返った優弥は、楽しそうに去っていくけんけん、だんだんと天気があやしくなっていく空を交互に見つめた。

リレーが始まった頃に暗い顔で団席に戻った優弥は、自分の椅子にそのまま座り込んだ。

「どしたー？優弥。暗い顔して」

千秋が隣の椅子に座って優弥の顔を覗き込む。

『思い出したくもない・・・・』

一方その頃。

奏太とけんけんはスタート位置に立って自分達の走る出番を待っていた。

もうすぐで、バトンが来る。

「奏太先輩、俺優弥先輩の事諦めます」

けんけんは、急に呟いた。

「・・・・・・・・知ってる」

「よくわかりましたね」

「あいつと・・・・小雪と喋ってただろうが」

「盗み聞きですか」

「聞こえたんだよ」

奏太は、相変わらずの無表情。

そんな奏太に、けんけんはにやりと笑った。

「さっき、優弥先輩にキスしちゃいました♪」

刹那、バトンを貰ったけんけんは、走り出す。

「・・・・・・・・」

数秒後、奏太も走り出した。

#134 こわい。

空は今にも雨が降り出しそうだった。

奏太は少し前にいたけんけんを、楽々と抜かす。

『あー・・・雨！まだ降らないで！！もう少し待って！』

優弥は手を合わせて空に向かって叫ぶ。

隣にいた千秋は、そんな優弥に呆れながらため息をついた。

「おい、優弥。なんかおかしくないか」

『え？何が？』

優弥が手を合わせながら千秋を見ると、千秋は奏太とけんけんをじつと見つめていた。

「奏太だよ。なんか、走り方おかしい気が・・・」

その瞬間、奏太は急にスピードが遅くなった。

『え・・・？』

「足でも痛いのか？」

思い出した。そういえば階段から落ちてしまったのだ。

『もしかしてあの時・・・』

そういえば奏太の様子が少しおかしかった気がする。

優弥はてつきり奏太が怒っていただけなのかと思っていたが、足が痛いのを優弥に隠していたのだ。

『私の、せい・・・？』

優弥があんな事をしなければ。

思えば自分は、奏太に迷惑をかけてばかりだった。

後悔ばかりが押し寄せてくる。

千秋は、隣で泣きそうになるのを必死に我慢する優弥の頭をそっと撫でた。

「・・・」

とうとう、雨も降り出してしまった。

「先輩・・・？足、どうかしたんですか？」

ようやく奏太に追いついたけんけんは、奏太の隣に並んだ。

「・・・別に、なんでもねえよ」

奏太はそのまま、最初と同じ、いつも通りのスピードで走りだした。

「怪我してるのに・・・。やっぱり奏太先輩にはかなわなくなっ・

・」

そう呟いて、けんけんも奏太の背中を追いかけた。

先にゴールテープを切ったのは、奏太だった。

雨は相変わらず降り続け、生徒達は体育館へと小走りで向かっている。

『奏太っ・・・』

優弥は、奏太の長袖を持って奏太の元へ近寄った。

『あの・・・冷えるから、長袖・・・あつ、保健室行かなきゃね！

閉会式くらい出なくてもばれないでしょ！』

優弥は、奏太を支えて歩きながら、長々と喋り続けていた。

奏太の顔を見るのが、怖い。

自分のせいで怪我してしまったのだ。

話をやめると、今にも泣き出しそうになってしまふ。

『それでね、さっきね・・・』

「・・・」

優弥は、奏太から目を逸らしたまま、話をずっと続けていた。

#135 つくりわらい。

閉会式は、体育館で行われていた。

だが、優弥と奏太は保健室の扉を開く。

『保健室の先生・・・体育館行っちゃったのかな？』

「・・・」

奏太は無言で、ベッドに座り込んだ。

優弥は床にしゃがみこみ、奏太の足の様子を窺った。

足首が赤くなり、腫れている。

『えっと、病院行った方がいいのかな？軽い怪我ならいいけど、骨折とかだったら・・・』

ずっと俯きながらオロオロしている優弥は、奏太に頬をつねられた。

『痛っ・・・何？』

優弥はようやく顔をあげる。

奏太はすっかり不機嫌な様子だった。

「・・・つくり笑いすんな」

突然そう言われた優弥は、また俯いた。

『だって、私・・・迷惑ばかりかけて・・・』

そう思うと、涙が一気に溢れ出す。

『っ・・・ごめんっ・・・』

泣き続ける優弥を、奏太は無理矢理立たせた。

「・・・めそめそしてんな」

『だってっ・・・』

突然、奏太は優弥の口を服の袖で抑えた。

『・・・？ふごっ・・・』

そのまま、ごしごしとこすり始める。

『ふごごごごっ・・・何?!』

無理矢理奏太の手を離して、奏太の隣に座った。

「お前、けんけんとキスしただろ」

『ええ?!ばれてた?!!』

「当たり前だ、ばーか」

そう言つて奏太は、優弥にデコピンをした。

『うう・・・ごめんなさい』

すると、奏太は突然優弥をベッドに押し倒した。

『・・・?奏太?』

奏太はその上にまたがり、優弥の口を押さえた。

「いいから、黙つてろ」

『ふござ・・・』

(奏太ー・・・?)

#136 諦め。

体育館からは生徒会長からのコメントが聞こえてくる。
そして保健室から聞こえてくるのは、優弥の声。

『んんっ・・・』

優弥がじたばた暴れても、奏太は手を除けようとしな
い。
口が塞がれたままだった。

『んんんんん！！』

「・・・いいから黙れ」

『・・・・・・？』

ふと、廊下からパタパタと足音が聞こえてきた。

その音はだんだん近づいてきて、保健室の扉を思いつきり開ける。

「せんぱいつ」

声をそろえて入ってきたのは、けんけん和小雪だった。

閉会式は終わったようだ。

「せ・・・先輩？」

けんけん和小雪はまたしても声をそろえる。

「悪いけど、用があるなら後にしてくれない？」

奏太は無表情だった。何を考えているのか。

けんけん和小雪の顔はだんだんと赤くなり、2人は何も言わずに扉
を閉め、去っていった。

奏太はようやく手を離し、ベッドから降りた。

『ちよつと、何がしたいの?!』

「けんけんに、綺麗さっぱり諦めてもらおうと思って」
『・・・？』

「あんな現場見たら、さすがに諦めつくでしょ」

『もしかして・・・そのため?!』

優弥が叫ぶと、奏太は相変わらぬ無表情で振り向く。

「何。期待でもしてた？」

『そつ・・・そんなんじゃない!』

「あのつ・・・先輩!!」

小雪は、廊下を歩くけんけんの背中に向かって叫ぶ。

「あの、えつと・・・私・・・先輩のことが、すつ・・・」

「すつぷ」

小雪の言葉を、けんけんは遮った

「・・・?」

「俺が優弥先輩のことを諦めたのは、先輩の幸せを願ってとか、そんなのだけじゃないんだよ?」

けんけんは、静かに微笑んだ。

小雪にはけんけんの言っていることが全くわからない

「ほ・・・他に何か理由があるんですか?」

「こんなにも近くに、自分のこと想ってくれてる人がいるからさ」

「・・・?」

「優弥先輩か小雪ちゃん。どっちが好きなのかわかんなくなっちゃった」

けんけんは、よくわかっていない表情の小雪の頭を撫でた。

「今まで自分の気持ちに気付けなくてごめんね。さっきの小雪ちゃんの言葉、俺から言わせてよ?」

「え・・・ええええええ?!でででも藍澤先輩・・・優弥先輩にキス、してましたよね?見ちゃいました!」

「ごめんごめん。最後に、奏太先輩いじめたくてね」

けんけんは、にやりと笑って、話を続ける。

「俺、さっきの保健室のやつで優弥先輩は綺麗さっぱり諦めついたし、ようやく自分の気持ち・・・気付けたから。小雪ちゃんが、好きだった」

「わ・・・私もだいすきです!!!!」

「知ってる」

そう言ってけんけんは、また笑った。

#137 冷たい？

体育大会が終わってしばらく経つ。近づいてくるのは文化祭。時が経つのは意外と速いもので、学園祭は間近に迫っていた。

優弥たちのクラスは去年に引き続き、お化け屋敷。

・・・の予定だったのだが、お化け屋敷は1組とかぶっていたらしく、学級長がじゃんけんに負けた為、喫茶店となった。

『喫茶店かぁ・・・楽しそうじゃん』

「喫茶店じゃない、メイド喫茶だ」

千秋が優弥の耳元で急に呟く。

女子がメイドさん役、男子は主に飾りつけ等の準備だ。男子でいいのか

現在、5限目は準備の真つ最中。

メイド服は「知り合いにメイド喫茶やっている人いる！」というクラスメイトがいたので借りることにした。

『高校の文化祭も最後かぁ・・・』

優弥は、遠い目で呟く。

「そうだよ！最後なんだよ！絶対成功させてみせる！」

そう叫んでガッツポーズをした千秋の元に、静香が駆け寄ってきた。

「ゆーちゃん、ちーちゃん！」

『およ？静香。どうしたの？』

優弥は首を傾げる。静香は満面の笑みだった。

「あのね、今年からのクラスが一番儲かるか競うんだって！」

その言葉を聞いて、千秋は怪しげに笑い始めた。

『ち・・・千秋？』

「ちーちゃん？」

「絶対優勝してやろうじゃないの！」

千秋は再びガッツポーズをした。

「は・・・はい」

留年しなければ高校最後の文化祭。気合は十分。

「・・・これ隣の部屋に運んどいて」

後ろから突然奏太の声がした。

優弥が後ろを振り向くと、ダンボール箱を持った奏太が立っている。

『あ、うん・・・』

優弥の返事を聞いて、ダンボール箱を渡した奏太はそのまま去っていった。

『・・・むー・・・』

「優弥？どうした？」

千秋がなにやら不機嫌な優弥の顔を覗き込む。

『・・・なんかさ、体育大会以来冷たいんだよね。奏太の態度』

「いつものことじゃねえかよ」

『そう？・・・やっぱけんけんときスしちゃったせいかなー？』

「何、何？倦怠期？」

静香が楽しそうに首を傾げた。

#138 客が少ない理由。

なかなかいい天気。なかなかの客の数。だが。

『・・・暇だね』

優弥達のクラスの喫茶店は人が少なかった。

やっぱりお化け屋敷とかの方が楽しかったのか

「・・・」

千秋はすっかり不機嫌な様子だった。

その隣で静香は必死に千秋を宥めている。

「やつほー」がらーんとしてるねえー」

突然、竜の声が聞こえた。

その声で、千秋は更に不機嫌になったご様子。

入り口の方に、竜と奏太と叶が居た。

『あー！奏太」みてみて！この服、かわいい？』

「きもいきもい」

優弥は笑顔で奏太の前に立つが、奏太は優弥の方を見向きもしないで答えた。

『ちよつと何それ！！』

「あ、そうか」

喧嘩が始まるうとした優弥の隣で千秋は突然指を鳴らした。

「お前等3人が居ないから客が来ないんだよ！お前等がメイドになればいいんだよ！」

千秋は嬉しそうに提案した。

叶と奏太はきょーんとしている。

「おい竜！お前の人脈ならプロのメイクさんとか呼べるだろ！」

「わーい」楽しそうだねー」

竜は楽しそうにケータイを取り出した。

見事に女の子な奏太達3人が接客をしてくれたおかげで女子の客が

どんどん増えた。

「・・・別に、奏太いつも通りじゃん」

面倒そうに接客をする奏太を見て、突然千秋が呟く。

「へ?! そ・・・そうかな」

優弥が曖昧に返事をする、ひょこひょここと静香がやってきた。

「奏太君、冷たいとかじゃなくて元気ないんじゃない?」

「元気・・・無い?」

優弥は、首を傾げた。

#139 元気がない？

奏太たち3人のおかげで、午前中はありえないくらいに儲かった。

「んー！！交代の時間♪」

優弥は背伸びをする。

奏太たち3人もいつもの姿に戻っていた。

竜は千秋に思いっきり抱きつく。

「ちーあーき♪どこ行きたい？何欲しい？」

2人は教室から出て行った。

「カナちゃん！私ね、ここと、ここと・・・」

静香と叶も2人で仲良く喋りながら教室を出て行った。

優弥が4人を見送ると、奏太は無言で優弥の手をひっぱり、歩き出した。

「奏太？どこいくの？」

「・・・何処でもいい。ここには居たくない」

「・・・？何で？」

奏太は、無言だった。

「ま、いいや。ねえ、おなかすいた」

「・・・何欲しいの」

「えっと、じゃあたこ焼き！1年生のクラスにあったはず・・・」

奏太は、再び無言で1年生のクラスへと向かった。

（・・・やっぱり、元気ないのかなぁ・・・？）

優弥は心の中で、そう呟いた。

「奏太っ！あーん♪」

たこ焼きの味はなかなか良いものだった。

優弥は奏太にたこ焼きを向けた。

呆れる人達や、うらやましがる女子達。

周りの視線が痛い、なんとかして奏太を元気づけよう、優弥はそ

う思っていた。

「おなかすいてないからいらない」

奏太は机に肘をついて、たこ焼きを作る１年生を眺めていた。

『そんなこと言わずに！食べないと元気でないよ！』

優弥は仕方なく、たこ焼きは自分で食べた。

その他にも、宝探し、プラネタリウム、クイズ、お化け屋敷。あらゆる場所に行ったが、奏太の反応はいまいちだった。

優弥はお化け屋敷を出て、次に何処に行こうか悩んでいた。

『あとは・・・うーんと・・・』

優弥は文化祭のタイムテーブルをポケットから出すために、そつと奏太との手を離れた。

『えっと・・・あ、体育館！体育館行こうよ！』

優弥が体育館の方を指さし、隣を見ると、奏太の姿は無かった。

『・・・あれ？奏太・・・？』

#140 女のひと。

優弥は一人でお化け屋敷の前できよろきよろしていた。

奏太の姿が何処にも見えない。

手を離れたのは一瞬だったのに、何処へ消えたのか。

『奏太ー?! 何処ー?!?』

「・・・先輩?」

突然、うしろから声がした。

思わず振り向くと、そこにはけんけんと小雪が2人仲良く手を繋いで立っていた。

『けんけん! 小雪ちゃん!! 奏太見なかった?』

優弥がまたきよろきよると周りを見渡すと、けんけんは優弥たちのクラスを指さした。

「奏太先輩なら誰かとあそこの喫茶店へ入って行きましたよ?」

「一緒にいた女の人、優弥先輩じゃなかったんですね」

小雪もけんけんが続いて呟く。

『誰かと? 女の人? 何それ。・・・ありがとう!』

優弥は早速自分のクラスを覗き込む。

午前中よりは客は少ないが、結構な人数はいた。

教室中を見渡して、奏太の姿を探すと奏太は客席に座っていた。

けんけんと小雪ちゃんの言葉を思い出し、奏太の向かいの席を見つめる。

そこに座っていたのは、私服の綺麗な女の人。

『だ・・・れよ!! あの人!!!』

昨年度の冬、悠希の時は逃げてばかりいたので、優弥は思い切って教室に飛び込んだ。

『ちよつと奏太! 突然消えたと思ったら何してんの!!!』

優弥が叫ぶと、奏太は無言で立ち上がり、優弥の手を引っ張る。

「・・・なんでもない」

『え?!なんでもないことないでしょ?!誰、あれ!!』

「・・・知らない人」

『そんなわけ無いじゃん!誰なの?!』

「・・・あとで話す」

これ以上言い返して奏太との仲が悪くなるのも嫌なので、優弥はそれ以上何も言わなかった。

『・・・わかった。あ、私ね、体育館行きたい!』

「ふーん」

#141 後夜祭。

空はすでに少し薄暗い。文化祭も終わりを告げる。

すっかりと片付けられた教室にはもう誰もいなかった。

外で後夜祭の真っ最中なのだ。

後夜祭はキャンプファイヤーをやるらしいのだが大して楽しくない。

「・・・」

つまらなさそうに火を眺めていた優弥は、周りを見渡し、奏太を探す。

「ねえ、奏太は？」

優弥は隣でもものすごく楽しそうにしている竜をチラリをみた。

「え？奏ちゃんなら楽しくないとか言っただけでどっか行っちゃったけど？」

優弥は再び周りを見渡してみる。

奏太は、遠くの木に寄りかかってコップを手に、ぼーっとしていた。

「奏太っ！こんなとこにいた！」

優弥は笑顔で、奏太の元へ駆け寄った。

奏太は、無言で一瞬優弥を見ただけだった。

「・・・」

「・・・」

何も話題が無い。優弥はじっと、奏太を見つめた。

「・・・何」

奏太は不思議そうに呟く。

しばらくそのまま奏太を見続ける。

「えいつ！！」

そして、いきなり奏太に抱きついた。

「・・・何、いきなり」

「だって話題がないんだもん」

奏太がコップの中のジュースを飲み、しばらく黙ったあと、優弥を

引き離した。

「・・・さっきの女、優弥覚えてないの？」

「え？」

「芹沢華蓮」

「かれん・・・？」

聞き覚えのある、名前だった。

中学１年生の夏から中学２年生の春頃まで、奏太と付き合っていた女の子だった・・・

#142 元カノ？

優弥は、中学の頃を思い返してみた。

芹沢華蓮。中学の頃に、奏太と付き合っていた同級生の女の子。

中1の夏頃から付き合い始めていたのだが、中2の春には両親の都合で、突然の転校。

それ以来、奏太とも全く連絡を取ることは無く、自然消滅で終わった。

『じゃあ、奏太と一緒にいたあの子・・・華蓮ちゃん？』

優弥は奏太を見上げる。

奏太は小さく頷き、話を始めた。

「あいつ、体育大会の日も来てた」

『そうなの?!』

「近々戻ってくるかもしれない。それだけ言っていなくなったけど」
奏太はじつとキャンプファイヤーを見つめ、話を続ける。

「そしたら今日、またいきなり現れて・・・」

『現れて?』

優弥は奏太を急かすようにそう言った。

奏太はキャンプファイヤーから目を逸らし、優弥の方を向く。

「高校は違うけど、戻ってこれることになったから、住む家が決まるまで泊めてって言われた」

『・・・え？奏太の家に?』

「一人暮らし始めたいんだとき。断ろうと思えば断れるけど」

優弥は俯き、しばらく考え込む。

そして、勢い良く上を向き奏太を見つめた。

『別にいい！奏太を信じるもん!』

「・・・わかった」

『ほら、行こ?』

優弥はキャンプファイヤーの方を指さしながら、微笑んだ。

2人は無言で、どちらから、というわけでもなく自然と手を繋ぐ。互いの指が、そっと絡み合った。

『でも、よかった。けんけんとのキスで元気なかったわけじゃなかったんだね』

「なんだそれ」

少し元気を取り戻した奏太が、呆れながら呟いた。

#143 彼女。

「短い間だと思うけど、お世話になります」

奏太の部屋で奏太の元カノ、芹沢華蓮はぺこりと頭を下げた。

華蓮の前には、奏太と何故か優弥。

華蓮は優弥をじっとみつめてから、笑顔になった。

「あ！もしかして優弥ちゃん？！久しぶりだね」

胸の少し上まで伸びたつやつやのキレイすぎる黒髪、ぱっちりとした目・・・そして大きい胸。

こんな美人さんを優弥は忘れていたとは。

『う・・・あ、久しぶり・・・』

「でも何で優弥ちゃんがここに？」

華蓮は首を傾げる。

疑問に思うのは当たり前だ。

中学の頃の優弥と奏太は喧嘩ばかり、むしろ喧嘩しかしていないくらい仲。

そんな優弥が奏太の家に居るのだ。

付き合っている、なんて思いもしないだろう。

これをどう説明すればいいものか。

『え、えっと、その・・・痛っ！』

奏太は優弥の髪の毛をひっぱり、すこし引き寄せた。

『ちよつと、何すん・・・』

「・・・こいつ、彼女だから」

「あ、そうだったの？！じゃあ文化祭の日に奏太君と一緒に居たのって優弥ちゃん？」

華蓮はいきなり笑顔で優弥を見た。

『ほえ？！あ、まあ・・・』

「ごめんね・・・。奏太君、お化け屋敷の前で一人でぼーっと立っているように見えたから・・・」

文化祭のタイムテーブルを見るためにたまたま手を離したただけなのだ。

その時に華蓮は奏太が一人だと思い、喫茶店へ連れて行ったのだろう。

「へーえ。あの2人が付き合ってるなんてねえー・・・」

「・・・コーヒーでいい？」

そう呟いて奏太は返事も聞かずに部屋を出て行った。

優弥は華蓮と部屋に2人でとり残されてしまった。

気まずい。気まずすぎる。

その時、奏太のケータイが鳴った。

千秋からの電話だった。

（助かった！千秋だ！！代わりにでてやれ！）

『あゝ！千秋じゃん』（棒読み）』

わざとらしくそう言って電話にでると、千秋が優弥に電話をかけても出なかったので奏太にかけてみた、ということだった。

優弥のケータイは部屋に置いてきてしまったのだ。

気まずい空気を、優弥は千秋との電話でなんとかやり過ごした。

#144 2人きり？

華蓮が奏太の家にやって来てから数週間。

一緒に住んでいる、というのは気に入らない。

だが、奏太の家はすぐ隣。いつでも行けばいいわけだ。
なによりも、奏太を信じる。そう決めたのだ。

『そーうたっ♪学校行こうー!!』

風が少し冷たいが、空は真っ青で快晴だった。

優弥はベランダに出て、隣の家窓をドンドン叩いた。
カーテンが開き、出てきたのは奏太。

「うるさい。今行く」

それだけ言っただけで窓を閉めてしまった。

数週間経っても別に奏太と華蓮は何もない。

優弥はすっかり安心して、家を出る。

『ほんじゃ、行ってきまーす♪奏太ー！早く!!』

奏太も家から出てきて、2人で歩き出す。

——華蓮が寂しそうな表情で見送っているとも知らずに。

昼休み。

相変わらず快晴の空の下、優弥と千秋と静香の3人は屋上でランチ
タイム中だった。

「ほいで、大丈夫なんか？華蓮と奏太は」

千秋がパンをかじりながらチラリと優弥をみる。

その隣で静香も心配そうに卵焼きを食べていた。

『うん！なんともないよ』

優弥は笑顔で答える。

その言葉を聞くと、静香は安心したように一気に笑顔になった。
千秋もにやりと笑った。

「へーえ。じゃああんたらは相変わらずなラブラブなわけね」

優弥はにこにこしながら頷く。

静香も楽しそうに箸をくわえて、千秋の話に乗った。

「じゃあじゃあ、前にゆーちゃんが「体育大会以来奏太が冷たいー」みたいなこと言ってたけど、それも解決？」

優弥は、笑顔のままぴたりとかたまる。

その様子を見た千秋と静香の動きもぴたりと止まった。

「いや、前よりは元気を取り戻したんだけど・・・なかなか2人になれなくて、体育大会以来、結局キスもしてなくて・・・」

優弥のまわりに急に黒い空気が漂いだした（幻覚）

優弥は床にへばりついていじいじとしている。

『どおーセラブラブとは程遠いですよおーだ・・・』

「・・・2人になればいいんだな？」

千秋が急に難しい顔で呟いた。

『・・・え？』

#145 ほんとに2人きり。

「ゆうやああ!!」

放課後。千秋の叫び声が教室に響く。

『な・・・何事?!』

千秋と静香が、大量の荷物を抱えて立っていた。

「ゆーちゃんお願いっ! この荷物1階の被服室に持って行って欲しいの!」

「家庭科の先生に頼まれた! あのババア! 後で呪い殺す」

静香がかなり困った様子で優弥を見上げる。

千秋は少し怒った顔で叫んだ。

そんな2人を見て優弥は目をぱちくりとさせて首を傾げる。

『行ってきたらいいじゃん。行つてらっしゃい』

「え?! えつと! 私等はこれから大つ事な用事があるから! 頼む!」

千秋は無理矢理優弥に荷物を渡した。

『ええ?! こんな大量な荷物私一人じゃ無理だつて!』

「じゃあ、奏太君とでも行つてきて?」

静香は無理矢理荷物を優弥に預け、千秋と2人で教室を去った

『えええー・・・』

被服室へと続く廊下を、優弥は不機嫌な奏太と2人で歩いていた。

「めんどくさ・・・」

奏太がそう呟きながら、被服室のドアを開ける。

『・・・すみません』

被服室に入り、荷物を置く。

さつさと帰ろうと振り向いた時、ドアは勢いよく閉まった。

「・・・え?」

ガチャ

嫌な音がした。

鍵が閉まるような、音。

まさかと思い、優弥は急いでドアを開けようとするが、案の定、ドアは開かなかった。

『ええええ?! 嘘お?! 何でよお!』

優弥が叫んでいると、黒板に小さく文字が書かれているのが見えた。

『・・・?』

” やつと2人になれたじゃん! せいぜい頑張りな! 後で開けに来る

千秋・静香”

そうか書かれていた。

『わあああああ』

優弥は急いで文字を消す。

奏太はそんな優弥を不思議そうに見ながらも、適当な場所に座り込んだ。

『くっ・・・相変わらず冷静な奴め!』

優弥は奏太の隣に座り込んだ。

#146 ヤキモチ。

静かな時間が、流れる。

頑張れと言われても何をどうすればいいか全くわからない。

『・・・』

必死に話題を探すが、こういう時には何も見つからない。

その時、部屋に妙な音が響いた。

優弥の、お腹が鳴ったのだ。そういえばお腹がすいた。

『・・・』

奏太が変な目で優弥を見て、呆れながらため息をつく。

はいはい、あほで悪かったね。

「・・・あいつも、ハラへってんだろうな」

『あいつ？』

優弥は首を傾げる。

「華蓮。あいつ料理できないから。今日家に誰もいないし」

『何それ』

華蓮と奏太が何も無い、そういうのは優弥の勝手な妄想だったのか。そんなわけがないのに、頭の中にはそんな言葉ばかりが流れる。

『私より他の子が心配なわけ？』

「は？」

勿論奏太は、呆れた表情だ。

ため息をついてから、優弥を見た。

「・・・何、妬いてんの？」

その言葉に、優弥の顔は一気に真っ赤になった。

『うつ・・・うるさい！』

「ばかだ」

『元カノと同棲なんかしてりゃあさ』

「それを別にいいって言ったのはお前だろ」

確かにそうだ。奏太を信じると決めたのは自分だ。

「う．．．でも！体育大会頃からちゅーもなきや、心配になるじゃん！」

「……ふん。で、俺にどうしろと？」

「う．．．いじわる．．．．．きつキスしてよ！今までしてくれなかった分、いっぱい！いっぱい．．．」

奏太は呆れた顔で優弥を見る。

そんな優弥の顔は真っ赤だ。自分でもわかる。顔が熱い。

「そんなんでもいいんだ？単純・・・」

呆れる、というよりか馬鹿にしている様子だった。

優弥は真っ赤な顔を少し隠した。

『一！ニ！三！四！五！六！七！八！九！十！』

#147 喧嘩？

恋人達のクリスマスまで、あと1ヶ月となった11月下旬。
寒い廊下を歩き、千秋はようやく教室にたどりつく。

おはよう、そう呟きながら教室に入るはずだった。

「おは・・・」

『意味わかんないっ！！！！』

戸を開いた途端に急に聞こえた大声に、千秋の声は呆気なくかき消された。

大声の主は、優弥だった。

叫んでいる優弥の前にいるのは、奏太。

「・・・何があったんだ？」

千秋はオロオロしながら優弥と奏太を見ている静香の肩を叩いた。

静香は「おはよう」と呟いた後、困った顔で話始めた。

「えっとね・・・今朝・・・」

今朝。優弥は家を出て、すぐに奏太の家に向かった。

『奏太ー！早く行くよ！！電車行っちゃうよ！！』

戸をドンドンと叩くと、面倒そうな顔で出てきたのは奏太。それと、華蓮。

『あ、華蓮ちゃん！おはよう』

「おはよう」

優弥の挨拶に、華蓮も笑顔で返事をした。

『ほら、奏太！早く行くよ！』

優弥が奏太の手を引こうとした、その時だった。

「待って！！」

華蓮がそう叫んで、奏太を引き止めたのだ。

華蓮は一度、ちらりと優弥を見る。

『・・・？』

優弥は首を傾げるが、華蓮はすぐに奏太の方を向き、背伸びをした。

その光景に、優弥は目を疑った。

華蓮は、奏太にキスをしたのだ。

「行つてらっしゃい」

華蓮は笑顔で奏太の背中を押した。

「・・・」

奏太は、何の抵抗も無く、歩き出す。

優弥は急いでその背中を追いかけた。

『ちょ、ちよっと！奏太！！』

#148 別れ？

「・・・ということなんだけどね」

説明を終えた静香は恐る恐る千秋を見上げる。

「・・・あのバカ・・・」

怒ったような、呆れたような表情だ。

そしてまた、優弥の大声と、奏太の相変わらずの冷静な声が聞こえる。

『キスされたんだよ？！ちよつとくらい抵抗しなよ！』

「抵抗したって「ごめん」で済まされるだけだろ。意味ねえよ」

『というか華蓮ちゃんは奏太のことまだ好きなの？！』

「そうなんじゃない？」

『何かあつたの？華蓮ちゃんと』

「・・・勘違いしてた」

奏太は面倒そうな表情になり、昨夜の出来事を話し始めた。

それは、昨夜のこと。

「ねえ、奏太君・・・」

夕食を終えてリビングから出て行こうとした奏太に、華蓮は不意に話しかけた。

「優弥ちゃん、彼女なんて冗談だよね？」

「・・・は？」

「私という彼女がいながら・・・ただの冗談で言っただよね？」

「・・・お前何言って」

「私達ただ連絡しなかっただけじゃん！私奏太君と別れたなんて思っただことないから！」

「二股男、だつてさ。めんどくせ」

そして現在。奏太はため息をついた。

『何その言い方。私と別れたっていうの?』

「それはお前の勝手な想像だろ。想像力豊かだこと」
体育大会以来、指にしていた指輪を優弥は無理矢理外し、奏太の机に叩き付けた。

『もういい。別れればいいんでしょ?!』

優弥はそのまま教室を出て行った。

「2人共この季節にはよく喧嘩するね」

静香が心配そうに奏太に近寄る。

その後ろから呆れた様子の千秋もやってきた。

「お前等何回喧嘩すれば気済むんだよ」

「・・・」

奏太は、無言だ。

静香は心配そうに奏太をじっと見つめた。

「いいの?このままで」

「・・・」

奏太は無言のまま、指輪を握り締めた。

#149 ばか。

「奏太君っ！」

奏太が家に帰り、玄関に入ると突然華蓮が抱きついてきた。

「おかえり♪」

「・・・別にさ」

奏太が呟くと、華蓮は奏太から少し離れ、首を傾げる。

「・・・ん？何？」

「別にあんたがどう思おうが勝手だけど、俺はあんたが彼女だなんて思っていないから」

「・・・え？」

「早くこの家から出て行ってくれない？」

「あつ・・・ごめんなさい」

華蓮は目に涙を浮かべてリビングへ入って行った。

一人になった奏太は、ため息をついた。

「・・・めんどくせ」

『だから！もう知らないってば！』

優弥の部屋で、優弥は携帯に向かって叫んでいた。

千秋から電話が来たのだ。

電話の向こうの千秋は呆れた様子だった。

「奏太も悪気は無かったんだって！」

『もういいの！・・・放つといてよ』

優弥はベッドにダイブして、ため息をついた。

『・・・何してんだろ、私』

そう呟くが、すぐに頭を振った。

『うつん！悪いのは奏太だもん！！』

「・・・だから、奏太に悪気は・・・」

千秋の言葉を遮って、再びため息をついて呟く。

『私がけんけんとキスした時、奏太はすぐに許してくれたのに。』
・ばかだな、私って』

「そう思うなら、早く仲直りしろ」

『でも奏太がつ……』

優弥が叫ぶが、電話はいつの間にか切られていた。

『……』

すでに千秋の声が聞こえなくなった携帯を、優弥は握り締めた。

『……奏太のばか』

#150 女子たち。

いつもの教室が、妙に遠く感じる。

奏太に「別れる」と宣言した翌日。

優弥はやつとのこととでたどり着いた教室の戸に手を伸ばした。

優弥は無理に笑顔を作り、思いきり戸をあけた。

すでに教室にいた千秋と静香に手を振る。

『おはよー♪』

だが、その声は女子達の高い声に、かき消された。

「きゃあー♪」

『?!』

教室の隅に女子がたくさん集まっている。

『・・・何事?』

優弥は千秋に駆け寄り、首を傾げた。

「お前等が別れたからって急に奏太にまとわりつく女子が増えたんだよ」

千秋は呆れながら言った。

『・・・』

「あれ?ねえ、ゆーちゃん」

静香が突然呟き、教室の入り口を指差した。

「あれって・・・」

そこをみると、悠希が廊下で手招きしていた。

『・・・?』

優弥が近づくと、悠希は小声で喋りだす。

「ちよつと!何なの?!あの女子達は!あんた達別れたって本当なの?!」

『えつと・・・』

「・・・ねえ、ちーちゃん」

優弥が悠希の元へ行くのを見ていた静香は、不意に呟いた。

「んー？」

「なんかね、品浜さん見てたら私ね、いいことおもいついちゃった」

「・・・？」

静香は、千秋の耳に顔を近づけてヒソヒソとささやき始める。

「あのね・・・」

「・・・そんなに上手くいくかね？」

「いくと願う！」

そう言って静香は、楽しそうに笑った。

「・・・じゃあ、後で品浜に頼みに行くか」

『・・・え?』

優弥は、思わず呟いた。

朝、教室に行くと見慣れないショートヘアの少女に「おはよう」と言われたのだ。

いや、女ではない。男だ。

女のような顔をしているが、しっかりと男子の制服を着ていた。

『あの・・・どちら様・・・』

優弥が聞くと、少年は急にムスツと不機嫌な顔になった。

そして、無理矢理優弥の腕をつかみ、廊下へと連れて行く。

「僕がわからないの?!」

廊下に出るなり、少年は不機嫌な顔のまま、そう言った。

声に、聞き覚えがある。

『もしかして・・・品浜さん?!?!』

「そうだよ!」

悠希は大きい声を出すな、とでも言うように人差し指を口に当てた。そして、少し頬を赤らめて、語りだす。

「僕、もう男に興味なくなつて。女の格好をするのも楽しくなくなつてきて」

『あんなに似合つてたのに・・・なんで?』

「・・・女の子を、好きになつたからじゃないかな」

恥ずかしそうに、悠希は優弥から目を逸らした。

『お・・・女の子を?!ほんと?!誰、誰?!協力するよ?!』

「・・・ほんとに?」

『うん!で、誰?!』

優弥が期待の目を向けると、悠希は優弥を睨んだ。

「・・・あんただよ!」

『・・・ほえ?』

「だから！あんたが好きになったの！協力してくれるんでしょ？！私と付き合つてよ！」

『え・・・？付き合っ・・・』

「返事はいつでもいいから！！」

そっぴいながら悠希は逃げていった。

『品浜さんが・・・私を？！』

#152 期待。

『・・・』

一生懸命に教科書を読む先生の声など一つも頭に入っていない。
優弥はちらりと斜め前に座る悠希を見た。

（品浜さんが、私を・・・？）

どうすればいいのかわからない。

優弥は頭を抱えて、髪の毛をくしゃくしゃと乱し始めた。

『・・・』

その手を、突然ピタリと止める。

（でも、いつその事品浜さんと付き合っちゃったほうが・・・）

「ゆーうやー！」

突然耳元で千秋の声が聞こえた。

いつの間にか、授業は終わっていたようだ。

「次、体育だよ？行こう？」

千秋の隣で、静香も笑顔で立っている。

『体育・・・。私保健室でサボる。』

そう言つて、優弥は教室を出て行った。

「・・・」

「・・・」

憂鬱そうな顔で教室から出て行く優弥を見ながら、千秋と静香は目を合わせた。

「静香、ほんとに上手くいくのか？」

千秋は急に小声になり、眉間にしわを寄せる。

「上手くいく・・・予定なんだけど」

放課後の教室で、優弥はボーッと窓の外を眺めていた。

隣では千秋と静香が楽しそうに喋っている。

” 奏太は忘れて、品浜さんと付き合う ”

もしかしたら、それもいいのかもしれない。でも。

心のどこかでは、信じていた。いつか奏太が「ごめん」とでも言うて戻ってきてくれる、と。

（・・・あー、もう！！こんなだから駄目なんじゃん！！）
期待するのはもうやめよう。

もしかしたら奏太も優弥と別れてしまった方が楽なのかもしれない。

『迷惑ばかり・・・かけてたしね』

優弥が小さく呟いた直後、突然女子達の叫び声が教室に響いた。

「ちよつと！何あれ！！」

「嘘でしょー?!」

女子達が揃って窓の外を見る。

『・・・』

窓の外から見える校門には、奏太と華蓮の姿があった。

#153 涙。

奏太が校門まで歩くと、そこには笑顔で待っている華蓮。

華蓮が奏太の姿を見つけると、すぐに抱きついてきた。

「来ちゃった」おかえり！」

優弥はくだらないことで怒るし、華蓮は自分が彼女だと勘違いしたまま。

きつと、言葉一つで簡単に解決すること。

でも正直、めんどくさい。

なんであんな、くだらないことで怒る？

別に他の奴とキスしようがしまいが、結局好きなのは――・・・

「あ・・・ごめんなさい。彼女でもないのに抱きついちゃって・・・

」

華蓮は、以前の奏太の言葉を思い出したかのように奏太から離れた。

「めんどくさ。・・・いいよ、どうでも」

奏太はため息をついて、華蓮の頭をそつと撫でる。

「帰ろ？」

そう呟いた華蓮が奏太の手を握る。

その手を、握り返した。

もしかしたらこのまま優弥と別れた方が、優弥も楽になるのかもしれない。

「・・・」

教室で女子達が騒ぐ中、優弥は相変わらずぼーっと校門を眺める。
2人が抱き合い、そして手を繋いだ。

あの2人は、また付き合い始めたのかもしれない。

教室にいた女子達は、みんな揃って走って校門へと向かっていく。

「・・・優弥、大丈夫か」

「そろそろ帰ろっ？」

気が付けば、千秋と静香が心配そうに優弥の顔を覗き込んでいた。

『あ、うん。大丈夫！あ、私用事あるから先帰ってて！』

本当は、用事なんてない。なんとなく、帰る気がしなかった。

千秋と静香は不思議そうにしながらも、教室から出て行った。

誰も居なくなつた教室。

優弥は奏太の机の所まで歩いた。

そして、そつと机を撫でる。

「・・・何してんの？」

誰もいなかったはずの教室には、いつの間にか悠希がいた。
不思議そうに優弥の元へ向かつてきた。

『べ、別に！そろそろ帰ろうかなって！！』

「・・・さっきの校門。あんたも見たんでしょう？」

優弥は、何も答えなかった。

悠希はそつと優弥の頭を撫でる。

気が付くと、優弥の頬には涙が伝っていた。

「っ・・・」

悠希は、優弥を思い切り抱きしめる。

何も言わずに、頭を撫で続けてくれた。

『・・・っ・・・うっ・・・』

優弥は、子供の様に泣きじゃくつた。

#154 名前。

優弥を置いて先に帰った千秋と静香は、駅前の喫茶店に居た。

「・・・静香の作戦。上手く行ってるのか？」

千秋は水を飲みながら呟いた。

「・・・そのつもりだったんだけどなあ・・・」

静香の作戦。

それは女装を止めた悠希と仲良くする優弥に奏太がヤキモチ。

それで「こいつは俺んだ！」的な展開になる予定だった。

でもそんな上手くは行かず、お互いがだんだん離れていった。

しゅんとする静香を見た千秋は、水を飲み干し、指を鳴らした。

「ちよつといい考えがあるんだけど」

「・・・？」

翌日から、優弥は悠希と居ることが増えた。

屋上で食べていたお弁当を片付け、悠希と他愛も無い話をする。

奏太の事は忘れて、悠希と付き合うのもいいのかもしれない。

そしたら、奏太とも友達に戻る日が来るのかもしれない。

「・・・ねえ、品浜さん」

「ちよつと！その”品浜さん”ってのやめない？」

「何て呼べばいいの？」

「悠希、でいいよ。優弥」

悠希は、笑って優弥の名を呼んだ。

「じゃあ、悠希！」

「それでよし！・・・そろそろ教室もどろっか」

「うん」

悠希は立ち上がった歩き始める。

優弥は、自分の手をぎゅっと握り締めた。

奏太は、忘れてしまおう。

『ねえ、しな・・・悠希!!』

「何？」

悠希は振り返り、首を傾げる。

『いいよ。・・・私と、付き合ってよ』

微かだが、悠希は目を見開いた。

『・・・？聞してる？』

「あ、うん。聞してる。ほんとにいいの？」

『うん、いいよ』

優弥は、悠希の隣に並んだ。

#155 本気？

放課後。教室には悠希と千秋と静香だけが残っている。
沈黙の中、先に口を開いたのは悠希だった。

「・・・優弥、私と付き合うつてさ」

「別にいいんじゃない？どうせまだ奏太は好きだろうし。作戦は上手いくよ」

千秋が鞆を持ちながら言った。

「そんなに上手くいくかな、あんたの作戦」

「どういう意味だよ」

「僕、結構本気なんだよね」

「は・・・？」

そして悠希は、意味深な笑顔を見せ、帰っていった。

気が付けば、12月23日。クリスマスイブの前日。

24日と25日の悠希は都合が悪いので23日の今日、優弥は悠希の家に遊びに来ていた。

『メリークリスマス♪』

「・・・優弥」

他愛も無い話をして優弥がはしゃいでいると、悠希は突然優弥の肩をつかんだ。

『・・・？何？』

悠希は、心配そうな表情で優弥を見つめる。

『何、どうしたの？！悠希？』

悠希はそつと優弥に顔を近付け、キスをした。

『——？！嫌っ・・・』

優弥は思わず、悠希を突き飛ばしてしまった。

『あ・・・』

そして、後悔する。

奏太の事は忘れると決めたのに、申し訳ないという気持ちがこみ上げてくる。

悠希は、優弥を睨みつけた。

「あんた、まだ奏太君好きなんでしょ」

「それはっ・・・」

「忘れるために私を利用しただけ？」

「っ・・・ごめんなさい」

「そんな中途半端な気持ちで付き合ってほしくない！」

悠希が叫んだ直後、優弥のケータイが鳴り響く。

千秋からの電話だった。

「あ、ちよつとごめん・・・もしもし？」

電話の向こうからは、慌てた様子の千秋の声。

そして優弥は、耳を疑った。

「え、千秋、今・・・何て？」

「だからっ・・・奏太が駅前で事故ったって・・・」

優弥はすぐにケータイを鞆に放り投げ、チラリと悠希を見た。

「いいよ。どうせ奏太君のところでしょ」

「っ・・・ごめんねっ！！」

優弥は悠希の家を飛び出し、駅前に向かった。

外は雨が降っている。確か今日は雷だと聞いた気がする。

優弥は傘も差さずに、駅前に向かって、走り続けた。

#156 デート？

クリスマススイブ前日。

現在奏太の家に集まって男3人で騒いでいた。
さつきから竜がくだらない話を続けている。

「・・・そういえばさー・・・」

急に、深刻な表情になって奏太を見た。

「・・・何」

「今日、ゆーやん悠希とデートするんだって。駅前で待ち合わせて」

「・・・だから、何。もう関係ないし」

「奏ちゃん！」

竜は奏太を無理矢理立たせた。

そして肩をがしっとつかむ。

「俺は奏ちゃんの彼女はゆーやんであつてほしいの！-」

「・・・めんどくせ」

「まだ好きなんですよ?!」

「・・・」

無理矢理奏太を部屋から追い出し、背中を押した。

「行つてきなよ!! 仲直りしてきなよ!」

「奏ちゃん、忘れ物」

叶は、笑顔で優弥の指輪を持ってきた。

「・・・」

「僕達ここで待ってるから。今度は優ちゃん連れて戻って来てね」

「・・・・・・」

奏太は無言のまま、歩き出した。

「・・・奏太君」

階段を下りたところでは、華蓮が心配そうに見ていた。

「どこいくの？」

「・・・ごめん。俺アンタはもう好きになれない」

「っ……」

「俺が好きなのは……俺の彼女はアイツだから」

奏太はそう言って、走り出した。

外へ出て、途中で傘を忘れたことに気が付いたが、もう戻っている暇はない。

駅前に向かって、走り出した。

#157 忘れられない。

「・・・あれ？」

優弥は駅前にたどり着いたが、事故が起こっているような様子は無かった。

「何処?! 奏太・・・」

降り続く雨の中、優弥は駅前を走りまわった。

奏太のことは、忘れてしまおうと思った。

何度も、忘れようとした。

だけど、忘れられなかった。忘れたく無かった。

それくらい、奏太が大好きなんだ。

大好きだから、諦められないんだ。

「っ・・・何処っ・・・」

刹那、車のクラクションが鳴り響く。

気が付けば、優弥は信号も見ずに横断歩道を渡っていた。

「え・・・?」

「っ・・・はあ、はあ」

奏太は、息を切らしながら駅前を見渡した。

「・・・?」

きよろきよろとしながら、優弥の姿を探す。

「・・・!」

優弥は、横断歩道のど真ん中に居た。

車のクラクションが鳴り響く。

「・・・あの馬鹿っ・・・」

奏太は横断歩道に向かって全力で走り、優弥に向かって手を伸ばした。

「ひゃっ?!」

優弥の肩をつかみ、そのまま引き寄せた。

なんとか事故にはならず、車は走り去って行った。

奏太の腕の中にすっぽりと収まった優弥を、きつく抱きしめる。
驚いた優弥は、そのまま振り向いた。

『・・・奏・・・太？』

振り向いた先には、奏太がいた。

あわてて目を逸らす。

「・・・何、やってんだよ」

『・・・ねえ、奏太』

「・・・？」

『奏太が華蓮ちゃんの事好きでもいいからさ、せめて友達でいない？』

「は？」

『だって、何度も忘れようと思ったのに・・・だめだったんだもん。私の片想いでもいいから、側に居てよ』

優弥の頬には、雨と共に涙が伝った。

#158 感謝。

”せめて友達でいたい”

優弥の言葉を聞いて、奏太の腕の力が少し強くなった。

奏太も優弥も、雨にぬれていて密着した奏太の肌は冷たい。

「俺だって、同じだった」

「ほえ？」

「忘れようと思ったけど、忘れられなくて」

「え……？」

「……ごめん」

奏太が謝ったところで、優弥は勢いよく奏太から離れ、肩をがしつとつかんだ。

「そうだ！忘れてた！！奏太、怪我は？！」

「……は？」

「千秋から奏太が事故にあっただって聞いて……」

「……は？」

「え？」

「俺ずつと家にいたし。お前が悠希とここで待ち合わせしてるって聞いたから来ただけ……」

そこで、2人ともはっと気付く。

「騙された……」

2人は、騙されていたのだ。

優弥と奏太を仲直りさせようと企んだ千秋達に。

「……帰るか」

奏太は、優弥に手を差し伸べた。

竜たちの待っている奏太の家。

玄関には千秋と静香の靴もあった。

2人で廊下を歩いていると、奏太が急に立ち止まった。

『何？急に止まらないでよ』

「忘れてた。・・・はい」

奏太は、優弥に指輪を突きつけた。

『あ、指輪・・・』

だが優弥は受け取らずに、左手を出した。

『奏太がはめさしてよ』

「は？・・・めんどくさ」

奏太はそつと、優弥の薬指に指輪をはめた。

『・・・結婚式みたい』

「・・・ばーか」

しばらく、左手を眺めた優弥は、奏太に抱きついた。

『千秋達に感謝しなくちゃね』

「・・・だな」

優弥が笑顔で奏太を見上げると、奏太はそつと、優弥の頬に手を添えた。

『なんかごめんね。くだらないことで怒っちゃって、しかも勢いとはいえ別れる、なんて・・・』

「・・・別に」

そして、そつと唇を重ねた。

「んんっ……」

期末テストが終わった。放課後、優弥は思いつき背伸びをする。

「やっとおわったあ……」

マフラーを巻いて寒い廊下を歩き、玄関へと向かった。

周りをきよるきよると見渡す。奏太がいない。

最近放課後になると突然居なくなる。

「優弥あー」

不意に後ろから千秋の声が聞こえた。

「何？」

振り向こうとした途端、千秋は優弥の隣に並んだ。

「竜見なかったか？」

「それが奏太も居ないんだよね」

「ま、いつか。じゃ、今日用あるから先帰るっ！」

「うんー。ばいばーい」

千秋は手を振って廊下を走っていった。

「……」

一人、廊下に取り残された優弥は携帯を取り出し、奏太に電話をかけてみた。

数秒呼び出し音になった後、面倒そうな奏太の声が携帯の向こうから聞こえてくる。

「……何」

「あ、奏太？今何処にいの？一緒に帰ろうよ」

「……あー……きよ」

奏太の言葉が突然聞こえなくなった。

と思つたら、携帯の向こうからは竜の声。

竜に携帯を取られたのだろう。

「もんもん？！ゆーやん？！助けてよお！！俺今図書室に」

と、突然竜の言葉が切れる。

奏太がケータイを取り返したようだ。

「・・・用あるから一人で帰れ」

そこで電話は切れてしまった。

「・・・図書室？」

優弥は首を傾げ、とりあえず図書室に向かった。

#160 お勉強。

優弥が図書室へ向かうと、図書室前には女子の大群がいた。

「奏太くーん！私にも教えてー！！」

「竜くーん！私が教えてあげるー！」

「きゃー！ヒナちゃんあーん！」

必死な女子達の姿に、優弥は思わず立ち止まった。

『奏太君？竜君？ヒナちゃん？』

因みに、ヒナちゃんはおそらくカナのことだろう。

苗字が日向なので中学時代はそう呼ばれていたのだ。

そんなことは置いといて。

ここに奏太がいるのは確か。

優弥は女子達の間を無理矢理通り、図書室のドアを開けた。

『ちよつと奏太っ！何して・・・』

奏太達はなんと、勉強していた。

図書室の机で、奏太と竜が向かい合い、叶が奏太の隣に座っている。勉強している、というよりは竜が勉強を教えられているのだろう。

「ゆーやん！ちよつとゆーやんも俺にべんきょー教えてよ！」

竜がぶんぶんと手を振ってくる。

優弥は竜の隣に立ち、目の前にいる奏太をじっとみつめる。

奏太は無反応だったので、優弥は奏太がかけていた眼鏡を無理矢理外した。

「・・・何」

ようやく奏太が優弥の方を向く。

『コンタクトじゃないの？』

「・・・さっき落とした」

『こんなところで勉強してたの？』

「竜が泣きついてくるから・・・」

『一緒に帰ろうよ』

「・・・」

奏太は、チラリと竜を見る。

竜はその視線に気付き、広げていたノートを閉じた。

「そろそろ下校時刻も迫ってるし・・・奏ちゃん家で勉強しようか」

「何でそうなるんだよ」

「まあ、ここじゃ騒がしいしね」

そう言っ葉はチラリと女子達の方を見た。

#161 寂しい？

「お邪魔しましたぁー」

嵐が去ったかの様な気分だ。

奏太の家でたつぷりと勉強すると竜と叶は帰っていった。

「竜があそこあでバカだったとは・・・」

奏太の部屋に残った優弥はため息まじりに呟く。

奏太も疲れきった様子で優弥の隣に座った。

「普段のあいっ見てればわかるだろ」

「まあね・・・にしても、まさか勉強してるとは」

「・・・受験生だし」

そついえば受験生だ。

優弥は勉強が面倒なので勉強しなくても実力で十分いけるような大
学を志望校にしている。

その為、受験生ということもすっかり忘れていた。

「・・・そっか。じゃあ、あんまり遊べなくなるの？」

「かもね」

「・・・」

寂しい、口には出さないがそう思わないわけが無い。

家が隣でよかったと改めて思う。

優弥がチラリと奏太を見上げる。

その視線に気付いた奏太も、チラリと優弥を見た。

「・・・？」

「いやっ、別に・・・」

優弥が目を逸らそうとした瞬間、奏太は優弥と唇を重ねた。

「っ・・・／／／」

いつもより長く、深い。

こういうキスは、未だに慣れない。

優弥が奏太の服をぎゅっとなつかむと、奏太はそつと唇を離し、目を

逸らした。

「・・・受験終わったら、続きすればいいじゃん」

『続っ・・・』

それ以降は、奏太は目を合わせてくれなかった。なので優弥も自分の家に戻った。

#162 風邪？

『あけおめえー』

クリスマスもお正月も過ぎて、いつの間にやら新学期。

優弥は寒い廊下を少し早歩きで進み、教室の戸をあけた。

「ゆーちゃん！あけおめえー！」

「おー優弥！おはよー」

千秋と静香が手を振ってきた。

2人に手を振り返し、教室をきよろきよろと見渡す。

「・・・？優弥、どした？」

千秋が不思議そうに優弥の顔を覗き込んだ。

『あつ、いや。奏太の部屋の窓叩いても出てくる様子無かったから先に学校来てると思ったんだけど・・・』

「ゆーちゃん知らないの？」

竜がいきなり千秋の後ろから登場してきた。

『何を？』

「奏ちゃん、風邪ひいたんだって」

『風邪?!』

放課後。優弥は当然のように奏太の家に向かった。

玄関でチャイムを鳴らしても誰も出ない。

両親は何処かへ出掛けたのだろうか？

『奏太あー？入るよー!』

優弥はそう叫んで家の中に入った。

階段を上がり、奏太の部屋の前で立ち止まる。

ドアをノックしてから、優弥はそつとドアを開けた。

『奏太ー・・・?』

部屋の中を覗き込むと、奏太はベッドの上で布団に包まって眠っていた。

『・・・』

優弥はベッドの近くに座り込み、奏太の顔をじっと眺める。

『・・・ちくしょう。綺麗な顔してんなあ』

頬をぶにぶにと触ってみるが起きる様子がない。

『・・・』

そのうち、いつの間にか優弥は眠ってしまった。

#161 お見舞い。

「・・・？」

ふと、奏太は目を覚ました。

「・・・」

確か朝、熱があることに気付いて、暇だからボーっとしてたらいつの間にかベッドで寝てた。

奏太は、朝からの出来事を思い出してみる。

『ん・・・』

突然、優弥の声が聞こえた。

「・・・？」

床に座り込んでベッドを枕代わりに寝ている優弥がいた。

「・・・なんでいんだよ」

奏太は起き上がり、ため息をつきながら優弥のおでこを触ってみる。うつってはいないようだ。

「・・・あたま痛」

「・・・あたま痛」

遠くで、声がする。奏太の声。

『・・・奏太?!』

突然優弥は目を覚ました。

「・・・何」

奏太は、目の前に居た。

『あつ・・・だ、大丈夫なの?!両親は?華蓮ちゃんとかは?』

「皆して華蓮の家行った」

『もう少しで試験だよ?』

「・・・知ってる」

優弥は立ち上がり、腕まくりをした。

『よし!私何か作るよ!!!』

「・・・怖いから知らない」

『どーいう意味?!』

「・・・さあね」

#164 ピアス。

静かな廊下にバタバタと足音が響いた。

優弥は寒い廊下を教室に向かって走る。

『おっはようー!!!!』

教室の戸を思い切りあけて叫ぶと、千秋と静香が呆れた顔で「おはよう」と言ってきた。

優弥のテンションが高いのも仕方が無い。

受験が終わり、しかもいつもの6人全員が無事に合格したのだ。

「・・・朝から元気な奴」

突然後ろから声が聞こえて、優弥はつい振り返るとそこには奏太が立っていた。

その後ろには竜と叶もいる。

『えへへ。元気が一番ー♪』

「みんなおつかれーだねえ」

竜が奏太の肩に肘を置いて楽しそうに言った。叶はさっきからずっと拍手をしている。

『受験から開放されたようー!!』

大して勉強もしていないが、妙な開放感。優弥はぎゅっと奏太に抱きついた。

だが、ここは教室なので奏太は無理矢理引き離そうとしている。

『あれ？奏太新しいピアス買ったの？』

優弥が奏太を見上げると、奏太の耳には見たことの無いピアス。

ずっと拍手をしていた叶が手を止め、にこにこしながら奏太を見て説明を始めた。

「そのピアスずっと欲しかったのに何処にも無くて、この前やっと見つけたんだよね！最後の1個だった！」

『でも奏太？今日1時間目の先生、ピアス外してないと何かとうるさいよ?』

「・・・知ってる。今外すし」

不機嫌そうにそう呟いてピアスを取り、ポケットにしまった。

そして1限後。

千秋と叶がパンを買いに行くといっているのでそれに付き合っていた帰りの廊下を歩いていた。

『パンなんて給食の前でいいじゃん。まだ1時間目終わったところだよー？』

優弥がそう言っていると千秋は「早弁のため！」と叶と一緒に言ってきた。「ん？」

一番後ろを歩いていた竜は、奏太の制服のポケットから何かが落ちたのに気付いた。

立ち止まって拾うと、それは朝に話していたピアスだった。

奏太に渡そうと叫ぼうとした瞬間、突然誰かに肩をつかまれた。

「もうう！なあに？俺奏ちゃんに用が・・・」

振り向いた先に居たのは、先生。

奏太達は竜が立ち止まったことにも気付かずにスタスタと歩いていてしまった。

先生は服装を直せ、だとか、そんなんで大学受かったのも奇跡、だとか長々とお説教を始める。

そのうち、2時間目が始まるチャイムが鳴った。

（・・・ピアス、あとででいつか）

#165　そして事件は起こった。

そして事件は起こった。

昼休みのこと。お弁当を片付けた竜に奏太が近づいてきた。

「・・・竜、ピアス知らね？」

「ぴあす？ああ！それならさっき奏ちゃん落としてたから渡そうと思つて拾つ・・・」

ごそごとポケットを探り始めた竜の動きは、急に止まった。

近くにいた優弥が「どうしたの？」と聞くと竜はゆっくりと優弥の方を向いた。

「ぼけつと・・・穴あいてた」

「・・・は？」

『・・・ピアス、落としたつてこと？』

優弥がおそろおそろ聞くと、竜はこくりと頷いた。

一気にその場が静まり返る。

「・・・意味わかんねえし」

沈黙を破つたのは奏太だった。

奏太は鞆を持つて教室を出て行こうとしていた。

「いつ・・・意味わかんねえしつて・・・落とした方が悪いんじゃない！！」

「落としたのはお前も一緒だろ」

奏太は教室を出て行き、スタスタと廊下を歩いていく。

「・・・っ！！奏ちゃんなんかもう知らないもんねえーっ！！」

教室から顔を出して竜が叫んだ。

「・・・ガキかお前等は」

千秋が呆れながら言うと、竜は青ざめた顔で振り返った。

「・・・どうしよう？！もう知らないなんて言っちゃったよ！」

「後先考えねえ奴だな」

『とりあえずピアス探そ。もう誰かが拾つてるかもしれないけど』

優弥はため息をついて呟いた。

『んゝ・・・やっぱりないか』

竜がピアスを拾ったという場所に来てみたが、ピアスは無かった。誰かが拾ってしまったのだろう。

「あーもう、どうすんだよ」

千秋はため息をついた。

静香と叶はまだ必死にきよろきよろとピアスを探している。

「あれ・・・？先輩？」

突然の声に優弥が振り向くと、けんけんと小雪ちゃんが立っていた。

#166 ピアスのありか

「・・・ピアス？」

優弥は廊下でばったりと出会ったけんけんと小雪ちゃんに事情を話した。

だが、けんけんは「知りません」と首を横に振る。

『あーあ。どこいつちゃったんだろ』

優弥はがっかりした様子で肩を落とす。

そんな優弥をみて、けんけんの後ろにへばりついていた小雪がそつと小さく手を挙げた。

「あ、あの・・・」

「・・・？どした？」

千秋が首を傾げると、小雪は少し困ったような様子で喋り始める。

「今朝、友達と廊下を歩いてたら前に竜先輩がいて・・・」

それは、1限後の出来事らしい。

優弥達がちょうど、皆でパンを買いに行った時。

「あ、あれ奏太先輩と、竜先輩とカナ先輩じゃない？！」

友達2人と一緒に小雪が廊下を歩いていると、友達2人が奏太達3人を見て騒ぎ出したのだ。

「ほんとだ！かつこいいね！！」

だが、その時竜は先生に捕まり、奏太達は先に歩いていつてしまった。

「あ、竜先輩が先生に捕まってる」

「・・・あれ？今ポケットから何か落ちなかった？」

小雪の友人2人はじーっと竜を見つめる。

周りから見れば相当怪しかっただろう。

数分後。ようやく竜は先生に開放され、その場を去って行く。それと同時に、友人2人は竜のいたところへ走って行った。

「・・・ピアス？」

竜が落としたのは、ピアスだった。

それを拾った友人2人は目を合わせ、少し笑った。

「もしかして・・・竜先輩のかな？」

「そうかなそうかな?!」

「・・・貰っちゃっても、いいよね？」

「ばれないよね」

そうして、友人2人は竜の落としたピアスを持ち去ってしまった。

「え?!だめだよ!!ちゃんと返さないと・・・」

小雪はそう叫ぶが、友人2人は「絶対秘密だからね!!」と言って返す気は全くなさそうだった。

「・・・ということがあったんですが、もしかしてそのピアスかも・・・」

全てを話し終えた小雪は、かなり申し訳なさそうだった。

『・・・絶対それだ』

優弥が呟くと、小雪は小さい声で「すいません、止められなくて」と頭を下げた。

「・・・とりあえず、その友達のところ行ってみよう?」

今までずっと諦めずにピアスを探していた静香がようやく諦め、そう提案した。

#167 大事なモノ。

「「ピアス・・・？」」

1年生の教室。

こんな場所に3年生である優弥達が大勢で来ると目立ってしようがない。

だが、ピアスの為だから仕方が無い。

小雪の友人2人を呼び出し、ピアスの事を尋ねると、友人2人はかなり困った様子だった。

『うん。竜の落としたピアス拾ったでしょ？返してくれない？』

優弥が手を出すと、友人2人は小雪を睨みつけた。

「ちよつと！小雪が言っただの？！」

「秘密って言っただじゃん！！」

「ごっ・・・ごめん」

友人2人に攻められた小雪はけんけんの後ろに隠れてしまった。

けんけんは小雪のあたまをそつと撫でている。

『・・・小雪ちゃんは何も悪くないよ。いいから、ピアス返して欲しいの』

優弥が再び手を出しても、返してくれる様子は無かった。

「そ、そんなの知らないもん！！」

「小雪が嘘ついてるんでしょ！」

小雪が嘘なんてつくわけがない。

絶対、この2人がピアスを持っているはずだ。

「・・・そのピアス、奏太の大事な物だから。・・・返してくれない？」

めずらしく竜が真面目そうな表情で、手を出した。

「・・・」

その表情に、友人2人もさすがに諦めたのか「ごめんなさい」と言っ
ってピアスを渡してくれた。

「・・・ありがとう」

指輪を受け取った竜は、指輪を握り締め、寂しそうな顔で笑った。

#168 仲なおり。

奏太のピアスを取り返した翌日。

4限目の授業が終了したが、奏太はまだ学校には来ていない。

「優弥、朝迎えに行かなかったのかー？」

お弁当を持った千秋が優弥の前の席に座った。

静香もお弁当を持ってその辺の机をくつつけて席に座り込む。

『行ったんだけど……。眠いから先に行けっ』

今朝、一応奏太を迎えにいったが電話で「眠いから先に行け」と言われてしまった。

優弥はそのことを千秋と静香に話すが、突然千秋の頭に竜があごを乗せてきた。

「ねえー、そーちゃんまだあー？」

「……。重い」

千秋がうんざりした顔で言い放つと、叶もケータイ片手にやってくる。

「もうすぐ行くってメールは来たんだけど……」

「……。あれ？奏太君？」

突然、静香が廊下を指さした。

そこをみると、廊下を歩く奏太の姿が見えた。

ようやくやって来たようだ。

と、優弥達が言う暇もなく、竜は廊下側の窓を勢い良く開けて、そのまま廊下へ飛び出した。

『……。わお』

「窓から出てった……」

「ドアから出てけよ……」

優弥達が唖然としている一方。

窓から飛び出した竜はちょうどその先に居た奏太にぶつかり、廊下に2人でそのまま倒れこんでいた。

「・・・竜、重い」

奏太が竜の頭を軽く叩くと、竜はきちんと正座をして、口を開く。

「・・・奏太、これ」

取り返したピアスを渡すと、奏太は少しの間受け取ったそれを見つめて、少し照れた様子でポケットにしまった。

「・・・別に、よかつたのに」

「奏ちゃんなんか知らない、とか言っただけど、あんなの嘘だからね
！！」

「・・・もともと、あんなの本気にしてねえし」

「そっ・・・」

竜が嬉しそうな顔をした瞬間、奏太は嫌な予感がした。

それは、見事に的中。

「・・・奏ちゃん！！！！」

勢い良く、竜は奏太に抱きついた。

当然、周りからは冷たい目で見られている。

「・・・きもい」

奏太が言うつと竜はしぶしぶと奏太から離れた。

#169 卒業式。

体育館には、校長先生の長い話声が響いている。

おそらく、その話の内容がしつかりと頭に入っている生徒は少ないだろう。

その生徒達は、珍しく制服をしつかりと着こなしている。

今日は、優弥達の卒業式なのだ。

『おわったよー！！』

卒業式が終わり、教室での先生の長い話も終わって玄関に出ると、優弥は思い切り伸びをした。

皆はすぐにネクタイを緩めたりボタンを外したりし始める。

「おい！優弥！！写真撮ろー！！」

その声のした方を見ると、千秋がカメラを持ってクラス的女子達と集まっていた。

『はいはい』

優弥もすぐにそこへ混ざり、何枚か写真を撮る。

すると、クラスメイト達は次々に「さみしいね」と言い出した。

そういえば、大学へ行けばもう奏太はいないし、隣の家にも居なくなる。

毎日会うことは、出来なくなるのだ。

『・・・千秋、奏太は？』

優弥が千秋に聞くと、千秋は「あっち」と言ってたくさんの女子のいる方を指差した。

「奏太も竜も叶もあの中」

同じクラスの子や違うクラスの子、後輩までもが奏太達を取り囲んでいたのだ。

『・・・』

優弥が呆気にとられていると、千秋と静香は女子の大群の中に行っ

てしまった。

『うう・・・』

だが優弥には、あんなにも大勢の女子を掻き分けて奏太の元へ行く自身など全く無かった。

しばらく考えこむが、答えなんかでない。

でも・・・。

『・・・行くか』

優弥は、寒いのに腕まくりをして女子の大群の元へと向かった。何度も謝りながら進む。

その時、突然誰かの足に躓いってしまった。

転ぶ。そう思った瞬間、誰かに腕を引っ張られ、引き寄せられ、なんとか転ばずに済んだ。

『あ・・・ありが』

お礼を言おうと顔を見ると、奏太だった。

「・・・何してんの。何か用？」

#170 やっぱり寂しい。

「何か用？」

奏太に聞かれ、優弥は一瞬戸惑った。

寂しいと思ったのはいいが、何と言うのかは全く考えてなかった。

『えっと……卒業おめでとう！』

「それはお前もだろ」

『ああ！そつか。えっと……大学はちょっと遠いんだよね？』

「……そんな遠くねえよ。電車ですぐだし。家は出て行くけど」

『そうなんだ！頑張つてね！！』

優弥は、無理矢理笑顔を作った。

ちゃんと、話せているだろうか不安になる。

『えっと……えっと』

必死に次の話題を探していると、奏太はポンポンと優弥の頭を軽く叩いた。

「……何かいいことあるなら言えよ」

『あ……』

涙を堪え、奏太を見上げる。

だが、堪え切れなかった。

涙を隠すように優弥は奏太の胸に飛び込んだ。

『……寂しいよお……』

優弥は、奏太の制服を強く握り締める。

『……浮気とかしないよね？』

「……そうなんじゃない？」

『奏太モテるからっ……浮気なんてし放題じゃんかあっ……』

「……し放題……」

『そうだよっ！』

「……ていうかさ、いい加減離れてくれない？目立つんだけど」

『へ？』

周りを見渡してみると、にやにやとしながら見守る生徒達がたくさんいた。

『あつ・・・ごめん』

生徒達からは、「ちゅーしろー！」と言う声も聞こえてくる。

だが、奏太がそんなことをするわけがなく、優弥の手を引っ張って歩き始めた。

#171 スキ。

「いえーい♪」

「歌いまーす♪」

卒業式の後には、いつもの6人でカラオケ。

皆が盛り上がる中、優弥は、1人で歌本を見ている奏太の元へ近寄った。

「・・・これ入れといて」

そう言つて奏太は優弥に歌本を渡した。

奏太に言われた曲を入れると、優弥はじつと奏太を見つめた。

「・・・何」

「あつ、いや・・・ほんとに、浮気なんかしちや嫌だからね？」

そう呟くと、奏太は小さくため息をついてポケットの中を探り始めた。

「・・・はい」

奏太は手をグーにしたまま優弥の方へ向けた。

優弥が首を傾げると、奏太は手をそつと開いた。

「・・・あ」

そこにあつたのは、鍵だった。

おそらく、奏太が一人暮らしする部屋の合鍵だろう

「・・・そんなに心配なら、いつでも来ればいいじゃん」

その鍵を見つめながら、優弥はまた泣いた。

「・・・うんっ・・・」

「何回泣くの」

奏太は制服の袖で優弥の涙を拭った。

「・・・だつてえ」

「・・・ばーか」

少し照れた様子の奏太は、そつと優弥の頬に手を添え、唇を重ねる。

「さっすが静香、美声だねえ」

千秋は歌い終えた静香に拍手をした

「そんなことないよっ！えっと、次力ナちゃん？」

静香はおどおどしながら叶にマイクを手渡す。

「うん、ありがと！・・・あ！ほら、奏ちゃんも・・・」

叶が奏太の方を振り向こうとすると、竜に止められた。

「お子様にはまだ早いからあのままラブラブにしておきんしゃい」

「おっ、お子様?!」

ただのキスシーンだが、4人は何も見なかったということにした。

『ねえ、奏太?』

「・・・ん？」

『ありがとね』

「・・・?」

奏太を大好きになつてから、泣きたいこともたくさんあったけど、それでも幸せだったと思える。

奏太と出会えたことに、側に居てくれたことに感謝してる。

一言なんかでは伝わりきらないかもしれないけど、

『・・・大好きだからね』

「・・・知ってるし」

優弥は、奏太に思い切り抱きついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4768i/>

Love Addiction

2010年10月17日01時41分発行